

布教研究所報

昭和60年3月

第2号

浄土宗布教研究所

布教研究所報

昭和60年3月

第2号

浄土宗布教研究所

目次

集中研究会指導講義

『阿弥陀経』に聞く……………坪井俊映……………3

研究所員研究成果報告

浄土宗ボーイスカウトの展開……………東海林良雲……………33

——蔵王山嶺にこだました南無阿弥陀仏の大合唱とその後——

岩手教区における児童教化活動の現状……………谷地玄雅……………38

お十夜の説き方の新しい試み……………渋谷康海……………42

——真如堂縁起批判——

檀信徒、青壮年層対象の組織的教化について……………西山信光……………46

テレホン法話について……………大門俊正……………51

一念するために……………山本雄毅……………56

——一つのアプローチ——

法然上人の宿業観の一考察……………	西岡信孝……………	61
源智上人に関する布教上の試論……………	羽田恵三……………	65
助業を大切に……………	村中成信……………	71
——自坊の教化活動から得たもの——		
百万遍知恩寺阿弥陀経碑の布教上の活用について……………	安藤雅寛……………	76
少年非行と宗教教育……………	金子貫司……………	80
女子少年の教誨に携って……………	岡崎寛豊……………	85
——宗教教誨に対するアンケート調査——		
教学布教大会意見発表		
三上人遠忌をどうむかえるか……………		91
彙報		
あとがき……………	板垣隆寛……………	133
編集後記……………		134

集中研究会指導講義

『阿彌陀經』に聞く

佛敎大学敎授

坪

井

俊

映

申すまでもございませぬ。阿弥陀経は、浄土宗の所依の經典の一つでございまして、今から約千五百年ほど前に、鳩摩羅什という人の翻訳しましたお経でございませぬ。ですから、現在でいいますと、千五百年前のいわゆる中国語を、そのまま我々が読んでおる。したがって、むづかしい文字があり、読みにくいというのも無理からぬことであると思ひます。

現代、我々が読んでいる阿弥陀経ですが、日本独特というのもおかしいかも知れませんが、中国の方々、韓国の方々も阿弥陀経をお読みになるのですが、お経の特に終わりのほうになりまして、少し内容が違っております。中国の方、韓国の方がお読みになりますところの阿弥陀経は、大蔵經に入っているところの阿弥陀経をお読みになっているのでございまして、我々が読んでいますところの阿弥陀経は、大蔵經のものではなく、善導大師が『法事讚』においてお書きになりました阿弥陀経をまとめたもののようにございませぬ。ですから日本独特の阿弥陀経だ、そんなふうにいわれるかもしれません、中国の方々がお読みになる阿弥陀経と、内容におきましては違ひませぬけれども、特に終わりのほうになりまして、違うところがあり、日本独特のものがあると考えられます。その違うところは、善導大師の『法事讚』の中にある阿弥陀経であり、『法事讚』はご存知のとおり、上下二巻になっておりまして阿弥陀経の一節ずつを唱えまして、その意味が書いてございませぬ。

その阿弥陀経が、我々現在の阿弥陀経と思われませぬ。どのような過程を経まして、そのようになったかということにつきましては、まだ、充分に理解をいたしてはおりませぬですが、おそらく、引声阿弥陀経といひますものが、慈覺大師によって伝えられまして、この節がだんだんととれて現在のようになったのではないだろうか、と思つておるの

すが、中国の阿弥陀経と大部違うのだということをご理解いただけたら結構だと思っております。

そこで、三部経の中で、阿弥陀経というものを、法然上人がどのようにお考えになっていったのか。この三部経の翻訳年時は、無量寿経二巻、曹魏の嘉平四年(二五二)康僧鎧訳ということになっていきます。二番目の観無量寿経一巻、劉宋の暹良耶舍訳。暹良耶舍は元嘉十九年に亡くなっておりまので、四二四年から四四二年までの間に中国語訳になったんだということになっております。阿弥陀経は、鳩摩羅什の翻訳で、姚秦四年(四〇二)ということになっていきます。

あまり専門になりますけれども、鳩摩羅什の翻訳につきましては、殊に問題はございませんが、観経につきましては、やはり問題がございますし、勿論、無量寿経の嘉平四年、三世紀中頃ということにつきましては、問題がありまして、ずっと後世のものであると、恐らく、この無量寿経、観経、阿弥陀経、全部相前後しまして、五世紀の中頃に中国社会に現れたんだと、大体そのようにご理解していただけたらよいのではないかと思います。

(二)

これらは、歴史的なものです。浄土宗におきましては、この三部経をどのように考えていくかと申しますと、大体、法然上人のお考えは、「三経は一本である」、これは『選択集』に書いてあります。浄土三部経の選定は、法然上人が「浄土三部経と名づくるのだ」と書いてあるのでございます。

法然上人自身は、三部経の各々にどのようにウエイトをお考えになったか、ということはみられませんが、しかし大体は同じ価値のおつもりで、同じく念仏往生を説くお経であるとして、お考えになったようにみられます。

それを端的にいわれましたのが、同じ二祖上人の『西宗要』でございまして、これは『浄土宗要集』によりまして、「この観経、弥陀経、無量寿経は等しく、往生浄土の本意は一なり」といって、三部経は全部同じ価値の經典であって

同じく念仏往生を説くものである、とこのようにふれていきますのが、法然上人から二祖聖光上人、三祖良忠上人のお考であります。

しかし、法然上人の門下の中で、ご存知のとおり、真宗の親鸞上人になってまいりますと、これが三部経に甲乙をわけまして、そして、無量寿経をつまり弘願念仏の教えであり、阿弥陀経は真門であって、半自力半他力の教えであり、自力念仏なんだとし、観経は自力の諸行往生を説くのだ、要門の教えである。そういう要門、真門、弘願門という、つまり甲乙丙というそれぞれウェイトをつけております。

西山義におきましても、やはり観経中心としまして西山義が出来ましたので、それぞれ門下になりますと、お経の間に甲乙丙をつける考えがありますが、浄土宗におきましては、甲乙をつけない、というのが建前でございます。違うところは、五重伝法を創定された聖阿上人が『十八通』におきまして、浄土宗はつまり正依三経別依一経だと、正じては三経に依るが、別しては一経、観経によるんだと、観経をとりあげておられます。観経の中の何かといえますと、正依一経、別依一句でもって、「二者深心」の一句だと。つまり、観経の上品上生の一者至誠心、二者深心、三者廻向発願心の、深心の一句におさまるということを、聖阿上人は申しておられます。これは、念仏に対する信心信仰といいますものの一番基本をなすので、そういう点を取り上げたのだらうと思われませんが、親鸞の如き、お経にそれぞれ個別の価値をつけていくということは、浄土宗では行われないのです。

そこで、実は、お経の説時次第とか、昔からこういうことがいわれておりまして、全部お釈迦さんがお説きになったんだとすると、無量寿経が先か、観経が先か、阿弥陀経が先か、どちらが先なのだ、というようなことが昔から論じられてまして、法然上人も、これについて書いておられます。『観経釈』に「寿経の中に先づ、彼の仏の発心修行、及び果上の依正二報を説く」とあり、彼の仏、阿弥陀仏の発心修行、つまり阿弥陀仏が因位の時の法蔵菩薩が、発心修行し悟

りを開きになりましたして、浄土を構えられました果上の依報正報、浄土の莊嚴、光寿二無量を説くのが無量寿経であり、また「今、経（観経）は彼の依正の説に就て、此の十三観を云う」とあり、依正二報の莊嚴を觀察するのが定善十三観ですが、だからそういう無量寿経が先に出来ており、それに基づいて観経というものをお釈迦さんがお説きになった、とこういってお考えでございます。さらに、「寿経は、三品の往生を説くと雖も、未だ九品の義を説かず、今則ち、彼の三品を開いて九品となす」とあります。寿経の三品と申しますと、三輩往生です。無量寿経の下巻に、上輩、中輩、下輩の三輩往生を説きまして、そして一向専念無量寿仏を説くのですが、その三輩と観経の九品、上品上生から下品下生に至る九品は、昔から開合のことなりと理解いたしますので、その考え方によって、先にお釈迦様が無量寿経の三輩をお説きになった、つづいて観経にさらにそれを細かく細分されて、九品をお説きになったのだ。だから無量寿経が先で、観経が後なのだ、こういう考えでございます。阿弥陀経になりまして、同じ『阿弥陀経釈』に「観経は、初めに広く諸行をとぎ、偏に機縁に逗まる。のち諸行を廃して念仏の一行に結帰す。然し、なお、彼の経の諸行の文広く、念仏の文狭し。是を以て行学の徒、義路迷い易く、是非決し難し。今此経（阿弥陀経）は諸行を廃捨して、ただ念仏を明す。即ち念仏の行に於て決定の信を生ぜしめんためなり」と。観経は、ご存知のとおり、はじめ定善十三観の観法が説かれておりまして、後に九品の行を、諸行往生が説かれております。中品になりますと持戒往生ですし、上品ですと大乘の第一義諦を学ぶと説かれておりますし、下品になりますと念仏が出てまいります、広く諸行がとかれて、しかも念仏は下品になりましたはじめて説かれてあると。だから諸行の方がたくさん説かれており、念仏が大変少ない。だから釈迦が改めて念仏だけをお説きになったんだと。そのようなことで、無量寿経が先で、次に観経をお説きになって、続いて念仏だけをお説きになったんだ。

こういう問題は、浄土宗の宗義等の問題で、無量寿経が先で、続いて観経、阿弥陀経なんだと。勿論それは、歴史的

なものではございません。浄土宗の宗義の上で、前後を論じました場合には、無量寿経、観経、阿弥陀経という順になりましたし、最近の歴史的な研究をみますと、必ずしも、そういうようなことは出来ない。

そうすると、三経、それぞれ別のことを説いたお経ですが、法然上人は、三経の主意はどんなことをお説きになったのか、それは一体であるということはお説きになっていきますけれども、主意は何かといってみますと、『三部経釈』に「双卷経には、まず阿弥陀ほとけの四十八願をとき、のち願成就をあかせり……」と。双卷経、つまり無量寿経はですね、仏の四十八願を説くお経だ、勿論、願成就を明かすんだ、浄土の莊嚴、念仏往生、全部四十八願に報われるところのものですから、つまり、四十八願の成就をあかすもので、まず四十八願を説くお経なんだ。

「次に観経には、定善、散善を説きて念仏をもて阿難に付属したまう」と。定善十三観の観法、散善九品の諸行をお説きになっていくけれども、観経の一番最後の「汝よくこの語を持せよ、この語を持せよとは即ちこれ無量寿仏のみ名を持せよとなり」(汝好持是語。持是語者即是持無量寿仏名)ということが、書いてございますし、中国の善導は、その意味をとりまして、「上来定散両門の益を説くと雖も仏の本願に望むれば、こころは衆生をして一向に専ら阿弥陀仏の名を称せしむるにあり」(望仏本願意在衆生一向専称弥陀仏名)と。このように善導は、お説きになっておりますので、その主意をとって受けられました、観経は要するところ、いろんな行をとるけれども念仏をお説きになったんだ。このように観経はとっていくんだ。しかも、念仏を阿難に依嘱されたのです。

阿弥陀経にまいりますと、「次に阿弥陀経はまた極樂の依止の功德をとく」依報正報、極樂莊嚴です。「これ衆生の心をすすめんがためなり。のち往生の行をあかす。六方恒河沙の諸仏ましまして大千に舌相をのべて証誠し給へり」と。阿弥陀経は、初めに極樂の莊嚴をときまして、つづいてその美しい浄土へ往く方法として、一々の念仏を説き、つづいてその一々の称名念仏がうそではない、本当なんだと、間違えないということを、仏が証明されるお経であり、証誠の

經典であると、法然上人が見ておられるのでございます。そういう点から、無量寿經と云いますのは、阿弥陀仏の本願をお説きになっておるから、阿弥陀仏の衆生救済の大慈悲を説くお経なのです。觀經は、お釈迦さまが衆生救済の大慈悲を説かれたものだ、と、定善、散善の義をお説きになって最後にお念仏を依嘱されるということは、釈尊の衆生救済の大慈悲を説くものである。阿弥陀經は、諸仏の衆生救済はうそじゃないという証明ですから、やはり、諸仏の大慈悲を説くものである。いわゆる三仏の、弥陀、釈迦、諸仏の、大悲を説く点として三部經を取り挙げていいといいますが、宗義等の一つの見方でございます。

そこで、三部經の中の阿弥陀經は、ご存知のとおり一番簡単でございます。先ほど申しましたとおり、我々浄土宗で読むだけではなく、中国におきましても阿弥陀經が読まれますし、また韓国のお坊さんも読みます。浄土宗だけではなく、天台宗でもお読みになりますし、真宗でもお読みになりますし、泉涌寺の本山におきましても読まれるように聞いております。それから、黄檗宗万福寺でも読まれると聞いております。ただ、読み方は違っても読まれるように聞いております。それから、呉音ごといいますが、他にも三通りの読み方があります。天台宗では漢音かんで、西山浄土宗でも漢音で読まれるようです。京都泉涌寺（真言宗泉涌寺派）では四宗兼学の寺でございまして、真言と禪と律と念仏で、開山の俊苾上人の開山忌には、阿弥陀經も読み、その阿弥陀經は宋音そうで読むと聞いております。黄檗山の万福寺、これは明音めいです。つまり隠元禪師がお越しになる時に伝わった阿弥陀經で、これは明音で読むと聞いています。

このように、阿弥陀經という經は、広く読まれておる經であるということですが、ただ、法要とか儀式とかに読まれるだけではなしに、内容的に極めて簡明に浄土思想が説かれていますので、これは中国の四教というものだといわれております。阿弥陀經は、諸經を総合した集合經典であると、たくさんのお経を総合したものであると、明の智旭は言っ

おりまして、内容的に重んぜられたようでございます。

また時宗では、三部経の中の阿弥陀経をたいへん重視される。時宗という名前が、臨命終時という言葉に依っているんだといわれるほど、時宗では阿弥陀経を、所依の經典の中での正宗部とでもいいますが、大事な經典だとされておる。それほど、阿弥陀経といえますものは、内容が極めて簡単であると同時に、そのお経の価値につきまして、いろいろと重視されている経でございます。

(三)

しかし、実は、内容からいいますと、浄土教の一番重要な、本質的なことが説かれてある。申すまでもなく、指方立相の浄土でございます。これより西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽という、阿弥陀仏ましまして、今現在説法といわれる西方浄土のことがはっきり説かれていまして、これについても、昔からいろんな人によりまして議論をされているのでございます。その指方立相の根拠は、現在、我々がどのようにこれをもつていったらいいのか、大きな問題でございます。勿論これに関連しまして、阿弥陀様という方が、かつて法蔵比丘という修行者であつて、長劫の修行をされ、四十八願を成就して、そして、今から十劫の前に悟りをお開きになった説話であり、物語であり、神話ですね。ある浄土宗の先生方によりますとですね、非神話化と、説話的なものをそのままつなげてはいけません。もっと理論的に解明しなければならぬ。非神話化のものとみる方もございまして、昔からいろいろな面におきまして、多くの人々によって議論をされておる問題でございます。

その一番の根拠は、指方立相という言葉は、どこにあるのかということにつきまして、それは、善導の『観経疏』定善義の像観のところ、仏身観の一つ前です。像観の説明の時に「指方立相浄土」と出てくるんです。それを讀まし

ていただきますと、「今、此の観門等は」これ観門、つまり像想観ですから、観察正行をすすめるところです。そこへ観察するもの、「唯、方を指し、相を立て、心を住して境を取らしむ」、動機の対象をいうのです。「総じて無相離念を明さざるなり」、無相ではないんだと。「如来懸はかに知りたまふ。末代罪濁の凡夫の相を立て心を住するすら、尚、得ること能はず、何に況んや、相を離れて事を求めれば、術通無き人の空に居して舍立つるが如し」と。つまり、西方という方角をしめしまして、そして、そこに美しい、金銀財宝でできたところの世界をとくということとは、つまり何故か、無相離念じゃないんだと。そういう相は否定して、いわゆる空無、縁起の空を説く、無所得空を説く、空無の抽象的な考えじゃなく、もっと具体的なものが、そういう抽象的な観念の世界ではなく、末代罪濁の凡夫のために説くんだ。ここに、西方浄土というものは何故説かれたのか、という一つの根拠が示されてあるのですね。つまり、罪濁の凡夫、凡夫のために説かれたんだ。もう無相離念じゃないんだ。この頃はだんだん理屈っぽくなりまして、理屈でもって読み返せない、納得いかないというようになっておりますけれど、善導がこの西方浄土をお説きになったところの意図は、つまり凡夫のためなんだと、しかも罪惡の濁は、五濁で汚れておるところのことです。そこに住む凡夫のために、こういう有相の世界を説くんだ。それでもなお、難しいということ。「心に住する姿を得ること難し、況や相を離れて事を求めば、術通無き人の空に居して舍立つる如し」と。そういう具体的な事象を離れまして、空を説いてゆく、真如実相を説いてゆく、天台の実相論におきまして、空・仮・中三諦の教えを説く。即空即仮即中を説いて、諸法実相論を説く。あるいは華嚴の重々無尽の世界を説く。あるいは般若の皆空世界を説く。極めて抽象的な観念の遊戯と申しますれば、言葉が悪いかもしれませんが、遠く哲学的な、思素的な考えでございませぬ。こういうものを好きな人(好きな人というのは、言葉が悪いかもしれませんが)一般の人にとりましては、少し偽善的な抽象的な観念の遊戯みたいなものですから、それは凡夫には向かない。多くの人々に浄土の存在を知らず。それが凡夫に知らせるためにこういう有相の世界

を示したんだと。だから、指方立相の浄土を説きますところの根拠は、あくまで罪惡の凡夫のためなんだと。いいええ
ましたら、凡夫を導くための一つの摂化の手段であり、方便です。方便といえますと、嘘も方便で、何かあらぬことを
いうようですが、解りやすくするためにお示しになったので、大学生に説きますところの英語の本を、そのまま小学、
中学へ持っていても解りませんから、解るように小学生用、中学生用というようにしなければなりません。解らなけ
れば意味がありませんから。理解し易いために、こういうことをお説きになったのです。ここにつきまり、浄土教の指方
立相の根拠が、はっきりとございます。これを離れて、生半可に非神話を説きましても、何もならないのです。

禪宗などになってきますと、ご存知のとおり、心の中の阿弥陀仏とみていくんだと、遠くに仏を考えるのは邪道であ
る。唯心の弥陀、己心の浄土と、そんなことを説きますんですが、確かに、インテリにはそれで納得は出来るかもしれ
ませんが、一般の者にはいささか解りにくいものです。こういうものは、一部の人のものであっても、一般性がありま
せんので、法然上人は、それをお取りあげにならず、やはり西方浄土という、その世界をお示しになった。その根拠は、
罪惡の人間であるからです。しかしこの考え方は、現在では今の人間中心主義の時代といえますか、つまり、一切のも
のは人間の日常生活を幸福にするためにあるんだ、それがために、自然を破壊し、自然を変え、宇宙開発をするとい
うような人間中心の考え方が存在するが故に、現在もいろんな災害が起こり、識者によりまして、自然との調和というよ
うなことが言われはじめてきました。浄土教は、この罪惡感が一つの現実の人間の反省を説くものだ。そういう意味で、
浄土教は、反省の仏教だ、反省の宗教だと、こう申しても決して言いすぎではないと思われれます。まして現在はずね
人間と神との地位が逆転しているような如き感じもする。人間中心主義、人間至上主義、悪くいえば、人間のうぬぼれ
なのですが、そういう人間に対して、反省を説いていく、これがやはり浄土教じゃないだろうか。そこから出発しない
限りは、指方立相というものも理解できないのではなからうかと思えてならないのです。

(四)

法然上人が叡山で出家をされまして、そして十八歳で隱遁をされまして、黒谷の叡空上人のもとに学ばれまして、それから四十三歳までの約二十五年間、それは求法のご生涯でありました。

なぜ、隱遁されたか、これはいろいろな説がありますけれども、当時の天台宗の教え、むしろ天台教団自身に対して大きな疑問をもたれ、そして、自分自身の能力に対する懷疑をもたれまして、そして自分の能力に合うところの教えを探求されたのです。ここに法然上人の一つの考え方の出発といえます。といたしますのは、宗学上、聖道門といわれる天台、真言の考え方は、人間の本来的なあり方、あるべき姿、特に禪宗などはそうですが、我々は仏性を持っておる。仏になる本性をもっておる。お釈迦様はすでに仏性を開顯されて、悟りを開かれた、いわゆる仏である。已成の仏である。私はいまだなっていない仏、未成の仏である。梵網經に説くところのもので、本来同じであり、どこが違うかという、煩惱をもっておるかいないかで、未成は、まだ煩惱をもっていて煩惱をこれから断じるだけの期間のあるものである、ということですから。だから仏教の修行の中心は、煩惱を断じるか、断じていないか、の差なのです。大乘仏教では、五十二位の段階を説きますが、その修行の中心は、つまりは煩惱の断じ方によるのです。小乗仏教によりますと煖、頂、忍、世第一法であります。これも煩惱をつまりは断じていく、その断ずる一つの方法です。

ご存知と思いますけれども、叡山の回峰行にしましても、一週間、断食、断睡眠、大変厳しい修行をおやりになります。けれども、もとは、どのようにして煩惱を捨していくか、このように人間本来的に我々は、仏性があり、やれば出来るんだ、やらないだけなんだ、つまり、本来的な人間をみていく宗教なんだ、これもしかし立派な理屈でございます。人間は本来、仏性がある。しかしまだ仏性を開顯していない。いろいろな見方も確かに現実的な人間でございます。

確かに煩惱は断じなければならぬ。本来はしかし仏性があるのに違いない。だけど本性は一緒なんだ。ただ煩惱によって覆われているだけなんだ。修行したら出来るということは解っておりましても、なかなかそれが出来ない。いわゆる自分の力に対する懷疑、つまり疑いをもつということ、はたして本当に出来るかどうか。自力に対する懷疑から、法然上人の現実に対する見方は、確かにそれには違いないけれども、現在の私はとてもそんなことは出来そうもない。本来的な人間観から出発する、現実論ともいうべきものです。聖道門は建前論です。建前は確かに同じかもしれませんが、けれども、法然上人は本音論です。建前論ではないんです。そういう、つまり、自分自身に対する懷疑、言いかえれば反省なんですね。理屈ではわかってても本当に出来るのかどうなのか。誰も彼も建前論的な一般性をもってはおられないという自分自身に対する反省であり、弱いものなのだという自分の自覚なのです。ご存知のとおり、法然上人が、わが身、わが心に相応する法門を求めて南都へ行き、叡山へ登り、一切経を何遍もひらいたということは、法然上人ご自身の弱さの自覚であり、表現をかえれば、凡夫であり、煩惱具足のものであり、罪深いものであるという言葉に、それがなってくる。あくまでも本音論なのです。

ご存知のとおりですね、いわゆる、骨肉相噛むといいますが、法然上人が黒谷に隱遁されました、そして、二十四歳の時に釈迦堂に参籠されましたんですが、その後には、二十四歳の時に、保元の乱が起こっております。一年おいて平治の乱が起こっております。平清盛が天下を取るんですが、それから、「平家に非ざれば、人に非ず」と、それが一族だけではなしに、つまり、一族郎党、平家に反するものは、みな殺されてしまう。大変、この殺伐とした世界であったのです。それがちょうど、法然上人の五十三歳ですか、そこで壇之浦でもって平家が滅んでおります、しかもそれが京都を中心に大きな争乱になりまして、源氏、平家方、それは京都だけではなしに、地方におきましても、いろんな闘争があった。そういう一つの時代に法然上人が誕生しておられます。だからいかえますなら、今日の生命はある

かもしれませんが、明日の生命は、わからない。そういう一つの切羽詰まった生命の危機にさらされた時代であったのです。

そこで、そういう時代ですけれども、法然上人が勉強されました天台宗の教えが、どんなものであるか、これは、いふならば、現実肯定ですね。天台の実相論は、現世をもって寂光浄土である、そういう諸法実相論ですから、現世の寂光浄土を考えていきます。それから、弘法大師の真言宗になりますと、現世は曼荼羅浄土である、曼荼羅世界であると説きまして、現世をそのまま浄土とみていこうとする。こういう考え方は、いかえましたならば、現実肯定の性格の強い教えなのです。こういうものは、先ほどいきましたところの争乱によりまして根底から覆えられていった。曼荼羅世界であり、寂光浄土において、なぜ闘争が行われるのか、現実はそのようなものではないじゃないか。

そこで法然上人が、そういう天台を勉強されましたけれども、とても厳しい籠山十二年とか、何日間の回峰行をやり、天台教学を学びましたが、理論としては確かに立派な理論ですけれども、これは単なる哲学であって、いわゆる、現実を遊離したものである。それよりも、今日あって、明日の生命の解らないもの、これをどうしたらいいのかという問題であります。法然上人が求道にあげられました二十五年といいますが、特に、深く考えられ、そして見おさめましたところのものは、これまでの仏教が建前論で、現実はそのようなものではない。戦争しているじゃないか、人殺しもあるじゃないか。だれがするのか、結局それは人間がするんじゃないか。自分が因つとるじゃないか。たしかに仏性のあるものにちがいないけれども、現実の人間は人殺しをする。そういう現実に対する反省、その中の一人が私だ。そういう現実の中における自分に対する懷疑、反省が、浄土教といいますが、つまり善導の浄土教といいますが、ものを見出す一つの大きな地盤といえますか、基礎というふうなものになる。もし、法然上人にそういうことがなければ、おそらく、浄土念仏の教えといえますものも、開けなかったんじゃないだろうか。ですから、法然上人の教えには、

明日の生命がわからない、だから浄土往生を、ということが強くでております。

しかし、法然上人のお弟子様になってきますと、変わって来ます。「念仏申して極楽へ行くんだ。浄土往生するんだ」と。お弟子の時代になってきますと、ご存知のとおり、鎌倉幕府が出来てまいりまして、そして、続いて北条執権が天下をとりまして、幕藩体制がだんだんと成立されてきます。いいかえますと、世の中がだんだんと平和へ向かって歩んでいった。多少の争乱がありましても、承久の変とかありましても、連続して平和へ進んでいった。そうしますと、現実の私はどういふものか、という現実に対する反省がはたらきかけ、出てきましてですね、現生往生と、現に親鸞の如き、聞思の一念で我々は往生されるんだという現生往生の考え方、あるいは、証空さんの如き、即便往生という、現世におきますところの自分の往生したあり方、信仰生活を往生という言葉で示したのが、現実を肯定するような考え方が出てきます。

けれども、法然上人になりますと、そういっておりません。特に、二十五年、五十二、三歳までのそのご生涯は、本当に争乱の世界であり、今日あって明日ない生命の人間がたくさんおった。それをどうしたらよいか、というところに、法然上人の浄土開宗の念仏の教えがある。したがって、そういう浄土の存在を求めるといふものは、あくまでも凡夫という考え方でなければいけない。聖者じゃない、凡夫である。だからそこで、指方立相の浄土というものが説かれてる。これは、現在の世相に対しては、なかなか理解されにくいところの考え方である。私は、そういう点から凡夫という言葉で法然上人が、「一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知の輩に同じうして、智者のふるまひをせずして」「愚痴の法然房、十悪の法然房」あるいは、「自身はこれ罪惡生死の凡夫なり」とありますが、結局全部、現実の自分の反省じゃないか。浄土教とは反省を説く宗教じゃないか。特に現実の人々には、そういう点を強調していくべきものではないだろうか。いろんな評論家によりまして、既にそういうことが新聞とかニュースなんかで耳に致してお

りますけれども、我々浄土教は、これに出發していくんだ、ここから出ていかなければならない。現実の自分の姿をつかまえてゆく、現実把握です。そして自分自身の反省の教訓が、愚痴の法然、十悪の法然という言葉になって表れているんだ。だから反省の宗教である。こう申し上げてもいいと思います。

こういうことを話しますと、浄土といいますが、金銀財宝の宝の山だ、あるいは、おとぎ話じゃないか、そんなのは昔の物語であって、今の時代に通用しない、といろんな批判が出てまいります。けれども、これは、理論の世界ではなくして、信ずる世界なんだ、と法然上人はいろんなお言葉にいつておられます。逆にいいますと、皆様もよくご存知だと思いますけれど、法然上人は生きた仏様、生身の阿弥陀様がおられるとして、おとりになったようです。理屈からいいますと、阿弥陀様は報身仏である、化身ではないんだ。法蔵菩薩の云々というのは、法身とか、報身とか、いろんな理屈が展開されますけれども、法然上人の考えは、やはり生身の仏様がおられる。生きた仏様なんだ、とお考えのようになります。あの有名なお言葉に「人は西を背中にしてはいけません。南と北へ向かうべきなんだ」と。それからまた、有名な熊谷の法難ですが、つまり京都から関東へ移行する場合ですね、馬の鞍を逆さまにおいて、関東へ下行したと。本当か嘘かは知りませんが、やはり、法然上人の教えを受けた熊谷が、法然上人と同じように、やはり生きた仏様がいる、だから仏様を背にしてはいけません、という信仰が、ああいう物語を生んだものだと思います。

理屈からいいますと、別にそんなどうもない、信仰の世界であり、理論を越えた世界である。また、理論でやっている間は、論理の世界であってそれを越えたところの信じているところの世界なんだ。そこにやはり、浄土というものが考えられる。人倫との関係、社会との関係、お互いを信頼し、信用し、信を重んじますから、社会の共同生活がやっていると。まして、神、仏に対する、信仰、信心が、中心をなしております。これなくしては、そういう現世の救済ということはお出来ませんですから、指方立相の浄土も、一応、理論的に説かれておりますけれども、信ずるところの

世界である。これが理屈を越えた世界なんだ。それは、我々が弱いものであり、凡夫だからこそ指方立相の浄土が説かれるんだ。このように、ご理解いただいたら結構だと思います。

(五)

浄土教の建前は、あくまでも「凡夫人」という人間を限定しまして、現実の人間を捉え、その行く世界である。しかもそれは死後の世界と、法然上人は捉えておられます。先ほども申しました、浄土教といえますもの、西方浄土の信仰が、どうして興って来たのかといえますと、經典成立に関係いたします問題ですけど、大体この大乘仏教が興りまして、菩薩の五十二の位を説きます。そして、それを段々と歩んでゆきまして、小学校から中学校、大学へ行きますようにだんだん上ってゆき、最後に悟りへゆくのですが、しかし、お釈迦様はすでに亡くなって、おられない。弥勒はただ出現されておられない。無仏の時なのです。ですから、現世におきまして、大乘仏教の教えを奉ずる人、菩薩が一生懸命に教えのとおり修行する、いわゆる六波羅蜜の行を修行する。そして現世において、必ず悟りを開くことが出来る。あるいは現世において出来ないから、次の第二の人生にいかない。そういう予言のようなことを与える人はないのですね、現世では。現世において、一生懸命やりましても、はたして仏の教えのとおり悟りを開くことが出来るのか。あるいは、第二の人生で修行すれば、出来るのか。第三に往かなければならないのか。そうすると、そういう約束、予言がありませんから、永久に修行していかなければならないじゃないか。そこで大乘仏教の修行者が、自分の理想的な修行者といまして、法蔵菩薩という一つの理想的な修行者を考えました。この人は、一生懸命、修行に励んで、今から十劫の前に悟りを開いて、そして西方に浄土を構えておられる。だから、そこへ行つたならば、法蔵は先輩であり、同時に、我々の大乘仏教の理想でありますところの、悟りを實現して阿弥陀仏という仏になられた方だ

から、そこへ行って菩薩道を完成したらどうか。いわば菩薩道完成の道場というようなことから、西方浄土の考え方が、西方へ生まれるという考え方が、大乘仏教の中から生まれたのではないだろうか。阿弥陀さんに対するいろんな理解がありまして、お釈迦さんの真の姿として阿弥陀仏を捉えたんだとか、悟りの内容を別に掘り出したんだとか、いろんな説がございます。その一つに、死後の世界、そこは修行を完成する道場である。極めて親しい我々の先輩である人々は、悟りを開いて仏になっておられると。そこへ行って悟りを完成しようという菩薩道の道場をというか、そういう考え方が、西方浄土信仰というものを生み、またそれが各種經典に広く説かれるようになった理由じゃないだろうかと思われまます。またたくさんのお経に西方弥陀信仰は説かれており、三部経だけではなしに、大乘經典の約三分の一といわれるほどのお経に、中には短いのは三行、四行、長いのは一節、二節説いてございますけれども、そういうお経にたくさんこの西方阿弥陀信仰が説かれてある。しかも大乘經典であるということは、やはり大乘仏教徒が菩薩道完成の道場と考えたからで、そういうものを、つまり浄土信仰というものを、お経の中に取り入れたのではないだろうか、とこう考えるのでございます。

したがって、いわゆる第二の人生を説いておるのであるという考え方は、生命の永遠性、永遠なる生命を説く宗教におきまして、当然であることなんですけれども、現実のように、現世を楽しく生きてゆくんだと、次の人生、死後ということにつきましては、あまり考えないものです。そのみか、年をとりましたが、老人の生き甲斐の問題とかが盛んに論ぜられます。安楽死の問題も、植物人間の問題も出てきますけれども、それよりも、老後の生活の生き方、その価値といえますところの意味とが、年をとっての仕事というように事にウェイトがおかれまして、次の人生といえますところを、あまり説かれないところからみますと、なかなか浄土信仰といえますものは、死後の世界ですので、結局、耳に入れにくいじゃないだろうかと考えられます。

法然上人におきましては、往生はあくまで臨終往生でありまして、現世往生というものは説かれておりません。これはいうまでもなく、法然上人の時代背景が、今日あって明日のない命だと、何時、どうなるかわからないという戦乱の時代でしたから、そういうような教えを説いたのだと思われれます。

お弟子になりますと、現世往生、親鸞なんかになりますと、法然上人滅後五十年に亡くなっていますから、大部、世の中も静まりますし、証空上人にいたしましたしても、法然上人が亡くなった時は三十七歳ですから、だいぶ世の中が静まった頃です。そういう時代ですから、やはり、現世往生を現代の生き方といえますことが、注目をされまして、即便往生、あるいは親鸞の凡身の往生と現世清淨智という考え方が、出たのではないかと思えます。

法然上人の考えは、申すまでもなく、そういう臨終往生でございませぬけれども、やはり同じように、二祖の聖光上人、これは再来年になりますと、三上人の御遠忌になりますと、聖光上人の浄土往生の考え方を申しますと、確かに聖光上人は、法然上人の教えを、正しく受け継がれておられます。本当にこれは間違いございません。ただ、浄土宗のそういう、二祖という門下の正流である表面上のことだけではありません。法然上人の門下の、西山義の証空上人にしまして、親鸞は門下には入っておりませぬけれど、一応門下に入れなければならぬと思えます。親鸞や、邪義といわれまして幸西の一念義にいたしましたも、諸行本願の隆寛にしまして、法然上人の教えをずいぶん脱線いたしております。これらはずまり、お経に対しての把え方が違うのです。法然上人は、第十八願といえますものを、念仏往生の願を中心が一番重んじて教えを説かれているんです。それを中心に、法然上人の教えは全部できておりますが、親鸞になりますと、あるいは証空になりますと、「願成就文」の「聞其名号、信心歓喜、乃至一念、至心回向、願生彼国、即得往生」ここにずいぶんウェイトがおかれているんです。つまり、法然上人の場合は、念仏というものは、こういう価値のある、尊い行である、ということの流れ々とお説きになっておられます。『選択集』という書物は、皆様方も、もう何遍もお読

みになっておられることと思いますが、念仏の価値が説いてあるのですね。念仏というのはこういう価値のあるものであり、法然上人以前の念仏とは違うんだと説かれてございます。それはそれでいいんですが、お弟子になりますと、そういう念仏、念仏申した者と仏様の関係を、どう捉えていくのか。仏様は四十八願成就され、本来は法蔵比丘ですから、「上求菩提、下化衆生」として悟りをお開きになった。そうすると我々に対して、仏様はどうしておられるのか。そういう、仏の下化衆生といえますか、仏の衆生攝化、門下においてはそこにウエイトがおかれておられます。これはだいたい違ふところなんです。

法然上人は、念仏は本当に価値のあるものである。だから念仏を申しなさい、必ず救済されるんだ。これは法然上人のお考えであるとともに聖光上人のお考えなんです。他のお弟子になってきますと、つまりなるほど価値のあるものには違いない、そうすると、そういう価値のある仏様は、我々に対してどのようにはたらきかけてくるのか。これは「如来の回向」という言葉です。回向、これは仏の衆生救済といえますか、はたらきの面が強くなってきております。そこにはだいたい違いがあるのです。同じ念仏を説きますし、同じような浄土往生を説きますし、親鸞も、証空も、隆寛も、説いておりますけれども、意味する概念が全然違うのです。一番端的にいいましたら、法然上人のお考えは、十八願中心でございますが、「至心信楽、欲生我国」、つまり真実こういった心構えでもって、「乃至十念」する。これは、行、起行ですね。この三心具足した念仏が、虚しい行であったならば、仏にはならない、「若不生者、不取正覚」です。つまり、価値を、説かれているのです。この行が、「至心信楽、欲生我国、乃至十念」という、三心具足の念仏行が、これいくら申しても、救われなかったら、そうしたら仏にはなりません。仏になっておられるのだから、必ず救済される。行の価値について示されるものとして念仏する。いいかえますと、そういう表現は、少し悪いかもありませんが、こういう行をしたものを救済することを約束される。勿論、これをやらない場合には、救済されない。仏の信者に対する約束だ

と。だから、念仏申せば必ず救済されるんだと、それだけで当然、価値のある行である。——諸行は、自力本願であり、末法の時代であることに、念仏の価値は相応し、そこに法然上人の浄土開宗の意味があるんです。

門下の方は、「若不生者、不取正覚」の方にウエイトを置くんです。もし生ぜずんば、正覚を取らじと。もし衆生が往生せなかつたならば、仏にはなりません。法蔵比丘が、阿弥陀仏という仏になられる。その前提には、衆生の往生がなければいけない。もし往生しなかつたならば、一人でも往生しなかつたならば、一人でも往生しなかつた者がおつたとすれば、仏は、それでは成仏できん、と。衆生の往生が、同時に仏の成仏である（往生即成仏）。しかし、これ、衆生の往生成仏一体なんだといいますが、浄土宗流に理解しまして、相異があり、意味が違うのです。衆生の往生、即、阿弥陀仏の正覚、こういう理解で、こちらにウエイトをおいて考えるのです。門下の考え方はこちらなんです。これだけでしたら見方が違うのですけれど、その見方をするところの根拠が、「願成就文」の「聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心回向」と、これに対する理解の仕方が違うのですね。その名号を聞いて、信心を起こして喜んだ。その時に回向の心を持った。例えば親鸞なんかになりますと、ここを強調しますしね。

親鸞の考え方真宗義、証空の考え方西山義、幸西の一念義、みんなこれによっている。だから、法然上人の考え方と大部違うというのは、当たり前のことです。諸行本願力をいうのでございますが、法然上人と全然違うんですから、法然さんは念仏一本だけなんですから、諸行を本願に入れたことは、南都北嶺からずいぶん批判されましたから、妥協したようですね。

隆寛になって来ますと、ちょっと違います、それは法然さんと一緒なんですけどね、十方衆生、これが悪人なんです。法然上人は、悪人じゃないんです。大小善悪一切の凡夫、全部平等なんです。善人も悪人も、男も女も、老人も若者も、全部平等に救済される往生なんです。これが、隆寛さんになりますと、悪人往生になります。これが親鸞へ行き

ますと、悪人正機という言葉になってでくるんです。そこをみますと、法然上人の教えを素地といたしておりますけれども、それに対していろんな考え方がプラスされておる。なぜこんなになったのかにつきましても、いろんな理屈があつたのですが、今日は略しておきます。

(六)

二祖聖光上人が、法然上人ともし違うところがあるといえますれば、現世における仏と我々のあり方について、不離値遇、つまり仏と離れない、仏に遇う、これは値仏ということになりますか、ここですね。

聖光上人は『大智度論』という竜樹の書物によりまして、大乘仏教の菩薩が、菩薩道を実際、実践してゆく。そこから、みんな行をやる。全部これは念仏なんだ、仏を念ずる、声聞ではないんだ、仏を念んじていくんだ、仏様に思いをかけて菩薩道をやつてゆくんだ、菩薩道は全部、念仏なんだ、と。仏を念ずるといふことは、いいかえますと、仏と離れないことじゃないか、仏に遇うことじゃないか、念仏の内容は、不離仏、値遇仏なんだ。こういって『大智度論』に説かれてございます。この考え方を、そのまま称名にもつて来られました。称名は、即ち仏の本願の行である。しかも、念仏することによりまして、我々は仏と深い関係を結ぶことが出来る。つまり、念仏する者は、仏は見たまい、聞いたまい、知りましたまい、憶念したまう。仏、み名を称うれば、眼の前にまします。つまり念仏する者と、仏との関係です。そして阿弥陀経の一番終わりに、諸仏の護念、仏の守護、つまり、仏とともにあるんだ、それが不離仏、値遇仏なんだ、と。現世におけますところの念仏者のあり方、仏とのあり方、法然上人におきましては、念仏の価値をお説きになつておられます。「光明遍照、十方世界、念仏衆生、摂取不捨」といふことが、何によつてか照らすのか。それはつまり、親縁、近縁、増上縁があるんだと。それから、善導大師も説明しておられますが、つまり、光明が照らすという、照ら

される内容が、こういう因縁なんだと。法然上人にもそういうことがありますがけれども、念仏者が仏とどういう因縁を結ばれるのか、ということになりますと、それほど強く法然上人はお説きになっておられません。

近縁ごんえんにより、仏ましますんだと、見仏、つまり仏を見るといいましたら、法然上人の三昧発得のような見仏ではないんです。つまり、我々は、仏を見ることが出来る。凡夫の肉眼では、できませんけれども、仏は、つまり眼の前にまします。ただ近縁とは仏の名号を称えてまします、それは見仏なんです。つまり、護念したもう。そしてその内容に、不離仏、値遇仏ということをお説きになっておられます。それは、聖光上人のお考えであって、法然上人のお念仏といえますものは、浄土願生の念仏です。死後往生の念仏です。

それはわかるのですけれども、法然上人の時代は、先にいいましたとおり、今日、明日の生命はわからないと、何で死ぬかもわからないという、大変な時代でした。けれども、もし現在、臨終往生だけで考えましたら、平均寿命が男子は七十七歳、ご婦人は八十歳と、もうすぐ平均寿命は八十年になるかもしれないといわれております。実際は、八十へ行く人は少ないんですけれど、一応、平均寿命となってきましたと、そのへんまでは生きておられるだろう。そうすれば、念仏は一声でも助かるんだから、六十過ぎてから、七十過ぎてから、念仏申したらいじやないか。それで、極楽へ往けるんだと、年寄りの念仏ということに、結局はなってしまうじやないか。若い間は、そんなものどうでもいいと思っ

ていても、いつしか七十になってきて、どんなに頑張っても三十年、五十年は無理だ。だから、年とってからでもしたらいいじやないかと。単なる臨終だけでしたら、そうなりますね。

やはり法然上人当時は、本当にきびしい時代でしたけれども、法然上人のお弟子の聖光上人になってきますとですね、こういう仏と現実の考えができるということは、世の中、だんだんとそれだけ平和になりつつあった。現世肯定とはいませんが、現世におきますところの、仏との関係、その生き方、それが証空さんの時になりますと、現世の即便往生と

いう現生往生、親鸞になりました。現世往生できる清浄なる不退転という、現世肯定の念仏になってきます。現世におきますところの、信心のもちかた、現世における往生の理解の仕方、いわゆる、現世における我々のあり方という具合になってまいりまして、法然上人が亡くなりましてから、分派いたしましたけれども、大体におきまして、現世における念仏者のあり方というものを説く、そこにウエイトをおかれてきている。そこに法然上人の時代と、お弟子さんたちの時代の大きな違いがみられます。

しかしですね、現世のあり方だけでありまして、念仏に対する価値、意義、これに対する考えは、少しも変わっておりません。報恩の念仏とか、了解の念仏とかというようなものには、なっておりません。ですから、たくさんのお弟子の教えを比較してみましても、鎮西上人は、やはり何といいますが、法然上人の教えを正しく理解されておられるということは、まぎれもない事実でございます。

しかし、おもしろいことには、真宗のお方、叡山のお方をみますと、現在の浄土宗は鎮西派である。再来年は三上人の御遠忌になりますけれども、聖光上人は、我々浄土宗の第二祖とみますけれども、真宗の本をみますと、鎮西派の開祖になっている。そして三祖良忠上人は、鎮西派の二祖になっておられます。はっきり出ております。これは名前を申したらいとおもいますが、法然上人の門下の研究をなされまして、立派な本を出されました先生がありますが、それに出て来ております。我々が読みまして、「二祖・良忠上人」ミスプリとちがうのかと思うのですけれども、そうじゃないんです。真宗では、二祖なんです、良忠上人は。西山になりました。法然上人は、西山浄土宗の祖師であって、その教えは証空上人であると。いわゆる浄土宗は鎮西派であると、鎮西上人が開祖であると、他のところではそういっているのですね。

つまり、不離仏、値遇仏、現世におけるあり方を強調するということは、法然上人の教えを離れることにはならない。

つまり、念仏する人の今のあり方、常に仏のところにあり、離れない。仏にあってるんだ。聖光上人も、従って、護念があり、見仏があるんだということをいっておられます。その護念につきまして、善導さんの『観念法門』に五種増上縁というのがあります。そこで現世護念ということに關して、善導さんも説明しておられます。それも聖光上人の『徹選択』に入れてあります。我々は仏と離れないんだ、一緒なんだ。念仏するたびに仏さんと会う。護念にあずかる。これは阿弥陀經にだけあるものです。現世護念は無量壽經や、觀經にはございません。現世護念、仏とともにあるんだ、現在のこの世におきまして、宗教につきまして、いろんな批判なり、問題もありますけれど、我々、宗義の上に立ちまして、つまり今日、生活している人の生き方、念仏の称え方、心構え、そして不離仏值遇仏の現世護念、仏とともにたしかに毎日生かしていただいているんだ、という考え方を前面に出していく必要があるのではないだろうか。法然上人は、確かに臨終往生です。現世護念につきまして『選択集』の第十五章に少し出ておられます。「横病横死の厄難など延年轉壽を得る」と書いてございます。ほんの三行か四行しかないんです。後はもう念仏の価値、浄土往生ということ強くいっておられ、現世往生はあまりいっておられませぬけれども、やはり次の章になってきますと、こういうところに出てくるといことは、つまり、現世の念仏のあり方というものが書いてあると。そこで考えますことは、仏とともに歩む道があるんだ、私一人ではないんだ。いいかえますとですね、近縁は、仏はそばにましますんです。だから、いわゆる正しい行いをしなければならぬという、魔悪修善で念仏する態度が生じるのです。

正しく仏を見たまうのだと、だから正しくしていかなければならないんだと。仏はみなさんご存知のとおり、四智三身十力四無畏、内証所有の功德、それ全部、名号に入っているというのですが、仏さまの四智三身十力四無畏といますと、大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智なんです。十力は衆生の能力を知る、それから衆生の過去を知る能力。過去、現在、未来を知る。つまり、教化、導くところの人間の心の奥底まで知っておられる。これが、十力なんです。

その人間の素質とか、能力とか、その人間の寄宿性、過去のこと、勿論、未来のこと、現在のこと、そういうことが、全部で十あるのですが、そういう智慧をもって、我々を見ておられるんだ。ただ、仏を敬う心、仏を畏敬するというのですが、浄土宗では、あまり、畏れるということはいわないのですが、仏は知っておられるんだ。だから、悪いことをしちゃいけないんだ。その内容は、仏は十力をもって知っておられるんだ。全生涯が念仏そのもの、だから、つまり倫理性をもってる。こういうその考え方が、現代におきましては、大いに説かなければならないじゃないかと考えるので

す。

法然上人はひとえに念仏の価値をお説きになりました。法然上人の念仏は本願念仏ですが、法然上人の前にも念仏はあるんです。決して、法然上人が初めてではないんです。密教的な念仏というのは仏の名前なんだと。だから、称えたら何か仏の力が働いて、そして仏から衆生へ力が伝わる。そういう意味をもったところの称名念仏を称えておりました。あの空也上人（九〇三―九七二）なんかは、民衆に念仏を説いたといっておりますが、大体、こういう考え方でした。一般的には、貴族が荘園をもっておりまして、荘園の農民は、明日の生活がどうなっていくかわからない。人権が認められない階級なんです。いったん病気になるたら、葉なんか自由に得られませんから、死ななきゃならない。災害でもあれば、もう米は実らない。けれど年貢は納めなければならぬ。そういう切羽詰まった生き方しておりますから、そういうものには念仏は有難かったことと思います。

また仏教の三学（戒・定・慧）で、一番のもとは、定なのです。ずいぶん広い意味になりますが、冥想すること、思惟すること、考えること。そういうことでだんだんと考え方を展開しますと、天台の実相論になり、華嚴の十二縁起になってきまして、いろんな哲学的になりますけれども、それが一つの手段といいますが、方便といえますか、つまり、心を落ちつかせるための念仏です。私は韓国へ行きまして、むこうの坊さんに会うことができたのですが、多少は念仏申

します。どんな念仏かというですね、結局、何遍もするんですね。つまり、心を落ちつけるために「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とするそうです。別に「南無阿弥陀仏」じゃなくても、「南無観世音」でも構わないんです。「南無釈迦牟尼仏」でもいいんです。何かそういう手段の如く考えられる。いわゆる方便ですか、そういうふうに考えられていた。同時に、称名というと簡単ですから、観念の出来ないものが、善導の『往生礼讃』に出てくるもので、それが行うところの行である。したがって能度のもととなる称名の行である。こう考えられますね。したがって、浅薄なもの、浅い、低いものを観門という、こういう称名に対する考え方、これをいいかえましたら、「南無阿弥陀仏」と称える一つの言葉、仏様ですから、それに一つの功德があるといいますが、神秘性を認められる。密教でいえば、陀羅尼的な考え方もいえるかもしれません。そういう一つの神秘性を認めまして、功德があるから、だからたくさんやっただけいいんだという。功德積み重ね主義、そういう信仰が生まれたり、百万遍念仏が生まれたりするのですけれど、勿論そこには理論がなければいけないんだ。このような批判が法然上人以前から、法然上人当時にあったんではないか。いわゆるそういう念仏が、盛んであった。だからその念仏を、みな仏の本願なんだ、仏の慈悲というものに裏付けられての称名なんだという、新しい意味をつけるのです。いいかえまして、功德のあるものを、あるいは、神秘性豊かなことは、仏の慈悲の自証化したものなんだという新しい意味を見出す。しかも、そこにおいて、誰でも平等に救われるんだ。そして、万人を救済する門戸を開かれた。そこに法然上人の念仏の浄土宗である意味があると思うのです。そこで、それはあくまで本願に裏付けられた念仏。念仏申すことによって救済されるんです。念仏申した者は、救済されますけれども、それはあくまで臨終であって、念仏している現世におきましてはどうなるのか。これが法然門下におきまして問題がおきまして、時代背景の変化もありますが、いろんな疑説というものが生まれたのではないだろうか。勿論、浅いという考え方に對して、鎮西上人もはっきりいっておられます。つまり救済されるかされないか、生死を脱することが出来るか、出

来ないのかということによって、浅い深いは決まるのだと。たやすく生死を脱出できる教えだから、これはきわめて深重の法である。これに対して、どれだけでも助からぬ教えは極めて軽薄なものだ。こういうお考えで、鎮西上人らもいっておられます。やはり現世往生ということが、たいへんな問題です。

そこで、私、いろいろと疑問に思うのですが、確かに念仏は価値のある行なのですけれど、念仏をして、価値あらしめるのは、阿弥陀仏なんですね。我々は、阿弥陀仏によって救済されるのであって、その一つの手段としてそれが称名念仏です。念仏申せ、念仏申せ、ということは、法然上人おっしゃっておられますし、我々もいつも申しておりますし、また聞かされましたが、そうすると、どうなるのか。七十、八十になって年をとったら、極楽ほしいでしょうが、今はどうなるのか。そこでやはり、不離仏、値遇仏の考え方が必要ではなからうか。また持つことによって、仏と深い因縁が結ばれる。だから正しく行わなけりゃならないんだ。

現在のように人間中心になりまして、仏様を人間の幸福を導くところの道具の如くに考えたりします。しかし、そうではなしに、やはり我々は、仏とともにある。仏は絶対的な智慧でもって、我々の行為を全部知っておられるんだ。そういう仏の前において、そういう仏の護念のもとに、諸行無常の世でありながら生きぬいていく。その教えが、念仏であり、そうあるべきではないだろうか。阿弥陀経は、現生護念が説いてございます。それが阿弥陀経の特色と申し上げていいかと思えます。

研究所員研究成果報告

浄土宗ボーイスカウトの展開

——蔵王山嶺にこだました南無阿弥陀仏の大合唱とその後——

布教研究所員（東北支部） 東海 林 良 雲

ボーイスカウト日本連盟創立六十周年の記念すべきスカウトの祭典、第八回日本ジャンボリーが、昭和五十七年八月二日から六日まで、宮城県白石市南蔵王山麓において参加人員三万名で開催されました。ジャンボリーは

単なるスカウトの祭典でなく、各県から選抜されたスカウトが平素の訓練の成果を諸活動を通じて発揮する場として開催されます。

この年は、ボーイスカウトの生みの親である英国のペーデン・パウエル卿が二十一人の少年たちとブラウシー島で実験キャンプを行いボーイスカウト運動が開始されてから七十五年目にあたり、第二十七回世界スカウト会議において、ボーイスカウト創立七十五周年記念を宣言

された年でもあり、日本連盟としても昭和五十七年は少年団日本連盟が創立してから六十周年の記念すべき年として、両者あわせて一大慶祝の年だったので。

特に浄土宗ボーイスカウト宗徒として銘記すべきは、年あたかも宗祖法然上人生誕八百五十年をお迎えしたその年に、仏教礼拝での宗教礼拝当番宗派に巡り合ったそのことでした。浄土宗宗務庁並びに浄土宗スカウト連合協議会では、慎重に日本連盟宗教委並びに仏教各宗派ボーイスカウト代表と連絡をとりながら、何回となく会合を重ね日曜礼拝にそなえたのでした。

日曜礼拝の八月三日は前日からの台風襲来で開催が心配されましたが、不思議なことに、開始教時間ほど前か

ら会場上空のみポツカリと晴れ渡り、洪鐘が高らかに鳴り響き、礼拝の開始を告げたのでした。各宗派代表が着席され、御導師の宗務総長が台風の影響で列車が運休となり、かわって社会局長が御導師をつとめました。

蔵王の山々に仏教讃歌が鳴り渡り、一段と高らかに社会局長の同唱十念が発声され、一万余の同衆が嶺々にとどけとばかりに「南無阿弥陀仏」を称えたのでした。局長は、このうえもない感動で心打たれた、と感想をもらしておりました。

各宗派では門主級が出席されておりました。種々の都合だったのでしょうが、千載一遇のこの礼拝に当番宗でもあるわが宗門こそ御門主を御導師に、と思ったのは私だけではありませんまい。

ボーイスカウト運動は健全な青少年の育成を目的とする世界的な社会教育運動であります。特に青少年の社会教育運動の中では宗教を重んじる唯一のもので、ボーイスカウト日本連盟規約第十四条に「本連盟はすべての加盟員がそれぞれ明確なる信仰をもつことを奨励する」とあり、指導者がスカウトに対して明確な信仰をもつことを奨励しなかったら、それは指導者としての責務を怠

っているということになります。

ただ残念なことに、永い歴史を持ちながら、世間一般では単なる社会教育運動か道徳的な親切運動、青年会の下部団体程度にしかみていないようです。浄土宗では戦前からボーイスカウト運動に力を入れ、他宗にくらべて数段光彩を放っていました。昭和十二年には全国組織がつくられ、知恩院で大会を開催、昭和十五年には全国大会を、続いて公認の指導者講習会を七日間に亘って山野宮場で開催しました。戦後早く、大本山鎌倉光明寺で浄土宗主催の指導者講習会が開かれましたが、その後の組織づくりが遅れ、現在、真宗兩派に大きく水をあけられました。

その後、各教宗派においてスカウト育成に並々ならぬ意欲をみせております。天台宗では、独特の天台方式で天台宗スカウトの拡充をして注目され、日蓮宗もガールスカウトの充実と共に第七回ジャンボリーの当番宗派の余勢をかって興隆しています。特に最近、世界救世教ではこの秀れた青少年の社会教育に力を入れ、各県一団造りを進行中です。ということは、浄土宗が戦前よりボーイスカウト運動に力をそそいでいたことが大変重要であ

り、先進的であったことと思われれます。

社会の変動は目覚ましいものがあります。特に最近の技術革新には驚くばかりですが、これが子供たちへも大きく影響し、各寺院で子供たちを寺に集めることの困難さとなつてはねかえつてきています。ボーイスカウト運動の素晴らしいところは、この青少年を寺に集めることの難しさを解消してくれることです。今の時代に即応した、青少年のニーズに応える教育方法が用意されているからです。

お寺というとは何か窮屈な所で退屈で暗いというイメージがあるようですが、寺院でボーイスカウト、ガールスカウトを発足させるならば、必ず青少年は喜んで集まってくるでしょう。スカウトの独特なユニフォームは青少年のあこがれであり、野外活動を通じて冒険心をくすぐり、サバイバルを求めている現在の青少年にはうってつけのものだからです。

その野外活動も、ボーイスカウト独特の班制度というものがあり、家族のような小集団の中での個性訓練というべきもので、スカウトは組織の一員としてそれぞれの任務を分担してその責任をはたすうちに、学校教育とは

違う場で……、例えば森林浴が流行していますが、新鮮な空気の中で気温の変化、天候の変わり方などプログラムを実行していくうちに、自然現象への適応を養い、総合体育といえるような活動をしてゆくのです。

それと進歩制度があります。人間の生活に欠くことの出来ない知識や能力は青少年時代にどんどんのばせるもので、人間としての良い下地をつくれるものです。スカウトは先輩や同じ班員に刺激されながら、スカウト教育に定められた必修の課目に合格すると進級して、あこがれの進級章を胸や腕につけることが出来るのです。このようにして身につけた知識や技能が役立って、他の人々を幸福にすることが出来た喜びは、何にもましてスカウトの喜びであります。

人格は筋肉を通して作られるという、青少年の人格品性の正しい発育のために欠かせぬものです。何にも増して、寺院においてのボーイスカウトの場合は小学校三年生から、ガールスカウトは小学校一年生からと、中学、高校、大学と一貫して宗教教育が出来ることが魅力となります。浄土宗の寺院の場合、浄土宗の信仰を中心とした明確な立場をとることが出来ます。小学校低学年から

大学まで徹底した宗教情操教育を行うことが出来るわけで、現在の学校教育では教課の都合上、また法令上、信仰に結びつく教育は不可能で、宗教団体が設立する私立学校に限ってその可能性はありますが、現在のような入試熱を燃やす社会風潮や、物質偏重の文化現象を少しでも和らげることが出来るはず、と確信するわけです。

浄土宗ボーイスカウト連合協議会では、このボーイスカウト運動の根底に流れる「宗教心」ある青少年育成に力を入れており、ボーイスカウト、ガールスカウトに明確な信仰を持つように望んでいるわけです。このためにボーイスカウトには仏教章の制度がつくられており、仏教や浄土宗の教えなど十二の項目を学び、浄土宗スカウトとしての心構えが出来たスカウトには、日本連盟制定の栄誉ある仏教章が浄土宗から授けられることになりました。

これまで浄土宗では、二十四回の仏教章研修会を開催してきました。最近では西高東低から東北方面でも開催されるようになりましたが、関東関西以外でも数多く開催し、浄土宗スカウトの拡大を計っていただきたいと思えます。

仏教章研修会受講資格は高校生で、高校の間に取得せねばなりません。一番宗教に無関心で敬遠するはずの年代である高校生が、仏教章研修会を修了し帰敬式を終えて本堂から退堂してきた顔つきは、受講前の顔とは別人のようになります。子供を参加させた両親がそのように話すのを何度か聞きました。浄土宗の仏教章研修会も回を重ねるごとに、あのむずかしい年代の高校生が立派な浄土宗宗徒として輩出されているわけです。特に昭和五十九年七月二十八日から八月四日まで、第八回日本ジャンボリーが開催された南蔵王において、日本で初めての高校生だけのボーイスカウトの祭典、ベンチャー⁸⁴が開催されましたが、第八回ジャンボリーでの宗教礼拝の時に浄土宗と縁を持ったスカウトが、その後、各地で開催された浄土宗の仏教章研修会に参加、仏教章を授興された高校生が自主的に横の連絡をとりながら、全国的な規模で親睦を重ねている姿を目の当たりにした時、ボーイスカウト運動の素晴らしさと、今後の青少年教化のあり方を考えさせられるものがありました。

同じ浄土宗の教えを信じている仲間として、高校生同士がお互いの苦しみを慰め、励まし合いながら、真夏の

楽しさの中にもまた大変な苦痛であった一週間を浄土宗の教えを受けた同信の友盟として結ばれている姿をみながら、ボーイスカウト運動にもっと理解を願ひ、ボーイスカウト運動に参画しながら浄土宗スカウトの素晴らしさを発見しないである宗門スカウターに知ってもらいたい、と念願している昨今です。全国に数多くおられるオープン団に所属しておられる宗門スカウターの方々に、ぜひ寺院所属の団としての発団をお勧めしたいと思ひます。

特に浄土宗スカウト連合協議会への加盟をいただき、また新たに始めたいと希望される方々には浄土宗スカウト連合協議会で手とり足とり教えてくれるはずですし、現在考えられる青少年の教化運動では最高のものと確信します。

私もスカウト運動はオープン団、いわゆる宗教的に解放された教宗派に所属しない地域団に奉仕しておりましたが、蔵王での第八回ジャンボリーを地元で唯一の浄土宗僧侶スカウターとしてお手伝いすることになり、それを契機にして寺院所属の団を結成した、いわゆる「ジャンボリー団」を発足させたわけですが、それだけに打

ち上げ花火に終わらせたくないと念願しています。

現在の日本全国すべてのボーイスカウト運動で問題点は、リーダー不足ということでしょう。このあたりの解決策は種々ありますが、なんといいっても寺院住職の青少年教化に対する熱意しかないと思います。今回は浄土宗スカウト連合協議会が、特に蔵王での宗教礼拝を契機に、新しい意味での青少年に対する教化施策として、素晴らしい効果をあげ展開していることを中心に紹介させていただきます。

(宮城教区・雲上寺)

岩手教区における児童教化活動の現状

布教研究所員（東北支部） 谷 地 玄 雅

(一)

わが宗において児童を対象とした教化活動がなされてから数十年も経ていると思うが、近年に至っては、特に目立った活動はなく、個人的に興味を持った人だけのものになりつつある傾向に見うけられる。

昭和初期に東北地方を襲った冷害の際には、わが宗は、他に先がけて季節保育所を開設した。機に乗じた児童教化活動の範とするべきものであろう。

爾来、幼児を対象に宗教情操教育を目的とした施設は、各地に多く開設されている。

しかし、幼児期を過ぎたいわゆる小学校に入学した児童への教化は極端に絶えてしまう。それこそ、個人的な

好みによるか、技術的なものを要求されるからであろう。

日曜学校は別として、ボーイスカウト、ガールスカウト等はすべてある程度高い技術が要求され、また地域的なものもあり、簡単に組織化出来ない実状である。

私たちに出来ることといえば、日曜学校、休み中の子供会等と、限られてしまうのである。

岩手教区の児童教化活動としては、

1、おてつぎ子供奉仕団へ参加

昭和五十四年より参加し始め、当初は四人であったが年々参加者が増し、五十九年度は二十名の参加をみた。他の教区に比較すると少ない人数かとは思いますが、岩手教区としては、年々子供奉仕団への関心が高まって来たものと思われる。

2、「法然さま子供会」の開催

法然上人お誕生を機縁として行ったものが引き続き催されている。

○時期Ⅱ夏休みを利用。

○教区内に五ヶ寺の担当を定める。

○佛大児童研究部の巡回を利用する。

教区としては、これらの数少ない事業を通じて、子供たちとのふれ合いの中に、お寺とのつながりを深めてゆくことを目標にしているわけだが、単位寺院の住職一人一人の意欲によってこれら事業の成果が左右されるのである。

昭和五十八年に岩手教区教化団で調査した教化活動のうち、児童に関するものを掲げてみると、

- 1 日曜学校 二ヶ寺
- 2 子ども会 六ヶ寺
- 3 子ども十夜 四ヶ寺
- 4 入学祝（帰敬式） 三ヶ寺
- 5 涅槃こども会 一ヶ寺
- 6 保育園 二ヶ寺
- 7 幼稚園 二ヶ寺

（対象三十一ヶ寺のうち、回答二十ヶ寺）

以上の数字からみると、日曜学校のように連続するものは少なく、季節的に行われるものは住職の都合に合わせる事が出来る故か、多種に行われている。

(二)

入学祝（帰敬式）については、岩手教区で実施している三ヶ寺は、ほぼ同じ年に開催されている。このことは、三ヶ寺の住職が児童教化について話し合い、子供たち（親を含めて）と、またふだんお寺に来ない二代目、三代目の若い親達とのふれ合いの場を造り、お寺に親しんでもらうことを目指したものと聞いている（昭和三十九年から実施されている）。

ここにK寺の入学祝の模様を記してみよう。K寺の入学祝は、昭和三十九年三月二十一日春彼岸中日に第一回が催されている。以来日を変えずに行っている。

① 準備

- 1、該当児童の調査Ⅱ組頭を通じて調査する。
- 2、おたのしみ会の出し物を日曜学校生に担当させるために、その練習に入る。

3、案内状の発送

「入学祝いの集い」として、ほとけ様の子供になるために「帰敬式」を行うこと、また親たちへは年少の頃に宗教的なものにふれることの大切さ、いわゆる宗教情操の豊さを身につけることの大切さを案内する。

② 入学祝いの集い（午後一時開式）

1、当日の準備として、会場づくりを日曜学校生が担当。

2、受付Ⅱリボン・名札・数珠を渡す。担当日曜学校高学年。

3、宗歌の練習Ⅱ寺庭婦人担当

③ 帰敬式

1、入堂・着座

2、戒師入堂

3、宗歌斉唱

4、奉請

5、表白

6、告諭

7、ちかいのことは（三宝を簡単に）

8、灌頂・焼香

9、同唱十念

10、祝辞——婦人会長

11、閉式

④ おたのしみ会

司会・進行すべて日曜学校生によって進める。出しものは、ゲーム・歌・ナゾナゾ・ペープサート等。

（四時頃には終了する）

以上K寺の入学祝について、あらましを述べてみた。

K寺住職も言っていたが、今後この子供たちとのつながりを深めて行くための方法を考えねばならないだろう。

当初参加した子供たちは、既に二十七、八歳になっている。この青年になった者、あるいはなろうとしている子供たちへのアプローチを積極的にしてゆくことが帰敬式を实らせるものだろう。ちなみに、この二十一年間にK寺の帰敬式に参加した子供たちは、約五百人にもなっている。

(三)

岩手教区の現状の一端を記したが、今後それぞれ特

徴ある教化活動がなされてゆくことと思う。しかしこれからは、自坊の活動をお互いに知らせ合い、その内容、方法等について研究し合うことが必要であろう。

(岩手教区・広隆寺)

お十夜の説き方の新しい試み

——真如堂縁起批判——

布教研究所員（関東支部） 渋谷 康海

浄土宗における十夜説教の伝統的な“型”を特色づけるものを挙げるとすれば、それはかの有名な真如堂縁起であろう。これは十夜の縁起として、古来より十夜説教には常套的に用いられてきた話材である。しかしながら私は、以前からこの真如堂縁起というものについて、疑問というか、ある種の違和感を懐いてきた。その理由は、真如堂縁起を浄土教、阿弥陀信仰から見た場合、そこに拭い難い不自然さと違和感を禁じ得ない点にある。

「主人公貞国は家督がないので世をはかなみ、真如堂において出家・遁世の志を立てた。するとその夜、夢枕に一人の高僧が現れて、出家は三日待つべし、と告げた。そこで貞国は剃髪を思い留まる。なんと翌日になって父

貞経は上意に背いて吉野へ蟄居を命じられ、為に三日後に貞国はめでたく家督を相続できた」というのが話の筋である。

そもそも貞国が理由はいかにせよ出家の志を立てたという点、そのこと自体、本来ならば宗教的見地からして大いに推奨されて然るべきものである。ところが縁起ではこともあろうに阿弥陀仏の化身が直々に枕辺に立って、貞国よ出家を急ぐな、三日待てと告げたのである。よりによって阿弥陀仏が出家を願う者に対して、それを押し止めるとは一体なんとしたことか。信心を勧め、布教の立場からすると、ここに強い困惑を覚えるのである。その上、阿弥陀仏が貞国に出家を三日待てとした

理由というのがまた問題である。その理由というのが、例えば、衆生済度のためとか、一国の危機を救うためとか、そういう個を空しくした止むに止まれぬ貴い目的のためではない。ただただ貞国一個人の名利出世のためだったのである。これは一体どうしたことであろうか。全くもって理解に苦しむと同時に、布教する立場として困惑してしまふ。この取って付けたような現世利益譚を広く浄土宗、阿弥陀信仰という見地に置いてみると、そこにいかにも不自然なものを感じるのである。また真如堂縁起を法話、説教の話材として見た場合、話の品格からして穩当を欠く面があるように思われる。それは貞国が靈夢をうけて出家を三日待つのであるが、その靈夢の意味するところはどうかであったのか。すなわち幕命による父貞経の突然の吉野への蟄居と、その結果貞国自身に転がり込んできた家督相続だったのである。このことかも明らかかなように、この話の裏には、時の幕府の執権職をめぐる父と子の、骨肉相食む醜い争いがあったのである。たとえ父貞経がどのような人物であろうとも、父親の目から見れば貞国は自分の執権職を狙う大の親不幸者である。しかも貞国は父親が隱居に追い込まれ

たことを弥陀の加護として、さらに七日七夜の御礼報謝の常念仏をつとめているのである。これが例えば貞国の靈夢によって出家を三日待つたことで衆生を救うことが出来たというような話なら、布教をする側としても救われる思いがする。ところが阿弥陀仏のお告げで出家を三日待った結果が、なんと貞国個人だけにおいて念願の家督を継ぐことができて、父親を追い出してその執権職を手に入れたということでは、単に個人的な名利をめぐる争いに、阿弥陀仏が手を貸したことになる。ここには阿弥陀仏への冒瀆ではないか、と思われるほどのいやらしさがある。こんな劣悪な薄っぺらな現世利益譚から浄土宗の十夜法要が始まったとしたら、たったものではない。実に情けない限りである。

一方、歴史的にこの真如堂縁起と十夜念仏の結びつきを検討してみると、そこにかなり疑わしい面があるようである。五来重氏によれば、両者の結びつきは江戸の慶長・元和・寛永あたりまで下るとされている。とすれば、我々これからの布教師は、こんな不自然かつ劣悪な十夜縁起を後生大事に頂いて、それを得々として高座に乗せようなことは最早許されないと思うのである。我々は

ここに至って真如堂縁起とはっきりと決別して、十夜というものをまず自分が信受でき、そして現代人に心から納得し歓迎してもらえような、新しい角度から説いていくべきではないだろうか。

私は以上のような認識に基づいて、真如堂縁起に代表される過去の十夜縁起の桎梏から脱する方途を模索してきた。その結果として次のように行っている。それは『無量寿経』下巻の「十日十夜の下り」をこそ、中心に据えるべきだと思うのである。なるほどこの十日十夜の下りは、これまで十夜説教の讃題として頻繁に使われてきたことは衆知の通りである。その限りにおいては格別目新しくもなんともない。しかしながらその用いられ方はどうであつたらうか。多くの場合讃題に掲げはするものの、それはただ単に『無量寿経』の「於此修善、十日十夜」が、貞国の十日十夜の念仏、すなわち真如堂縁起を導き出すための手段に過ぎなかつたのではなかつたか。多くの場合『無量寿経』の「十日十夜」と縁起の「十日十夜」とが、偶然にも一致しているという程度の用いられ方ではなかつたか。それでは単なる語呂合わせに過ぎず、これでは讃題がまるで刺身具である。私にはこれが非常

に惜しいことに思えてならない。私はかねがね十夜法要は浄土宗にとって、積尊に直結できる絶好の機会であると思つてきた。ただでさえ浄土宗は阿弥陀仏のことは一生懸命説くけれども、肝心の仏教の創始者たる積尊を説くことにおいて希薄である、という指摘がなされている。にもかかわらず、お十夜はせっかく積尊に結びつく絶好の機会と思われるのに、どうして積尊に強く結びつけていかれないのか。どうして十夜説教の法説そのものを、讃題の『無量寿経』十日十夜の一節でもって説明し切ることができないのか。これがかねてから私が十夜説教にいだいてきた疑問なのである。

そこで私は十夜説教のうち、法説部分について、以下の説き方をしている。

△讃題▽

無量寿経「十日十夜」の一節を置く。

△法説▽

先、讃題の型通りの説明をする。

次、この娑婆と、そこに住む我々凡夫の実相より見た讃題の説明をする。

次、積尊のみ教えとしての讃題の重い意味を説く。

次、「十夜」は釈尊の説く讚題のこの一節、すなわ

ち釈尊のみ教えから出ていることをはっきりと
押える。

次、その精神は讚題の「齋戒清浄」に帰結すること
を、讚題の字句を通して解析し説明する。

次、その具体的事例として、釈尊在世中から出家の
「布薩」⁽³⁾に対して、在家の「齋日」(ウポーサタ)
が存在していたことを歴史的に説する。

次、この「齋日」の精神が釈尊在世中から綿々と続
いて、現代のこの「十夜」に連なっていること
を説く。

次、「齋日」「十夜」の非日常的別時的性格より、法
然上人の別時念仏のおすすめを導き出してくる。

次、讚題の「修善」「為善」の意味について、「念仏
は万善の妙体」で締めくくる。

以上が私のとっている十夜説教のうち、法説部分の
梗概である。もちろん、これのみがお十夜の説き方のす
べてではなからう。ただ真如堂縁起から脱却し、新しい
お十夜の説き方を目差すところの、一つの試論として参
考にしていただければ幸いである。

注

(1) あるいは兄ともいう。説教法話では多く父として語られ
てきた。

(2) 五来重『宗教歳時記』(角川選書)二二七〜二二八頁。

(3) 生野善心『ビルマ仏教——その実態と修行——』(大藏
選書)「ウポーサタ」の実態が理解できる。

檀信徒、青壮年層対象の組織的教化について

布教研究所員（東海支部） 西山 信光

今日は、私が携っております静岡教区教化団活動の流れから、檀信徒青壮年層に対する教化活動の姿勢を、我流ながらレポートさせていただきます、皆様方の御意見、御批判を頂戴して、今後の青壮年教化に対する糧といたしたく思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

私が教化団活動の企画(?)をお手伝いするようになってからもう二十年近くになります、最初の出会いはい「家の宗教から個人の信仰に」を旗じるにした教化活動でしたが、今もって私自身の教化テーマにしているものです。

それまでの教区には、組織的な教化活動という形ものはほとんどなかったように思います。各寺の住職さんが、個々の努力によって慣習の継続や受け売りのな行

事の消化を教化活動として勤めていたような気がいたします。無論私もその中の一人でした。しかし、その中にあって、新しい発想、時代に即したアイデア、苦心されている教化に頭のさがる思いも経験してまいりましたことは、今もって忘れません。

もっとも私自身の年齢的な無頓着さや、当時の寺院経済の状況、一般的には「衣食足りて……」という背景からはほど遠い時代が教化活動の低迷の原因になっていたかも知れませんが、やはりこのような時代だからこそという認識の欠如が最大原因だったと反省されます。

寺院生活の全般、住職としての心得から寺院行事の一つ一つに至るまで、もっと理論的裏付けを勉強しあう、僧侶どうしの切磋琢磨が必要ではなかったか、時代の流

れからくる危機感的な責任感の薄さ、僧侶としてプロ意識にめざめるべき点など、次から次えと思ひ出され至極残念に思っています。

しかし、昭和三十六年、宗祖法然上人七百五十年御遠忌を契機として、「何かやろう」「何かをやらなくてはならない」という気運が周囲の寺々に盛りあがってきたのです。時代的には戦後の落着きをみせ、経済成長の兆しもはっきりと現れた一面、新興宗教の教線拡張運動がやたらと目立ち、既成仏教は葬式仏教だとなじられた時代でもあったのですが、こういった背景の中から静岡教区の組織的な教化団活動が始まったのです。

まず第一段階として、組織づくりの検討ですが、当時の北山教化団長は友田副団長と共に教区内全寺院を訪問して、御本尊前にその決意をお詣りして、その寺の教化姿勢、教化能力を肌で感じられると共に、それを基礎にした教化団活動を企画されたことと思います。活動資金を潤沢にするために、一度だけのお願いとすることで奉賀帳も同道しました。この熱心な態度を目のあたりにした私は、住職として、僧侶として一大転換の機を与えられたのです。そして勉強会として、僧侶としての自覚、

自信を深めるために、法式研究、法話実演、各種行事の差定づくりからすすめ方、会計に至るまでの研修会、『勅修御伝』の輪読会、さらには自坊運営のために経営コンサルタントを招いての会社、商店経営の合理性の導入まで勉強しあったものです。

こうして勉強しながら、企画実行した各行事は目新しく夢中にさせてくれましたが、回を重ねていくに従って慣れの悪面が感じられるようになってまいりまして、線香火的な譬えに似てまいりました。

そこで第二段階として、企画、実行した行事等に恒久性をもたせるために、あるいは教化団活動の努力に永続性を願って、私たち自身に「足かせ」をつけようということで、檀信徒会をつくり一緒に企画、実行を計ったのです。こうして定着した行事が、毎月一日の朝まいり、写経会（組単位）、霊場めぐり（二十五霊場、各大本山）、檀信徒会各組単位活動です。私はこの檀信徒会づくりを自坊の檀信徒再編成に活用させていただき、檀徒それぞれに認識をたかめることに大きな効果を得ました。

この頃になりますと、浄青活動が軌道にのり、教区内に活力がでてまいりました。また一方、詠唱運動も盛ん

になって講員が増え、結果として各行事の参加員力が詠唱指導の先生方によって急増され、寺庭婦人会も運動して活発化してまいりました。結果として青少年女研修会、寺院子弟女講習会、詠唱講習会、五重相伝会、同作礼会、授戒会等と、定期的に盛大に実施することができるといなり、それなりの成果を感じておりますが、もう一つ、「わびしさ」「むなしさ」に似たものがそこに感じられるのです。

参加者から「良い研修会に参加させてもらった」「本当に良いお話を聞かせてもらった」「有難い体験をさせてもらった」等々という言葉はかえってくるが、爾後の生活にお念仏がどうしてもプラスされません。確かに手応えのある五重相伝会すら、百人を越す受者の中から自然に手を合わせることでできる人は五、六人程度といった気がします。もっとも大半の方々は、五重相伝を受けたというプライドを持ち、これが大きなプラスになっていることは感じますが、やはり私たちの教化力なるものは、自己満足の域を脱しないのか？ 特別席だけの中の行事力なのか？ と自問自答している現在です。

ただ、この中で確かな自信となったものは、檀信徒相

手の行事は出来るだけ「きびしさ」を持つと、苦勞すればするほどに効果があるのだということ。参加者に便宜を計った企画、時代だからといって簡便な計画の実施はそれだけの成果しか期待できないということです。

世の中はニューメディア時代。お寺の行事にお詣りしてくれる人はお年寄りだけ、相談事をかける寺世話人は隠居仕事の方ばかり、住職の話を素直に聞いてくれるのは子供会の児童だけ。この愚痴の原因は、私たちの教化活動に「逃げに似た一種の甘え」があるのではないか、お寺の行事はお天気に恵まれて人集めができれば成功、という安直なわりきり方、お義理でも暇つぶしでもよい、布教師に失礼にならない程度の人集めだけに気を配る住職に大きな問題があるのではないか、私自身、呼びかけ易い方向にだけ行くといった具合で、今いずこにアプローチすることが一番大切なのか、ということに目をつむっているのではないか、寺自体を一つの媒体とした教化を考えていかなくはいけないのだと結論し、青壮年層教化を考えるようになりました。

しかし、大きな問題があります。まず自分自身に青壮年教化に対する自信はありません。勿論、住職として、

僧侶として、青壮年層に披歴するビジョンも軽薄です。

墓穴を掘る譬えが心配なのです。

しかし現実には、青壮年の寺院、僧侶に対する「お寺の在り方に何を期待するか」「僧侶に何を求めるか」の二点にしぼった意識調査の答えは、大多数が「仕事が忙しくてお寺どころではないよ。今からお寺詣りして年寄りの仲間入りでは、＼あいつ少し変わっているよ」とみられないか気がかりで簡単に返事ができないよ」といった意見が返ってきたのです。特に印象に残った意見は、「僧侶にはなにも期待していない、お和尚さんも人間だから適当にやんなよ、お寺の境内や施設を気持ちよく開放して欲しいよ」といった現実的なものと、「お寺はいつも清潔な感じにしておいて欲しいよ、背のびしている和尚さんは嫌いだ、一生懸命やっている姿をみれば黙って置いていくよ」など、まさしく教化の原点をついたものがありました。もう自信がないといって迷っている時ではありません。

こんな折、教区檀信徒会の高齢化、後継者問題と相まって青壮年層による活性化が表面に持ち出され、檀信徒青壮年層教化のテーマが浮びあがってきたのです。

さっそく、各寺院の賛同を得、代表者を集めて教区、各組、各寺院単位の青壮年部設立をはかり、希望者に対して婦敬式を浄青担当で試みました。

浄青のメンバーも真剣勝負の心意気で臨み、東京浄青の婦敬式を見学したり、講師を招いてポイイスカウトの婦敬式を勉強したり、リハーサルを持ったり、細かい気配りもチェックして勤めたのです。授者を前にしてのミィティングでは、「信仰は、忙しければ忙しいほど、その時にこそ必要なものであり、信仰を深めていく過程が会社経営の過程であり、立派に処世をしていく過程である」ことを力説し、「苦しい時の神頼み的な宗教心は捨てて下さい、そして正しい信仰を求めて下さい」とお願いする一方、「年代を同一にする僧侶がお互いに切磋琢磨しあって、本当の人間としての生き方を見出し、今後につなげていきましょう。私たちも皆さん方のきびしい生活態度を学びたいのです」と訴えました。

結果は、「黒衣、如法衣姿で協陣に整然と座した老僧たちが美しかった」、「きびきびして、無駄口をたたかない青年僧が印象に残った」、「授者の下足を整頓してくれた若い僧侶に思わず手を合わせました」等々と、こちら

の心配りをちゃんと評価しています。お義理だけの参加ではなかった点に大いに意を強くしたのです。

最近の総理府より発表された国民生活に関する世論調査の結果でも、国民の九割が中流意識をもち、六五%が現在の生活に満足しています。その一方で物の豊かさより心の豊かさを求める人の割合が年々増えていることを指摘しております。

病める現代を救うのは、精神生活の立直し以外にはないでしょう。浄土宗が教化集団であるならば、第一にアプローチするのが青壮年層ではなからうか、この人たちが我々の努力をきちんと評価し応えてくれる人たちだと確信したのです。

この帰敬式を通して、帰敬証の代わりに宗紋入りのネクタイピンを渡し、常に使用していただくことを約束しました。このように帰敬式を重ね、その中から系統的に授戒会、五重相伝会、作礼会、お念仏する生活へ、と組織的に働きかけていきたいものだと思ふ次第です。これを基礎にして青壮年部が、個性をもった各寺単位の活動から組、教区単位へと活動の輪を拡げていったならば、社会的にアピールしていく教化運動(奉仕作業、献血、献

眼、献腎、献体、また仏教徒としての運動)が真の意味をもって完成していくのではないのでしょうか。

以上、個々の教化の必要性もさることながら、檀信徒という特別な枠組をもった人たちへ、それなりの組織的教化の効果を着目して欲しい、と表題を訴えた次第です。

(静岡教区・定明寺)

テレホン法話について

布教研究所員（北陸支部） 大 門 俊 正

北陸ブロック教化センターの企画で、ブロック内四教区に各一ヶ寺ずつテレホン法話が設置されることになり、福井教区では拙寺（善導寺）がいろいろな条件が備わって適切であろうということで選ばれました。

早速昭和五十九年元日から、一週間ごと（月曜日に）話が変わるというローテーションで師匠が始めました。そして、昭和六十年からは私、若和尚が担当することになり、一月一日開始に備えいろいろと想を練っています。何回か続けて行くうちにまた別の問題点も出て来るでしょうが、ともかく現段階で私の考え、テレホン法話の問題点をあげ、また予定原稿二回分を付記して、布教上の何かの参考になれば幸と思ひ、論を進めてみたいと思ひます。

一、時間に關して

最初は百五十秒テープで始めましたが、これでは短かすぎるということで百八十秒テープに替え、現在もそのテープを使っています。

しかし、三十秒長くなったからそれだけ内容が豊富になり、聞く者に印象深いなにかを与えられるかというところ、時間ということだけを基準にして考えると大きな間違いをおこす気がします。

私も一度師匠のピンチヒッターで法話を録音しましたが、ついつい時間一杯でできるだけ多くのことを伝えようとしてしまいます。二百字詰原稿用紙六枚程度の内容でしたが、それをしゃべりきろうと思うとつい早口になっ

てしまいます。一般布教でもそうですが、早口はやはり聞きづらいものです。

ゆっくり、ゆったりと、次は話がどう進んで行くのか期待を持たせるような話し方が理想ではないでしょうか。話がどんどん先に進み、「あっ、今何を言ったのかな……」と聴者に思わせるようでは失敗でしょう。

福井県で吉祥堂という仏具店がスポンサーになった「心のしをり」というテレホン法話があります。参考にしようと思いい私も何回か聞きましたが——話をする人は真宗の僧侶で何回かずつで交代しています——中には百八十秒のテープが切れてもまだ話が終わりにならない場合もあります。もちろんそんな時は終わりの部分がいかに急ぎ足となり、聞く方まで気持ちが悪かきせかし、とても心に残るものとはなりません、反対に本心に心に残るのは内容がまとめあげられて、ゆっくりとした口調の話でした。わが浄土宗でも、浄土選書にまとめられた坂野泰巨師の『声の伝道——ダイヤル法話』という本も出ています。師は、百五十秒テープを御使用ですが、内容の原稿を私の口で読んでみると二分以内で終わってしまいます。話の前後に何か音楽なりが流れているのかもしれない。

れませんが、それぐらいの時間的余裕を持たせた原稿作成が必要だと思います。

付記しました私の原稿は二百字詰で四枚と少々です。理想は四枚以内だと思いますが、未熟ゆえに今の私にはできません。しかし、たった三十秒のテレビコマーションでも実にすばらしいものもあれば駄作もあるのです。たった一言で人の心をつかみ、人生を変えてしまうことだってあるのです。

要は長さではありません。話の中味の充実です。洗練です。

二、電話というものに関して

電話による法話、説教はあくまでも便法だと心得べきです。本来は寺の本堂で、話をする者と聞く者が顔と顔、目と目を合わせ、如来前でするべきものです。ニューメディアを使っているから立派な教化をなしている、などと思つたらとんでもないことです。

ただ、体の自由がきかず、寺へ参りたくとも参れない人には文字通り福音になりますし、また都会地など寺、僧侶に対しなじみの薄い所では、なるほど説教とはこう

いう話なのか、仏教とは念仏とは、とういことに氣染に
氣持ちを向けさせることには大いに役立つと思います。
しかしこの場合も、ぜひ一度お寺へお参り下さい、何日
の日はお念仏の日ですから私と一緒に念仏を称えてみ
ませんか、という働きかけが必要です。

宗教は実践行為がともなつてこそ命あるものとなりま
す。ダイヤルを回し法話を聞いてくれるという実践行為
が習慣づけられたら、今度は寺へ参るといふ行為、次に
は本尊さまを拝み、さらには合掌礼拝念仏すること、と
いうように少しずつでも高次元の方向へ導く心づもりが
なくてはなりません。そういう意味で、自坊の法要、行
事の案内をどんだん宣伝してよいと思います。道徳倫理
の話なら、「なるほど、そうですね、結構なお話です」
で終わっても可とすべきですが、法然上人のお念仏を勧
めることが私たちの大命題であることを常に念頭におい
て「電話」という現代の利器を使うべきだと考えます。

○一月一日〜六日 予定原稿

皆さん、明けましておめでとうございます。善導寺テ
レホン法話です。本年より私、若和尚がお話をさせてい

たきますので、昨年ひきつづきよろしく願いをい
たします。

明治の歌人石川啄木の歌に、

何となく

今年はいい事あるごとし

元日の朝晴れて風無し

とあります。私たちは、年が改まるとすべてが新しく、
美しくなり、今までうまくいかなかったことも何もかも
よくなるような気がするものですが、はたしてそうでし
ょうか。

今年が良い年でありますように、家中みな健康であり
ますように——という皆さんの願いを無駄なことだと冷
やかすつもりはもちろん毛頭ありませんが、啄木の一生
が貧乏と病気で終わったように、年が改まったから、月
や日が変わったからといって、人の心が簡単に変わった
り、世の中が変わったりするものではないようです。

私は中学生の時、今年こそつまらないことで腹を立て
るのはやめよう、もう少しおとなになろう、と元日の朝
誓って、それがもうお昼すぎには、プリプリとつまらな
いことで腹を立ててしまい、自分で自分が本当に情けな

く思ったことがあります。

十二月三十一日の夜、全国のお寺で除夜の鐘がつかれました。百八のいわゆる私たちの心の迷い、煩惱を除くために鐘を鳴らしますが、一度鳴らせば煩惱はなくなるはずですから、次の年はつかなくてもよさそうなものですが、毎年毎年除夜の鐘は鳴らされます。

どうせすぐまた汚れるんだから、といって部屋の掃除をしなかったら、どうでしょう、あなたの部屋はごみだらけになります。

私の心はゴミのたまりやすい心である。汚れやすい心であると思ひ知り、そういう者でも大丈夫だ、救ってやるぞ、という阿弥陀如来のお約束を素直に信じて、「南無阿弥陀仏」と称え、またひとつ心のお掃除をさせてくださいまし。

この法話は月曜日ごとに変わります。七日の日にまたお会いいたします。

○一月七日～十三日 予定原稿

人類の歴史は、いかにしたら幸せになれるかを求めて営々とつづけられてきました。新しき年を迎え、皆さん

も、神かみほとけ仏に、どうぞ本年も佳き、幸せな年でありますように、と祈られたことと思います。

しかし、どうなったら幸せといえるのか——とあらためて考えてみると、「さて……」と言葉ではなかなかうまく表現できないものではないでしょうか。

サン・テブジュベリというフランスの小説家はこう表現しています。

「いかにささやかなものであれ、己の役目をはっきりと見つめ得たとき、我々は初めて幸福になる」

具体的な例で説明しますと、よく「私は平凡な主婦で何にもできません。ただ家にいるだけです」と卑下する人がいますが、とんでもないことです。

子供を産み、育て、家庭を守り、御主人が毎日安心して働きに外へ出られるようにすることが、どうして平凡な、つまらない仕事でしょうか。

「ただいま」と子供が学校から帰ってくると、まず「お母さんは？」と聞きます。

寺にすることが多い私の場合でも、最初に「お父さんは？」とたずねられたことはまずありません。

御主人も、まあ新婚さんとはともかく、結婚後何年もた

てばそうう奥さんにチャホヤしません、奥さんが病気で寝込んだ時や、単身赴任した時は、「ああ、女房がいてくれたらなあ」と、口には出しませんが、心ではつぶやいているものなのです。

それほどに、子供たちや御主人はあなたをたよりにしているのです。

毎日毎日実に貴重な役目をはたしているのが家庭の主婦です。

男の場合も、「あんたがいないと会社はやっていけないよ」と言われれば張り切り切らざるを得ません。

どんな人でもかならず何かの役に立ち、だれかにたよりにされているのです。

今、現在のあなたのまわりを静かに考えてみて下さい。何かあなたの役目があるはず。それが他人からみたらつまらない、ささやかなものであったとしても、その役目の重さに気がついた時、私たちはしみじみと幸せになれるのではないのでしょうか。

十四日、月曜日に別のお話になります。

(福井教区・善導寺)

一念するために

—一つのアプローチ—

浄土宗布教研究所員（北陸支部） 山 本 雄 毅

本文は佛大における浄土宗教学布教大会に発表したものの概要である。

「三帰依文」は、冒頭に「人身受け難し、今已にうく」として生まれ難いこの世に生を受けたことの自覚を促し、次いで「仏法聞き難し、今已に聞く」として百千万劫を経てもあい難い仏法を私が今見聞することの尊さを言っている。法然上人も『一紙小消息』で「受けがたき人身をうけ、あいがたき本願にあらう」喜びを述べ、かさねて「天に仰ぎ、地に臥して喜ぶべし、このたび弥陀の本願にあらう事」として、十悪五逆の衆生が難中の難の阿弥陀仏の本願に会うことを喜ぶべしとしている。『登山状』にも二度にわたって繰り返しているのを見ると、受け難

き人身を受け、遇い難き本願にあらうことは、法然上人御自身におかれても、浄土信仰にとっても、大事の中の大事なことだということがわかる。

最初に「受け難き人身をこの世（地球）に受けて」を三つの観点、①宇宙の中の地球、②太陽と地球、③地球と自分、から述べる。

次に、法然上人とある宇宙飛行士の回心について述べる。

「多生曠劫をへても、生まれ難き人界にうまれる」ことは難しい。盲亀浮木の譬えもまた人の生を受ける難しさをいうが、地球そのものも存在するは難しいといえよう。

いずれにしてもこれらは大宇宙自然の不可思議な因縁と合のなせるところであつて、人智の到底及ぶところではない。

① 宇宙の中の地球

アメリカのパロマ天文台の大望遠鏡が捉え得る最大距離の宇宙の大きさは、二十億光年を半径とする球状空間の中に島宇宙（銀河宇宙）が約三十億存在し、一つの島宇宙の中に一千億の恒星があり、その一つが太陽である。その大きさの対比は、島宇宙が地球大とすると太陽系の大きさは野球のボールくらいとなる。要するに大宇宙は無始無限の広さを持っている。よつて地球は宇宙のチリのようなものである。

② 太陽と地球

太陽は地球上のすべての生物の恵みの神であり、また古来より、信仰の対象として人間と深いかわりを持つてきた。太陽は地球にとつて生命存続のエネルギーのもともであり、それ自体は死の神でもある。一九六二年にアメリカのマリナー二号によつてその存在が確認された

太陽風（死の風）は「吹き出してくるプラズマ流（高エネルギーの素粒子の流れ）で、秒速五百キロ、温度十万度」もあり、紫外線（死の光線）以上に恐れられている。地上に生物が存在出来るのは、大気上層部のオゾンが紫外線を吸収し、地球の磁場が太陽風をはね返しているためである。

③ 地球と自分

宇宙から見た地球は闇黒の大宇宙の中に青々と光り輝く物体（地球が青いのは生命圏、つまり水圏と気圏から成る大気圏の青さで、地球の表面からわずか二十キロメートルで、それ以上は死の世界である）である。地球は手ではじくとこわれそうなマールのように見え、もろくて弱い人間がそこに生活しているのを見ると神の恩寵を感じずにはおれない、と宇宙空間に旅行した飛行士たちは思うらしい。さらに宇宙空間における人間と地球の関係は「地球にとつては自分の命は無に等しいかもしれない。しかし自分の生命にとっては、地球の生命は唯一の依り所なのである」と、地球以外に依り所のない人間の切迫した気持ちるを伝えている。この関係は、赤子が親を、凡夫が阿弥陀

仏の本願を唯一の依り所としている関係に似ている。

限らない広がりをもつ巨大な宇宙の中における唯一のオアシスが地球で、それをとりまく生命圏によって死の神・太陽が恵みの神となる。そのオアシスに「生を受くことは悦びの中の悦びなり」と喝破された法然上人の洞察力には、ただ尊崇の念深まるばかりである。

回 心

浄土教では自分の心を捨てて念仏の教を信ずることを回心といひ、『歎異抄』では「その回心とはつねづね本願力のまことの教えを知らぬ人が、弥陀の智慧をいただいて、これまでの心持ちでは往生はむつかしいと思ひしり、もとの心をひるがえして、本願をたのむにいたる。それをこそ回心とはいひ」とある。法然上人が四十三歳

の三月に、善導大師の『観経疏』の「一心専念弥陀名号行往坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼仏願故」の三十四文字に至った時、一筋の光明が上人の胸を射、上人は法悦の涙にぬれ、一向専修念仏に入り、初めて六万遍の念仏をされた。この事實はまさしく回心にはかならない。

キリスト教でもイエス・キリストの教えを信ずることを回心というから、浄土教におけると同様に、信の確立を回心と呼ぶことが出来ると思う。

宇宙飛行士チャーリー・デュークの回心

彼は唯物主義者で、教会へ行くことはあつても神を信ぜず、人間が神になればよいと思ひ、人生に宗教は必要ないし、宗教によって人生が変わると思つていなかった。宇宙体験によって精神的インパクトはあつたが、それはテクノロジーに対する信頼感を高めたにすぎなかつた。宇宙飛行士をやめた後、彼はその名声をフルに利用してビール販売業を成巧させ、世の人が望むあらゆる名声と富を手にした。しかし金が儲かれば儲かるほど心が空虚になつていった。富や名声の獲得は、人生の六年間をすべて捧げた宇宙を飛ぶという目標を失つた彼の心をいやしてくれなかつた。そんな時に夫人につれられて聖書研究会に行き、聖書を読むうちに、次のようなことを感ずるようになった。

1、何か目の前にかかっているヴェールが少しずつ取り

のぞかれるような気がした

(＊繰り返すことの大切さ)

2、二千年も前にかかれた言葉がこれほど人の心を動かすとは思ってはみなかった

3、人間が神になろうとするのは根本的な誤りだ

(＊浄土門の修行は愚痴にかえりて極楽にうまるとしるべし)

4、人間は神に背きつづけてきたということがよくわかった

(＊天におどり地におどるほどに喜ぶべきことを、どうしても喜べぬというのは、……煩惱のせいである)

5、神という存在をうけ入れることが出来た

(＊其土有仏号阿弥陀今現在説法)

6、それまでの私の人生は、すべて何かを「得る」ことを目的としてきたが、それ以来何かを人に「与える」ことが目的になった。

(＊六波羅蜜の一つ布施―財施・法施・無畏施―)

(＊印の所は筆者が入れた)

以上のことを感ずることにより、彼は精神的にも満ちた、世界中に伝道するようになった。

むすび

法然上人が御法語の中に繰り返し「本願にあう」難さと悦びを述べられたのは、御自身が善導大師の『観経疏』の一文三十四文字によって回心を得、一向専修念仏に踏切られた宗教的実体験をふまえているからであろう。

「智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし」は、凡夫に回心を経て念仏することを求めているのではない。ただ往生極楽するぞと思いつて一心に念仏する時、次第に阿弥陀仏との感應道交が生まれ、摂取をうけ、「三垢消滅し、身意柔軟なり、歓喜勇躍して善心生ず」となっていくのである。

「浄土の教えは時機を叩いて行運に当れり」と申された法然上人の意をよくよく味わい、「ただ一向に念仏すべし」を「もっぱら心をいたして念仏を申します」と受ける。これが「受け難き生をこの世に受け、あいがたき本願にあうことは悦びの中の悦びなり」の生活実践の姿ではないだろうか。

(富山教区・阿弥陀寺)

参考文献

- 一、『宇宙からの帰還』立花隆。中央公論社
- 一、『人間死んだらこうなるだろう』岡部金治郎。第三文明社
- 一、『歎異抄』増谷文雄。筑摩書房
- 一、『一紙小消息講述』岸寛勇。総本山知恩院布教師会
- 一、『法然上人のこゑ』椎尾弁匡。共生会
- 一、『選択集講述』小沢勇貫。浄土宗宗務支所
- 一、『新・仏教辞典』中村元監修。誠信書房

法然上人の宿業観の一考察

布教研究所員（近畿支部） 西 岡 信 孝

ここに一枚のハンカチがある。どこをとってみてもハンカチがもち上がる。たて糸よこ糸によって一点が決まる。私の存在もハンカチの如く時間と空間の交差の一点にあり、森羅万象私を支え、私を私たらしめる。そして私の存在がまた森羅万象にかかわってゆく。

過日（八月三十一日夜）NHKテレビで「世界の科学者は予見する——核戦争後の地球——」が放映された。核実験の実写フィルムや特殊撮影をつかって生々しく核の恐ろしさ、人類滅亡のさまを茶の間に送りこんだ。第三次世界大戦の危機をはらむ米ソの対立と平和外交のかけひきの現在、エネルギー資源の枯渇に代わる核への依存増大とそれに伴う地球汚染、また核戦争からの生存の望みが叶えられるか不確実なままの核シエルト（居住空

間）の建設等々、目をそむけたるなるほどの人間悪逆非道の実態と、己が存在が拒否される地獄絵図をまた凝視せずにおれない番組であった。はたして二十一世紀は安全かつ健やかに全生命体がそのいのちを輝かしているのか。戦慄を覚えるのは私一人ではあるまい。現在各国が保有している〇・五%の核を殺戮につかうなら九〇%の人類が滅亡し数年をまたずして大気が汚染し全世界が冷却し、全生命が死を迎えるという。仮にも冗談にも核ミサイルのボタンを押す狂人が現れたら、その瞬間に人類及び全生命体の死の扉がひらかれる。そのボタンを押す狂人とは誰ぞ、みな一人一人冷やかにボタンを押すことの出来る人間ではなからうか。はたして人間は理性的に善人をつらぬき通して生涯を全うしてゆけるのか。は

たまた狂人として感情の赴くままに暴れ狂うのか。いずれか否や一人一人に心問うところである。

山川草木すら悉有仏性、万物の靈長として全生命体の存在を左右すると豪語する現代文明まっただ中のお互い、ゆかしい心優しい心を持ち合わせて恒久の平和、全生命体への大安住を願ひ求めるのも人間、戦争にあげくれ、大地を血で染め、全生命体を危機に追いこんだのも人間、戦後四十年かりその不安定な平和を築いていると思ひ込んでいる私を含めた人間が、大地をまたまた血で染めてゆく心ありやなしや。

元祖大師があみだ如来の選択本願念仏への第一歩をふみだされたのは、あの時国公の遺言にあった。「汝さらに会稽の恥を思い、敵人を恨むること勿れ、これ偏へに先世の宿業なりしと」先世の宿業なりとは単なる運命論ではない。自分とかわりのないさだめでもなく、人生を遊離した観念論での言葉でもない。生きることの悲しみ哀れみにみちあふれた血の吐く思いの言葉である。源内武者定明がおのれの身を亡ぼさんとしたその心を誰がつくらしめたか。今刃に倒れ息まさとだえんとする私にその科があるのである、と九歳の勢至丸をさとす父君

であった。悪をつくらないつくるまいと誓えども、つくりたくないですむ私ではない。悪を造る身こそ人間の宿業である、と心の底よりの悲痛な叫びでもあった。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六道を輪廻して苦界を出ずる道すら閉ざしめているのは、他ならぬ度し難い私自身にその責があるとの叫びでもあった。そして「早く俗をのがれ家を出てわが菩提をとぶらい、みずからが解脱を求めんには」のすすめは、人間存在の根底に渦まく我利我移執妄念の自覚よりひらかれゆく大いなるものへの謝罪であり、同時にそれが許されてゆく抱擁への示唆ではなかったろうか。父の遺言耳の底にのこりて心の内に忘れたことのない上人の不惜身命の仏道修行は、おのずと宿業をかかえ苦しみのたうつ上人自身であり方あり様をみつめてゆくことになったのであろう。智慧第一の法然房とはめたたえられても、一皮むけば悪業煩惱の渦中の自己をみいだすばかり、十悪の法然房、愚痴の法然房、という言葉をはいたところに聞く。また「われは烏帽子もきぬ法然房なり、黒白をも知らざる童子の如く是非もしらざる無智の者なり」は常に仰せのことばである。父の遺言での第一歩、漆間家の断絶を納得

せしめての母との生別を越えての叡山の修行は、山法師の乱脈ぶりに中断せしめられ、二十四歳嵯峨釈迦堂祈請の年はまさに源平合戦への幕ひらく保元の乱の時であった。南都遊学にも得ること少なく、再び黒谷別所への隠遁の日々にも聞こえてくるは比叡南都の山法師の乱暴狼籍であり、京洛の平家一門の栄華の蔭に泣く庶民の悲しみの声また声、亡父の遺言かみしめかみしめ経巻をひもとかれつつ、とくとくと流れる血のあたたかみの掌を合わしつつ、教うるに人なく示すに輩もないあせりと虚しさの日夜、動乱の世の事象を我ひとり関せずとせず背中においつつ、耳をおおうても聞こゆるは亡父の遺言、目を閉ざしても目えくるは別れの母の涙のしたたり、一部の特権階級の私物化の仏法、鎮護国家の付属品となりゆく仏法の中で、無明煩惱にふりまわされている私であると自覚される上人にとって、当時の時代様相をわが身から離れて客観的に他人ごととながめる心は毛頭なかった。いやその渦中の中に私ありと身体一杯でうけとめておられたのである。

やがて亡父と同じ齢の四十三にして人間の宗教、全生命体願共諸衆生往生安楽国の仏法としての浄土開宗は、

そのような時代の鬼畜、獸同然のありさまこそ、人間法然上人自身の心のえぐり出たところからうみだされたのである。目にし耳にする乱世の人間醜態のさまざまは、上人の心の中に巢喰う無明煩惱そのものの現れに他ならないとの心の露吐こそ、念仏の声となって上人の口より知らず知らずにとばしたのであろう。

道徳的宗教的な修行によって、わが心中の無明煩惱の悪鬼を追い出したとみえたのはいつとき、いつまた寸時に帰り来たりて住みつくのである。いつ悪鬼とびでてわが生涯を闇黒におとしられるやも知れない愚鈍のもち主の私、平生虫一匹も殺さない善人が世々流転の無明煩惱の宿業もよおすところ、突然に百千人の命を平然とうばう雑毒の私、それが己の姿であると弥陀大悲の鏡に写し出される。くずれゆく私、上人の遇智者としての受容かくあらんか、上人の『念仏大意』によれば、

「ここにわれらこのたび初めて人間界に生をうけたるにも非ず、世々生々をへて如来の教化にも菩薩の弘経にもいくばくかあひたてまつりたりけん、ただ不信にして教化にもれ来たるなるべし」

これをよくよく味わいたい。

人間は、過去より現在また未来に向かって果てしない罪業の存在であることを示す、主体的に体験—身口意三業輪廻の存在—を通して、己が姿の中に過去に仏と出逢うことなく現にまた仏に近づきえない私を知るのである。

現在を内省することにより過去の三界六道転展輪廻の私を知り、未来までもちこむ悲しみを呼わうのである。

過去と未来を含む現在の私の自覚みきわめの上に救いがたし絶望のどん底の私の上に、あなたから救いのみ手がさしのべられている今に気づくのである。いや気づかさせていただくのである。まさしく阿弥陀如来の今現在説法したもう大悲のつつみこみの中での私であるとの全身全霊のうけとりが、流れ流れている血のあたたかみの中に現にあることをすなおに信じてゆける世界が開けゆく。上人の言葉「然るを浄土門に入るの日、智慧をたのまず、戒行をも護らず、心器を調へず、只々、甲斐なく無智者となりて本願をたのみ往來を願う也」の私と生まれかわらせていただくのである。「まことに大悲誓願の深広なること、たやすく詞をもてのぶべからず、心をとどめて思ふべき也」に言葉合わすばかりである。

話は初めにもどって講題にかえりたい。核戦争のボタ

ンを押すことすらたやすく行う私であるとの自覚こそ、元祖大師の宿業のうけとりになづく道であろう。日常生活の中での私中心、人間中心のエゴイズムをいかに理性で、学問道徳でおおいかくそうとも、六道輪廻、三界流転の経験をもつ私にとってなすべきことは、罪悪生死の宿世の罪業よりの解脱の道を拓きたまいし阿弥陀如来への帰命しかない。身口意三業のなすところ三途八難の業の私、自業自得の私が弥陀大悲の中に浄化されてゆくのである。まさしく「失は我にあり」の低頭合掌のまえに先々からひらかれていた念仏の白道が雄々しく用意されていることに気づくのである。草木も枯れ尽くす核戦争へのボタンは私がつっており、辺々たる曠野に似た煩惱具足の私が、己を救うに道なしと、断崖絶壁に立たされていその時に同時に、松のみのこる弥陀の本願念仏の声が、ずっと以前から届いていることに気づかせていただくのである。如来大悲のハンカチの中に、過去より経道滅尽の未来迄、私がつつみこまれていたのである。宿業ゆるされる大願業力の中の私である。

(奈良教区・西方寺)

源智上人に関する布教上の試論

布教研究所員（近畿支部） 羽 田 恵 三

はじめに

来たる昭和六十一年、二年に、三上人遠忌を迎えるにあたり、特に、勢観房源智上人に関して、その行状の如何なる点に着目し、布教をなすべきか、について考えてみたい。

すでに周知の通り源智上人は、十八ヶ年にわたり、法然上人の常随給仕なされ、建暦二年（一一二二）正月二十三日には「一枚起請文」を頂かれ、さらには、御本尊、道具、房舎、聖教等の遺物を相承された高足の門弟の一人である。

しかしながら、宗学上の研究においても、また布教上の取り扱いにおいても、あまり多くは取り上げられてい

ないということに、いささか不思議の感をいだくのである。

『法然上人行状絵図』（第四五巻）にしても

「勢観房一期の行状は、ただ隠遁を好み、自行を本とす。のずから法談などはじめられても所化五、六人よりおほくなれば魔縁きをひなむ、ことごとしとてとどめられなどぞしける」

と伝えられているように、法談などの機会はなるべく避け、対外的な活動を離れ、ただ隠遁を好むといった、いわゆる消極的な態度の人物像として映し出されていたのである。

ところが、昭和五十四年に、真言宗玉桂寺（滋賀県信楽町）の阿弥陀佛像の胎内から発見された源智上人自筆の

「阿弥陀佛像造立願文」等の新資料、併せてそれに基づく新研究によって、これまでの源智上人像とは異なる面が浮び上がって来たことは、まことに喜ばしいことである。これらの新資料を踏まえて、源智上人に関する布教上の留意点を探ってみたい。

一、源智上人の出生とその背景

「平氏にあらざるものは人にあらざ」とまでの栄耀榮華を極めた平家一門が衰退の途をたどり、源氏の勢力拡張という、まさに世情騒然たる、寿永二年（一一八三）に源智上人は、小松の内府平重盛の孫、備中守平師盛の子として出生された。

父親については、従来敦盛、通盛、資盛、重衡等の五説が挙げられているが、その詳細は他に譲ることにする。また布教上は、最有力である師盛説一本にしぼる方が好ましい。

母親については、不詳とされていたが、伊藤唯真教授は新資料に基づいて、推量の域を出ないとしながらも、その母を秘妙と推定されたことは、布教上心丈夫なことである。

父師盛は、源智上人出生の翌年の寿永三年、わが子の顔を見ることもなく、一ノ谷に討死を遂げているのである。

それに先立つ平家都落ちの折には、敵勢迫る騒然たる浴中に踏み留まって、二度と再び相い会うことのない師盛を、身重の体で見送らねばならなかった母秘妙の心情は、察して余りあるものがある。

頼みの父を失い、やがて文治元年（一一八五）三月、平家が壇ノ浦の合戦に滅んでからのちは、日ごと敵しくなる平家残党狩りの手を抜くぐりしながら母は、さぞかし心細い思いで源智上人を養育されたであろうことが想像できるのである。

二、源智上人の出家

源氏の探索を逃れ、世間をはばかり忍んで暮らすこの母子にも、やがて念仏の法縁が訪れた。わが子の先き行きを案じ、また平家一族の菩提のために、建久六年（一一九五）法然上人の許へ、母は十三歳になられた源智上人を伴ったのである。

母の話を聞くにおよばれ、法然上人も、遠く我が幼少

の逆縁に想いを馳せながら、さだめし心動かされたであろうことは、「上人憐愍覆護他にことにして」(『法然上人行状絵図』)とあることから容易に想像ができる。

また自らが、直接の得度の師とならず、源氏の探索の手から護る意味においても、政界の大物である九条兼実公の弟、青蓮院の慈鎮和尚を得度の師匠に選ばれたというのも、法然上人の慈愛の一策であったと考えることができる。まもなく源智上人は、法然上人の許に帰り、以来十八ヶ年に亘って常随給仕なされるのである。

その間の源智上人は、師法然上人の憐愍の情を一身に受けられ、浄土の法門の教示はもちろんのこと、大乘円頓戒も附属され、道具本尊、房舎、聖教等の遺物一切を源智上人に拙されたということからも、いかに信任厚き門弟であったかが知られるのである。

三、源智上人の行状

法然上人在世中においては、

「ただ隠遁をこのみ自行を本とす、おのずから法談などはじめられても、所化五、六人より多くなれば、魔縁きおいなん、ことごとしとて、とどめられなどしける」(前

出)

と記されるように、わが身の境遇を思い、表立った行動をせず、常随給仕をおのがつとめと心得て、それ一途につとめられたようである。

それ故に、法蓮房信空、真観房感西、善慧房証空、聖光房弁長、石垣の金光房といったいわゆる側近の門弟たちとは特に親しかったようである。

中でも真観房感西は、『選択集』の執筆者にも選ばれた高足であるが、それまで彼の役であった給仕役を、源智上人に譲り、日常の細々した指導、あるいは老境の法然上人に代わって教学面での指導も時折受けたもののようにある。このことは、新出資料「結縁交名帳」に、法然上人と自分との間に感西の名を挙げていることから、源智上人にとって恩のある特別な関係にあった人物であることがわかる。

感西は、その後まもなく亡くなっているが、その臨終に際して形見の要文を求め、感西はこれに応えて「如來本誓一毫無謬云々」の文を書き与えたと伝えられている。

その後、源智上人二十五歳(建永二年)の時法然上人は、四国流罪の法難に遭われるが、その時の源智上人につい

ては諸説がある。配所まで随行したという説もあれば、病気のため見送ることができなかった、またあるいは、摂津、津ノ浦まで見送り、別れの形見として水鏡御影を頂かれたとも伝えられている。いずれにしても、側近のしかも本流の門弟であったにもかかわらず、対外的活動の人でなかったために、南都北領からも目をつけられなかったことは、不幸中の幸いというべきであろう。

四、源智上人の報恩行

源智上人に関して、もっとも良く知られているところは、建暦二年（一一二二）正月二十三日、病いよいよ重くなられた法然上人に対して、

「念仏の安心、年来ご教誡にあずかるといえども、なを御自筆に肝要のご所存、一筆あそばされて結わりて後の御かたみにそなえ侍らん」と願い出られたことであろう。

法然上人は、愛弟子の要請に応えて直ちに書き与えられたのが『一枚起請文』であり、今なおこの御親筆が、大本山金戒光明寺に伝えられている。

二日後の正月二十五日に法然上人は、八十年の生涯を

終え浄土におかえりになるのであるが、法然上人示寂の後は、それまで消極的であったと見えた源智上人が、祖師報恩のため、かつは正流護持のためにと、全力を傾けて立ち向かわれたのである。

そのことについては、昭和五十四年八月二十三日に、玉桂寺阿弥陀仏像胎内より発見された、源智上人の「阿弥陀如来造立願文」等に依って知ることができる。

詳しくは『玉桂寺阿弥陀如来立像胎内文書調査報告書』並びに『浄土宗の成立と展開』『源智と法然教団』（伊藤唯真教授）等に明らかにされている。

胎内文書の中、「阿弥陀如来造立願文」はまさしく源智上人自筆のものであることが確認されている。

その願文の内容は、凡夫衆生の出離の道、末代有縁の門を示された法然上人の恩徳を讃仰すると共に、三尺の阿弥陀仏立像を造立して、法然上人への報恩に擬し、かねて数万人に及ぶ念仏同行の姓名を納めて先亡霊位の恩徳に報いんとするものである。そして像中に奉納してある道俗、有縁無縁の者が、ともにこの源智に導かれ、必ず法然上人の引接を蒙らんことを願っているのである。それは法然上人が、利益衆生を先とされたことに基づく

ものであり、利益こそ師の御恩を報ずる莫大な作善であるとする源智上人の信念の表れに相違ないのである。

そして、上中下の三分の善をもって、上は諸天善神乃至国王国母百姓万民から、下は自身の決定往生のためにまで回向するのである。

おわりには、先に往生したものは還来して残りし人を導き、もし自身が先に往生したならば、速やかに生死界に入つて他のものを化し、自他ともに九品蓮台に生ぜんことの円満成熟を、諸仏諸菩薩諸天善神に敬白しているのである。

その造立願文は、法然上人の亡くなられた建暦二年の十二月二十四日となっている。わずか一年足らずの間に、およそ五万人に及ぶ人々に結縁せしめた「結縁交名帳」を、阿弥陀如来像の胎内に納め、おそらく一周忌に併せて開眼供養が行われたのであろう。

消極的と目されていた源智上人が、祖師恩徳報謝のため、これだけ大がかりな勧進をなされたその積極的な布教活動は、もっとも注目すべきことである。

そしてまた、祖廟祖山の復興、併せて黒谷百万遍本山の復興など、京都における正流護持に専心なされたその

貢責も留意すべきことである。

源智上人七百五十回忌を迎うるにあたって我々が為すべきことは、たとえ五万人に数は及ばずとも、各々が一人でも多くの人に念仏結縁の機を勧め、有形無形にかかわらず、念仏交名帳を作ることであろう。そしてそれが最大の報恩行であり、かつ最大の布教であると考えらる。

(京都数区・大善寺)

源 智 上 人 略 年 表

元祖	源智	年 号	事 蹟
51歳	1歳	寿永2 (1183)	源智生まる
63	13	建久6 (1195)	母、源智を伴い元祖に後事を托す
66	16	〃 9 (1198)	『選択集』述作。没後起請文
68	18	正治2 (1200)	感西示寂(48歳)
72	22	元久元 (1204)	11/7 七ヶ条起請文
75	25	正元元 (1207)	3/16 元祖配所へ赴き給う時津ノ浦まで送る
80	30	建暦2 (1212)	正/23 念仏安心の肝要を請い遺訓『一枚起請文』を稟く
〃	〃	〃 (〃)	12/24 先師報恩の爲阿弥陀仏像を造立し結縁者交名を納入(約50,000人)
	33	建保3 (1215)	秋、元祖附属の本尊を南禅寺北の西福寺に安置し、以後この寺に居住す
	34	〃 4 (1216)	正月10日より25日まで別時念仏を修す
	35	〃 5 (1217)	平家一族菩提のため兵庫に長伝寺を建立
	45	安貞元 (1227)	6/23 山徒元祖廟を破壊。難をのがれ賀茂へ
	47	寛喜元 (1229)	経ヶ島留錫教化の事あり
	52	文暦元 (1234)	元祖の鴻恩に報いんと大谷の禅房を再興す。 四条帝より華頂山知恩教院大谷寺の額を賜わる
	54	嘉禎2 (1236)	元祖門下異端者のため『選択要決』を著わす
	55	〃 3 (1237)	9/21 二祖に書を送り宗祖正流の伝持の旨を喜ぶ
	56	暦仁元 (1238)	2/29 二祖上人寂(77) 12/12 源智賀茂功德院にて頭北面西念仏往生

助業を大切に

——自坊の教化活動から得たもの——

布教研究所員（中四国支部） 村 中 成 信

蛙の子

筑前琵琶をトランクに入れて、中国路から山陰路へ、北九州から南九州へ、時には五島列島の方まで琵琶布教に出て、春と秋にはほとんど寺を留守にする日の多かった琵琶布教師の村中巖城師が、私の父であり師匠でもございました。

私が布教を始めて各地へ出掛けるようになってから、「琵琶説教のお上手な巖城師はまだお元気ですか、お若いころにはよく来ていただいていたんですよ。お父さんのファンが多くてねえ。もうお幾つになられますか。ほう、もう九十歳におなりですか。もう琵琶はお弾きじゃ

あないでしようなあ」と、こんな調子で父の琵琶布教にかけた執念ともいえる偉大さを教えられます。

私の兄弟は八人おりますが、兄弟みんな琵琶説教の御法礼で大きくさせていただいたようなものです。私も今から思えば、みじかに師匠が居ながら琵琶説教を習う機会がなかったことが、心残りといえは心残りです。

立派な布教師を父に持つ私ですが、私が布教師を志したのは六年前のことです。昭和五十二年八十二歳になった師匠が、「わしはもうしんどくなった、後はまかせな、やってくれや」。気丈夫な父でしたが、さすが八十歳を越えるとしんどくなってきたのでしよう、隠居をする決心をしたようです。

私は佛教大学を卒業すると間もなく、山口県の大島にあるさる寺に置いていただくことになり、着替えの風呂敷包みをもって自坊を後にしました。「弘願寺は小さい寺じゃけん二人はいらん、わしが頑張れるまで頑張るけん、そのときまでおまえは自由に暮らせや」。檀家百軒ほどの小寺ですから仕方ありません。一年の半分は布教にて支えてきた寺ですから。

しかし、いつかは寺に帰らねばならない、いつかは寺に帰らねばならない責任があるんだ。そんな気持ちで、私をサラリーマンの道に進むことを思いとどまらせてくれたでしょう。いまになって思えば、私を布教師にしてくれたのは、自坊の小さいこともあったでしょうが、山口県の大島での寺住まいが何よりも肥やしになったのでしょう。布教の盛んな土地で信心深い人たちが多く、一年の間にはあちこちの寺で大きな法要があり、布教師さんも各地から来られます。私も信者の方々に上手に話が出来たらなあ、いつもいつもそう思っていました。

大島での寺住まいをすること十四年間、妻ももらって二人の子供にも恵まれ、寺の手伝いと保育園の手伝いと、時には住職に変わって念仏講の法話もさせていただきました

した。機は熟したり、昭和五十二年春、きしくも元祖大師法然上人の立教開宗の御歳と同じ四十三歳に自坊に帰ってきたのです。

住職三年もの言わず

「住職三年もの言わず」と言う言葉があつての、寺に住職してしばらくの間はあまり派手に動きまわらんほうがええ。三年ぐらいたてば檀家の様子も分かってくる。

檀家に信用されんといけんぞ」昭和五十二年四月一日弘願寺三十五世住職になったときの師匠の助言でした。しかし私はその助言に従いませんでした。檀家百軒ほどの寺で、八十を過ぎた、人のいい老住職では無理もありませんが、本堂も随分と荒れておりました。まず手はじめに不十分な檀家名簿を頼りに正しい名簿作りから始めました。有名無実の総代であつてはいけない、総代の再編成として第一回の総代会、続いて婦人部の結成、そして寺は檀家の皆さんの物であることの周知徹底をはかる、雨漏りで随分と荒れている本堂の修理、百五十枚の畳の入れ替え、荘厳道具のない内陣などなど、頭の痛いことばかりでした。予算の捻出に晋山式を計画し檀家の皆さ

んに初めての寄付をしていたことになるました。

「住職三年もの言わず」どころか、住職拜命当初よりの大改革でした。約一千万円の予算でスタートいたしました。が寄付はなかなか集まらない、しかしやるしかない。

無謀な点もありましたが、その年の十一月二十三日、荘厳な晋山式を挙行することが出来ました。

これで基礎固めが出来た、これからは積極的な教化活動だ、とにかく寺に来てもらわねば何にもならない。日曜日の朝まいり、西国霊場の観音講、おつぎ運動の支部結成、矢継ぎ早に計画し実行に移した。次は信者の養成にかかると。五重相伝において他にない、でも五重相伝が何やら知らない人ばかりでした。

戒名は生きているあいだに式を受けて頂くもの、とにかくありがたい法要だから受けてみなさいと、一人一人の説得から始めました。やれば出来るもの、翌年五月受者八十人で見事に奉修することが出来ました。松山地方では五重相伝の法要は近年ありませんでした。「生きている間に戒名が貰える式」というのが珍しかったのか、成満の日にはテレビ局が来る、新聞社が来る、大変な騒動でした。受者に対するインタビュー、「戒名は普通死

んだときに付けてもらうものですが、生きている間に戒名をいただいた感想はいかがですか」。何人かの受者にインタビューをしておりますが、皆一様に深い感銘を受けたことを話しておりました。私も五重相伝のいわれなど質問されましたので、この時とばかり大いに宣伝しておきました。晋山式の時も、道中練供養が珍しいとテレビ取材されましたが、松山というところはそんなところなのです。

せっかく五重相伝に付いた受者を逃がしてはならない、これだから勝負だ、念仏信者を育ててはいけない、あらゆる機会を利用して寺での会合を持ちました。当時流行のカラオケも買いました。一杯飲んで歌っているようすを見ると、今までの暗い寺のイメージはありません。民謡も歌うし、ダンスもするし、今のこと阿弥陀様も降りてきて一緒におどりますのではないか、と思うくらい賑やかです。おつぎ支部の会員の皆様とおつぎ奉仕を兼ねた旅行も始めました。寺に人が集まるようになれば自然と寺の中がきれいになって来ました。寺の中がきれいになると本堂に入るだけで自然と合掌の姿になれます。合掌の姿ほど美しいものではありません。

教師はみんな布教師

布教はまず自坊の布教から、これが私の信念です。檀家が百軒あるとか、二百軒あるとかではなく、信者が何人いるかが大切ではないでしょうか。念仏を喜んでくれる人が何人いるかが大切です。そんな信者の養成こそ私たち布教師の大切な役目なのです。だからこそ、教師はみんな布教師でなくてははいけません。

「念仏はありがたいのです、念仏を称えて下さい」、ではかななか称えてはくれません。法然上人の御法語の第十八章自身安穩の中に助業の大切さをお説き下さっております。

現世ヲ、スグベキヤウハ、念仏ノ申サレンカタニヨリテ、スグベシ。念仏ノサハリニ、ナリスベカラン事ヲバ、イトヒスツベシ。一所ニテ、申サレズバ、修行シテ申スベシ。修行シテ、申サレズバ、一所ニ住シテ申スベシ。ヒジリテ、申サレズバ、在家ニナリテ申スベシ。在家ニテ、申サレズバ、遁世シテ申スベシ。ヒトリ、コモリ居テ、申サレズバ、同行ト共行シテ申スベシ。共行シテ申サレズバ、一人コモ

リ居テ申スベシ。衣食カナハズシテ、申サレズバ、他人ニ、タスケラレテ、申スベシ。他人ノ、タスケニテ申サレズバ、自力ニテ申スベシ。妻子モ、縦類モ、自身タスケラレテ、念仏申サンタメナリ。念仏ノサハリニ、ナルベクバ、ユメユメモツベカラズ。所知所預モ、念仏ノ助業ナラバ、大切ナリ。妨ニナラバ、モツベカラズ。惣ジテ、コレライハバ、自身安穩ニシテ、念仏往生ヲ、トゲンガタメニハ、ナニ事モ、ミナ念仏ノ助業ナリ。

近年吉水講の詠唱も始めました。和讃の中にもお念仏はたくさん出てきます。歌っている間に自然と念仏を申すことになります。謡曲だって念仏はいくらでも出てきます。

また、『一紙小消息』の中にもお念仏の功德を、

一念十念ニ、足リスベシ

とあり

三念五念ニ至ルマデ、ミズカラ来迎シ給フ故ナリ

とあります。

来たる昭和六十一年、二年は、浄土宗にとって大切な三人の御遠忌を迎えます。私たち教師一人一人が布教師

であるという自覚のもとに、「念仏の助業」を大切に、
自坊の檀信徒の教化活動に、また一宗の教線拡張のため
に邁進しようではありませんか。新興宗教の非難をする
まえに、彼等が信者獲得のためにいかに努力をしている
かを学ぼうではありませんか。

(愛媛教区・弘願寺)

百万遍知恩寺阿弥陀経碑の布教上の活用について

布教研究所員（九州支部） 安 藤 雅 寛

三上人御遠忌を迎えるに当たり、三上人顕彰の研究が活発となり、宗門外に、浄土宗第二祖鎮西正宗国師聖光

上人、浄土宗第三祖記主禅師然阿良忠上人、総本山知恩院・大本山百万遍知恩寺二世勢観房源智上人が周知されつつあることは宗幸の至りである。

しかし二祖上人及び三祖上人に比して、勢観房源智上人の研究は従来資料乏しきため、『勅伝』所載の域を脱し得なかつたが、昭和五十四年八月、滋賀県玉桂寺蔵の阿弥陀仏像胎内より発見された源智上人の造立願文及び念仏結縁者交名録は、従来之源智上人観を一変させるものであった。その内容は、翌五十五年三月に玉桂寺から出版刊行された『玉桂寺阿弥陀如来立像胎内文書調査報告書』に詳しく、また佛敎大学史学科の諸先生によって

綿密に検討解明中とのこである。その成果の一日も早からんことを鶴首している次第である。

今般浄土宗敎学布敎大会第六部会において、「百万遍知恩寺阿弥陀経碑の布敎上の活用について」愚見を披露させていただいた。勢観房源智上人に関する説話の一端として活用出来得ればとの私見であることを、まずもって御理解願いたい。

源智上人略伝

勢観房源智上人は、小松内府重盛の孫、備中守師盛の子として寿永二年（一一八三）に生誕している。しかし父親については、従来から、師盛・敦盛・通盛・資盛・重衝の五説があるが、師盛説を正統として以下『勅伝』に

は「平家逆乱の後、世のはばかりありて、母儀これをか
くしもてりけるを、建久六年十三歳のとき上人に進ず。

上人これを慈鎮和尚に進ぜられにけり。かの門室に参じ
て出家をとげをはりぬ。いく程なくて、上人の禪室に参じ
参し、常随結仕首尾十八箇年、上人憐愍覆護他にことに
して、浄土の法門を教示し、円頓戒この人をもちて附属
とし給ふ。これによりて道具本尊房舎聖教、のこる所な
くこれを相承せられき」。以下『一枚起請文』の附属、

宗祖滅後の数重なる法難の中、加茂神宮寺（後、功德院知
恩寺と号す。百万遍知恩寺）に住し、大谷の禪房復興（華頂
山知恩教院大谷寺）、外に向かつては「ただ隠遁をこのみ自
行を本とす。をのづから法談などはじめられても、所化
五六人よりおほくなれば、魔縁きをひなん、ことごとし、
とて、とどめられ」京畿における吉水正統の伝燈者なる
も、その義を水火に諍うことなく、その論を蘭菊に致す
ことなく、内において「教導の恩徳は、海の如くに尤も
深し。三有の栖を出でて、四徳の域に入るは、偏えに我
が師の上人の恩徳なり」と宗祖への知恩報恩の念、称名
の行、正行の勤怠りなく、「先師念仏の義道をたがへず
申す人は、鎮西の聖光房なり」と別流を立てることもな

かった。嘉禎（一二三七）三年九月二十一日、二祖聖光上
人宛に、「（前略）御辺一人正義傳持之由承及候、返々本
懐候、喜悅無極思給候、必遂往生本望、可レ期引導値
遇縁候者也、（後略）」の状を送り、翌曆仁元年（一二三
八）十二月十二日、功德院の廓にて入寂された。

小松内府重盛公伝説

『平家物語』に小松谷灯笼堂の記述がある。

「六八弘誓の願になぞらへて、四十八間の精舎を建て、
四十八の灯笼を掛け云云」

同じく『平家物語』金渡には、治承の頃（?）

「重盛は、九州から妙典という船頭を呼び、金三千五百
兩を与へ、その内五百兩を宋への渡船費用とし、残り千
兩を明州育王山の僧へ、残余二千兩を宗帝へ贈り、宋帝
より五百町歩の田地を育王山へ寄進した」

『西宗要』には、

「重盛は浄土信仰に徹した人で、臨終の善知識は、法然
上人がつとめられた」

『宗像軍記』には、

「建久九年（一一九八）秋、宗像へ宋船来着、宋帝より重

盛追善の爲石仏持參するも、平家滅亡の爲、受取り無きまま、石仏を宗像に放置して、帰国した」

『大本山善導寺誌』には、

「建曆二年三月十三日、善導大師の夢告を蒙り、翌十四日博多の津にて云云、善導大師渡來の由來、船板名号縁起にも、船主妙典の名あり」

以上、『平家物語』『西宗要』『宗像軍記』に述べる重盛伝説は、重盛の浄土信仰を如実に現わしている。特に金渡には記述なけれども、『宗像軍記』には、治承の頃、重盛は宋国に仏經を求めたと記述され、重盛死亡を聞いた宗帝が、追善供養のため送った石仏というのが、現在、福岡県宗像郡の宗像大社に所蔵されている。重要文化財指定の阿弥陀經碑である。

この阿弥陀經碑の模刻碑が、源智上人開創なる百万遍知恩寺と、小松正林寺にあることを知っている人は以外に少ない。この碑を拜するたびに、重盛公の浄土信仰と源智上人の宿縁を想わずにはいられない。

百万遍知恩寺阿弥陀經碑

百万遍知恩寺阿弥陀經碑は、山門を入り、御影堂の手

前釈迦堂に向き合つて立っている。その造像銘は、東大寺別当道恕の書で漢文にて

「選択集に引くところの襄陽竜興寺の石刻阿弥陀經は、隋の陳仁稜が書くところなり。治承年中に小松内大臣重盛公の請により、薨後の建久の間に、宋朝より渡來し、筑前州宗像郡田島第一宮の内にあり、また元照の疏戒度記にも見られる。当山第二生源智上人の勢觀房は、重盛公の孫、備中守師守の子なり。円光大師の高弟となれり、又什物に唐書の阿弥陀經あり、專持名号など二十一字、襄陽經と正しく相符合す、その因縁あるをもつて、今石に復勒し、大日本山城州愛宕郡平安城の東長徳山功德院知恩寺の釈迦堂の前に建つ。正徳四年甲午年夏五月二十五日 百万遍四十三世常蓮社然譽直到在住」

とある（一七四）。

宗祖述作の『選択集』は建久九年であるが、『選択集』第十三章念仏多善根篇に記述の「故に竜舒の浄土文に云わく、襄陽の石に刻む阿弥陀經は、すなわち隋の陳仁稜が書けるところ、字画清婉にして人多く慕玩す。一心不乱より下に、『専ら名号を持すれば、名を称するをもつて故に諸罪消滅す、すなわちこれ多善根福徳の因縁なり』

と云えり。今世に伝わる本この二十一字を脱す」の襄陽の石刻阿弥陀経に比すべき、この碑が、宗像に渡来したのが、建久九年秋とすると偶然の一致か、それとも後世の作為か？ 二十一字とは「一心不乱專持名号以称名故諸罪消滅即是多善根福德因縁其人臨命終時」である。この二十一字の意味するところ、御教示願いたい。

またこの碑の片面（『阿弥陀経』を刻む面の背面）には、中央に阿弥陀仏の座像がレリーフ様に刻まれ、その上面に六字名号、その上面に、『無量寿経』の第十八・第十九・第二十願の三願文が刻まれている。しかし第十八願文は、『選択集』にて、宗祖が削除されている如く、この碑も「唯除五逆誹謗正法」は刻まれている。重盛公追善供養のため宋国より渡来し阿弥陀経碑が、その因縁により、百万遍知恩寺と小松谷正林寺境内に模刻建立され、星霜二百七十年、知る人少なく、拝する人少なく、寂しい限りと存じ、また浅学非才の故に、その宗義上の意味も理解出来得ぬ愚生なれど、源智上人と重盛公の宿縁、元祖上人選択集と阿弥陀経碑の因縁等、布教上活用の一助となれば、未整理ながら記した。なお、百万遍・小松谷の両模刻碑共、宗像大社所蔵の重要文化財の

碑の寸法と異なっている。

宗像碑 高さ三尺五寸三分

幅 二尺三寸七分

厚 七寸六分

百万遍碑・小松谷碑

高さ四尺八寸……六八 四十八願

幅 二尺五寸 五五 二十五菩薩

原 九寸 三三 九品浄土

なお、小松谷正林寺阿弥陀経碑は、延享三年（一七四六）建立され、百万遍の再模刻といわれているようである。

義山上人の『阿弥陀経随聞講録』にも、諸説が記されているが、布教材料として雑駁な点御寛願したい。

（福岡教区・法泉寺）

注

（1） 今般浄土宗で統一された三上人の御名称

（2） 玉桂寺阿弥陀仏像造立願文中より抜粋

（3） 元禄十七年本版本

少年非行と宗教教育

布教研究所員（九州支部） 金子 貫 司

非行の拡大深化は著しい。昭和二十六年、三十九年と二回のピークを示した少年非行は、ここに来て第三のピークを示し、量的に記録を更新するとともに、その内容も「低年齢化」「粗暴・攻撃化」「陰湿・残忍化」「女子非行」または逃避的、退行的な「登校拒否」「自殺」といった、これまでの非行とは質的に大いに変化をしている。非行を初めとする青少年の問題行動ほど、その時の社会的条件や環境を敏感に反映するものはない。

昭和五十九年版『犯罪白書』が先日発表されたが、その中で現代社会の病理、犯罪現象を解析するとともに、犯罪の特質を「豊かな社会における犯罪」そして位置づけている。

近年わが国における科学技術の急速な進歩と、経済の

発展は、国民の生活基盤を大きく変え物質的豊かさをもたらした。しかし、その反面経済第一主義の思潮は利益追求と消費指向を増大させ、更に学歴偏重重視の傾向は受験競争をますます過熱化させた。その結果、人々の心は他を省みる余裕を失い、あるいは慢性的欲求不満のとりことなり、孤独感、無力感を増大させ、意識や行動もますます利那的、逃避的、頹廢的傾向を深めていった。

また、全国的な都市化の波は地域社会の連帯感をも希薄にし、自己中心的な風潮を強めていった。加えて享樂的、生命軽視、暴力的風潮など、生活環境は悪化している。白書によると、五十八年度の非行少年の八割近くが実父母を有し、九割近くが経済的に普通以上の家庭の少年であり、非行の一般化が窺われる。今日のはだが非行

に走っても不思議ではない。まさしく青少年非行誘発の温床になっているといっても過言ではあるまい。

以上のような青少年およびそれを取り巻く社会情勢の中にあって、いかにして青少年をしつけ指導していくかは極めて難しい問題といわなければならない。アメリカやヨーロッパでは、教育は教会、学校、家庭の三つが三位一体となつて行われている。この三つが機能しあつているため、統一的な目的観も生じてくる。しかしわが国ではキリスト教にとって代わる宗教的バックボーンはなく、三者の調和、統一が全く見られないのが実状である。

学校教育にあっては、明治三十二年の文部省令第十二号により、教育の世界から宗教が完全に除外されるようになった。戦後民主主義を基調とする現行憲法のもとでは、基本的人権の重要な要素として、初めて国民に完全な信教の自由が保障された。即ち「宗教を信する自由」の保障と「強制されない自由」を強調している（二十条）。また教育基本法には「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他の宗教活動をしてはならない」（第九条）とあるように、憲法の精神は

国家権力と宗教活動との分離を厳格に定めたものであつて、教育の根底における宗教の役割を否定したものでないのである。しかるに「宗教教育」あるいは「いかなる宗教活動」をも禁止するという字句だけが厳格に解釈されて、学校教育からあらゆる宗教的要素を排除するがごとき印象を与えたことは極めて遺憾なことである。この結果が学校が宗教に無感心であるだけでなく、宗教軽視、反宗教的傾向をきたしたのである。またそのことが広く一般に、宗教を信仰していることが、非近代的な信条の持ち主であり、時代錯誤の特殊な人間であるかのごときに見られる風潮をも生み出していったのである。

西ドイツに教育視察に行った人が「あなたは教育者か」と聞かれ「そうだ」というと、「ブッディストか」というのでやむを得ず「そうだ」と答えたところ、具体的教育問題が提示され、「カトリックではこう考える。プロテスタントではこうだ。仏教ではこの問題をどのように考えるのか」と質問をされ、大変困惑するとともに、非常にショックをうけたということであつた。教育の根本目的が人間性の完成を指導助成することにある限り、宗教の機能を無視することば出来ない。人生における意義

を正しく理解してこそ、教育は真にその理想を生かしようものといわねばならない。

また、教育に対する一般の認識が、あたかも財産などと同じく、社会生活における有利な条件を身につけるためのもの、というようになされている傾向もある。教育投資という言葉すらあるが、これは教育は直接の財産ではないにしても、財産への間接的な条件と考えているのである。そのようなところには、「人間」は問題にならないし、なおさら人間の最も深い問題を照明するものとしての宗教は問題にならないであろう。したがって、学校教育の中で人間そのものが主題、目的にならず、単に教育が何かの手段であるかぎり、いかに宗教教育が法的に禁止されなくとも、自然に忘却されていくことになる。入学試験偏向、学歴偏重の弊害は幼稚園で既に始まり、上級進学につれて次第にエスカレートして、ついに教育そのものの意義をも犯そうそしているのである。

一方、家庭こそは子どもの生活の基盤であり最も宗教的情操を涵養される場所である。非行の実状を見るに、先に述べたとおり、ただ形式的に両親がそろっているか

どうか。あるいは経済的に恵まれているかということよりも、親子の愛情のつながり、家族間の結びつき、親のしつけ、指導のあり方が重要である。意識するとしなやかかわらず、親は子どもにも多大な影響を与えている。一人の男性と一人の女性とがどのような家庭生活をいとなむかということが、直接子どもに感化受容されていくのである。

都市化によって生産場面が居住場所から離れ、仕事に打込む親の姿、仕事を通じてつくられる大人の連帯の姿、親の実力、これらを子どもたちは見聞することが出来にくくなった。仕事に追われ、疲れきって帰り緊張を解いた親の姿は、子どもたちにはぐうたらなダメおやじとしかうつらなくなった。また、子どもの減少、子どもへの教育熱など種々の原因によって、子どものいうことは何でも聞いてやる、場合によっては子どもが口を出す前に先立って要求をかなえてやる、という風潮が支配するようになってきている。子どもが親考行するのではなく、親が子どものサービスに努め、親が子どもを叱るのではなく、子どもが親を叱りつける、子どもが親を恐れるのではなく、親が子どもを恐れる。受験生ともなればまるでは

ものにさわるように気を使う。こうした「甘え」と甘えを支える「甘やかし」の中で育った子どもは、失敗があっても自分が悪いのではなく、周囲が悪いと考えるようになって当然で、わがままなひ弱な人間、自己反省、自己批判を忘れ、責任追求や他者批判に長じた人間を産み出していく。そして、幼児期から欲求を阻止される状態の体験のない彼等には、精神的耐性が十分育っていないので、環境の変化に伴う些細な欲求阻止状態に陥っても、これを自ら克服することが出来ず、ついには問題行動に走るといった傾向が多分に見受けられるのである。

およそ子どもを円満な人格の持ち主に育てようとするならば、その任にあたる者自身が、人間として真摯に生き、模範たりうる円満な人格の持ち主にならねばならぬ。それに感化されて子どもはよくなっていくのである。ルソーは『エミール』の中で「父と母とは協力してその職務を分担し、一致した方針の下に子どもを教育しなければならぬ。子どもは代わる代わる二人の手に渡されねばならぬ。世界第一の名教師に教育されるよりも、知識はなくとも分別ある親に教育された方が子どものために良い」と書いている。家庭こそ真の人間性の教育が出来る

ところであり、知育に偏った学校教育の欠陥を補うことが出来るのである。

さて、家庭における子どもの教育の目標を円満な人格の完成であると先に述べたが、具体的に四つの目標を以下に示すこととする。

- (1) 相手を大切にする、思いやりのある心を育てる
(人間観)
- (2) 善悪の判断、物の大切さ、勿体ない、という心を育てる (価値観)
- (3) 努力・奉仕の心を持ち、満足感・成就感を育てる
(幸福観)
- (4) 人間としての正しい生き方、生命の尊さ、使命感を育てる (人生観)

ある協議会の席で警察署の若い防犯課長が、署の調査によると非行累犯者の九〇パーセント以上の割合で家庭に仏壇ないしは神棚がなかった。仏壇のあるなしは、子どもたちの罪の意識の上に多大な影響を与えているので、家庭には仏壇が是非必要であることを力説しておられた。祖父母、両親ともになす朝な夕なの礼拝は、

子どもの心にもやすらぎを与えたとともに、みほとけはいつでもどこでもわたくしを見ておられる、守っておられるのだという畏敬、自律の心が醸成されていくのであろう。仏壇を中心の生活の中にこそ、少々短絡的に聞こえるようであるが、明るい希望のある家庭生活がひらけ、先に述べた四つの目標がおのずと子どもたちに育っていくことであらう。仏壇があるかないか、毎日拜むものとしてでないものとの差は大きい。しかし、核家族化の進展で仏壇の所有、祖父母との同居率は著しく減少している。たとえ分家であっても礼拝の対象としての仏壇を安置するように啓蒙すべきである。

教化者は、健全な宗教的雰囲気が社会に充溢すれば青少年は善導できることを確信すべきである。われわれから学校教育、社会教育、家庭教育の各現場に積極的にアプローチして真摯強力な社会的教化活動を展開すべきであり、少なくとも日曜日の午前半日は寺に出向き心を養い、宗教的情操を深めることの出来るように努力すべきである。そこに初めて相互敬愛の明るい社会が具現するであらう。

(長崎教区・聖徳寺)

女子少年の教誨に携つて

——宗教教誨に対するアンケート調査——

布教研究所主事 岡 崎 覚 豊

青少年の非行は年々悪質化し、集団化し、覚せい剤等薬物によるもの、暴走族等道交法違反によるものを特徴として、増加の傾向を迎っています。

非行者の更生については、学校、家庭、社会において、はたまた、保護観察、矯正教育等、それぞれの責任においてなされてきていますが、ここでは、女子少年収容施設の宗教教誨について申し上げてみたいと思います。

昭和四十三年九月より、法務省の施設で広島県下にある貴船原少女苑の宗教教誨に携っております。過去を振り返って考えてみますと、あまり成果を挙げる事が出来てはいません。そこで少女苑の概要について申し上げますと、収容年限が、長期収容者で十ヶ月から十五

ヶ月、短期収容者で三ヶ月から五ヶ月、年齢は、十四歳から二十歳未満の女子少年であります。学歴も中卒から高校中退とまちまちであります。

はじめて教誨に行きました時、当時の苑長先生から、「生徒は、生育歴も教育程度もまちまちですから、中学校二年生程度の者に理解出来るような内容で、やさしい言葉を持つてお話をして下さい」と助言がありましたので今日もそうに努めております。

教誨の形式は、総集、グループ、個人となつていますが、グループ、個人の申し出があまりなく、おのずから総集教誨が中心であります。

毎年一月初めに、一年間の教誨のカリキュラムを立て

を進めています。その時々、少女たちの聞く態度により変更することもありますので、計画通りにはまいりません。

今年の三月頃、苑長先生から、「最近の女子少年の非行は、男子少年の非行と何等区別することの出来ない非行を行い、その数も年々増加の傾向である」と心配していられました。

このような現代の女子少年でありますから、家庭生活の中においても、特に、女子だからと言って宗教的雰囲気の中で育ってはいません。そのような女子少年に対して、教誨で宗教的雰囲気をかもし出すのは、なかなかむずかしいことであります。

どうしたら教誨の成果を挙げることが出来るか、その一つの方法として、教誨に対する女子少年の意識調査を、施設と協議の上、アンケート方式により実施いたしました。

『貴船原少女苑におけるアンケート調査』

昭和五十九年五月

調査対象

長期生徒 三十六人(十ヶ月〜十五ヶ月)
短期生徒 五人(三ヶ月〜五ヶ月)

一、家庭の宗教は何という名称ですか。

長〇知っている 二十一

内訳 創価学会 七 浄土真宗 六

仏 教 五 キリスト教 二

日蓮宗 一

〇知らない 十五

短〇知っている 二

内訳 浄土真宗 一 創価学会 一

〇知らない 三

二、現在あなたは、宗教を信じていますか。

長〇信じている 十五

内訳 仏 教 三 浄土真宗 二

創価学会 二 キリスト教 一

日蓮宗 一 その他 六

〇信じていない 二十一

短〇信じている 一

内訳 キリスト教 一

〇信じていない 四

三、人生に宗教が必要と Think いますか。

長○思 う 十九

○思わない 十七

短○思 う 二

○思わない 三

四、教誨師の話を聞いて、自分の宗教を持ちたいと思

いますか。

長○思 う 十四

○思わない 二十二

短○思 う 二

○思わない 三

五、教誨師の話は、むずかしいと思 いますか。

長○思 う 十一

○思わない 二十五

短○思 う 二

○思わない 三

六、教誨師に、どのような話を して欲しいと思 います

か。

長○聞きたい話

自分が体験した話。実際にあった話。人生の教

訓。人生に役に立つ話。人の心について。親子

関係について。人間として、どんなことが一番

大切か。死んだら、自分たちはどこの世界に行

くのか。非行について。その他。

○わかりません

短○宗教信仰をしたら、どうなるのか。キリスト教

の話。人の心について。その他。

七、何をする時が、一番たのしいと思 いますか。

長○自分の好きなことをする時 十四

寝る時 九

食事をする時 六

家族と仲よく暮らしている時 一

静かに何にもしない時 一

皆と話をしている時 一

遊んでいる時 一

電話をしている時 一

ショッピングする時 一

自由な時 一

短○好きなことをしている時 二

食事をしている時 二

皆と話をしている時

一

八、何をしている時が、一番つらいと思いますか。

長○仕事をする時

十六

対人関係で悩む時

十一

自分のことで悩む時

六

別になし

三

短○体育の時

一

仕事をする時

一

親に暴力をふるう時

一

別になし

一

九、社会に帰って困った時に、誰が一番さきに相談し

たいと思いますか。

長○両親兄弟

十一

お母さん

七

保護司や親

六

友だちや彼氏

四

心から心頼出来る人

三

出身校の先生

一

貴船原少女苑の先生

一

まだわからない

一

短○お母さん

三

友だち

二

十、少女苑に入苑して、何が一番よかったと思いますか。

か。

長○自分について、反省が出来た

十四

親の気持ちが変わったこと

六

覚せい剤をやめるきっかけが出来たこ

三

と

三

忍耐することを覚えたこと

三

集団生活が出来たようになったこと

三

洋裁、編物、お茶が出来たようになっ

二

たこと

二

自分のことを心配していてくれる人が

二

あったこと

二

別になし

三

短○自分の悪いところをなおせること

二

シンナーをやめる自信がついたこと

一

自分自身がおちついたこと

一

対人関係を仲よくすることが出来るよ

一

うになったこと

一

十一、実社会において、宗教家の話を今までに聞く機会があった人。

長〇あった(創価学会)

一

〇なかった

三十五

短〇なかった

五

〈注 長Ⅱ長期収容者 短Ⅱ短期収容者〉

この結果、少女たちの宗教と教誨に対する意識が少しはわかってきました。

実社会において、あまり宗教に縁のなかった少女が、教誨という宗教行事にふれることによって、少しずつではありますが、宗教に関心を示してきています。

施設では、少女たちの身分を、一級上から二級下の四段階に区分してありますが、上級になるに従って教誨の回数も多くなり、それだけ宗教と教誨に対する関心が深まっていることが、この調査で明確になりました。また、環境が人格形成の上にかに大切であるかと言うことを思い知らせられました。

結論的に申しまして、短期収容少年に対する教誨の方法として、はじめは道徳的規律から段々と宗教的情操を陶冶するように努めなければならないと思います。

この調査を土台として、少女たちの希望に応じながら、法然上人のお念仏の道を進めていきたいと思えます。

(山口教区・浄泉寺)

三上人遠忌をどうむかえるか

〈発表者〉

教 学 院 代 表	大正大学教授	戸 松 啓 真
布教師会近畿支部代表	滋賀教区	奥 山 善 文
〃 東北支部代表	山形教区	佐 藤 晋 康
〃 九州支部代表	福岡教区	花 田 玄 道
〃 東海支部代表	尾張教区	兼 岩 春 浩

司会 では始めるにあたりまして、お念仏をしたいと思います。合掌、同唱十念、南無阿弥陀仏……。

お疲れと思いますが、三日間のいよいよ最後の意見発表の時となりました。有終の美をもって終わりたいと思いますので、もう一層元気を出していただきたいと思えます。これから意見発表をいただきますが、テーマは「三上人遠忌をどうむかえるか」ということに題しまして、早速始めさせていただきます。教學院を代表されまして、大正大学の戸松啓真先生にお願いいたします。では先生よろしくお願いいたします。

戸松 このプログラムを拝見いたしますと、教學院の代表というようになっておりますけれども、しかしこれは私がたまたま教學院でお世話になっているという意味でございます。今度新しい試みで、この意見発表の布教師会の先生のところへ入れていただいて、その教學院の方からも三上人の御遠忌を迎えるにあたって意見を述べるということで参ったわけで、教學院の意見をまとめた上で、この壇上に登ったわけでございません。だからといまして、何も私が責任のないことを申し上げるということではございません。自分で考えていることを申し述べ

べれば、それで責任を果たせるかと思いましたが、よくよく考えてみますと、これは一宗の大変な問題でございます。

まず最初に、五十年前の時の御遠忌に、一宗は如何なる行事をし、対応をされたかということから調べて、そして今後現代のような時代に、念仏門の一僧侶として、あるいは念仏門の大衆としていかに教化信仰に想いをいたすべきかという大きな問題であると思えます。まず早速五十年前にどうであったかということを、『宗報』の必要な所のコピーをお願いしました。ここにあるのが五十年前の『宗報』でございます。ここにあるのが五十年前から二三九号までに、その間のいろいろな三上人の遠忌に対する伝達であるとか、あるいは訓辞でございますとか、あるいは法要の差定までこれに出ております。そういうものを拝見いたしました。はたして五十年の歳月がたっておりますけれども、現代現在においてそういう五十年前に行われたことを参考にいたしました。そしていかにあるべきかということを考えました時に、これは容易ならぬことである。しかし、二祖三祖の時代も、あるいは五十年前の昭和十二年の時も、あるいはまた今

日の六十二年に、一宗の三上人の大遠忌法要が行われるというのですが、恐らく歴史はくりかえすということ、『宗報』を読んだり、それから二祖の著述を拝見したり、特に『授手印』を再び読んでみますと、中心になる問題が二つあるよう感じたくてございます。このことについて、時間の制限もございませんので、はたして十分に申し述べられるかどうかわかりませんが、考えを述べさせていただきます。

まず第一に、この『宗報』を拝見しましても、この伝達の多くは、記念の法要についての支持が多いわけでございます。これはつい、この前に近々行われました八百年遠忌におきましても、単にお祭りのような行事だけの催しだけであってはならないという議論が必ず出ておるわけでございます。そして布教や教学の上で、その時に向上を帰するのではなければならぬという意見が出てくるのが常でありました。これは至極当然なことでございます。まして、実質的なことがなければ、報恩の誠がいたせないのではないかとすることは当然でございます。しかし一方、思いなおして考えてみますと、これは宗教信仰における儀礼とその内実との事柄であると思うんです。

私はどちらかというと、今まで教学の方に關して、いろいろな書物を読まさせていただきましたのですが、決して信仰における儀礼儀式を軽視してはならないと、私は考えております。その意義というものはつきりと把んで、儀礼儀式ということを行うことは、これは信仰上必要なることであり、また大事なことであるというように考えております。私のような教学の面での者がそういうことを申しますと、それじゃ内容はどうなんだということになりますけれども、一宗の伝法のことを、私も少しやらせていただいているので、常にかけているわけですが、一宗の伝法すなわち伝宗伝戒における儀式作法、これは非常に大事なことであるのは、皆さんご存じのとおりでございます。正授戒・要解・密室道場における差定のことを考えてみますと、これは非常に重要なことがある。三上人の御遠忌の時にも、一宗の法要は出来るだけ簡素であることは、現代では必要なことだと思いますけれども、しかしこれを盛大にやるのが、すなわちその恩徳に報いる一つの道であります。このように考えるのは奇異に感じられるかと思えますけれども、先に述べさせていただくわけでございます。

私は一応、教學院から試みに今回始めて指名をされて出たわけでございますから、宗学的な立場から、この三上人の遠忌というものをどう迎えたらよろしいか、ということを述べる義務もあるかと存じます。単に教学的な意味だけではなくて、もう少し一般的な、自由な立場から、一淨土宗の念仏の末流の僧侶として、まずその考えをそういう立場で申し述べさせていただきたいということをお断りしておくわけでございます。

初めに七百年の昔も、五十年の昔も現在も、結局は同じだといったことは、私は昨日のシンポジウムの先生方のご意見を聞き、そして質問がございました。いろいろな専門の立場からご意見を述べられ、また質問もありません。私は聞いております内に、結局先生方はいろいろな立場から述べられておりますけれども、結論というものは、みんな一つである。それは『授手印』の中に、二祖上人が法然上人の教えの結論として、二重の『授手印』の伝の中の結婦一行三昧である。私は大変失礼なことでございますけれども、昨日出た先生方がそのように一つの結論に昇華したということは、これこそいつの時代にも、この念仏門の我々としては、それが結論であり、

結論でなければならぬ。『選択集』と『授手印』の伝と二祖のご著述を讀ましていただいたところから申し述べるわけでございますが、最後にはそこに行く。こう思っておりますところ、昨日のシンポジウムの結果は、はからずも最後の結論がようするに念仏を實踐することですと、力強くいわれた。今日でもまた、七百年昔の精神が、法然上人のご精神が、五十年前の三上人の遠忌の時と同じように高く掲げられました。そういう伝統が今日でもまだ死んでいない、生きていっているということを感じて、私なんか申し述べなくても、自然にその所へ結論が行っており、また行くべきであると考えます。

先に結論みたいなことを申し述べましたけれども、それは結局温故知新という言葉でありまして、古きを知って新しきを知る、古きを尋ねて新しきを知るということが、これはいつの場合も真理である。宗教改革であるとか、文芸復興というようなことも、みんな最初の元に帰るといことが根本であるわけで、聖書に帰るといこととであるとか、法然上人の『選択集』に帰るといことが、これがその新しい時代に適應する。私は真理であると思うんでございます。ただ念仏を申す、口称の念仏を

いかに伝道したらよいか、いかに知らしめたらいいかということは、これは七百年昔から今日まで、諸先生、諸上人、あらゆる能家の方々が苦勞したところでございます。そしてそれぞれの道を見出し出して現実の社会を教化をして、精進をしてこられたのが宗門の歴史であり、力強い浄土宗のバックになっていると思うんでございます。

五十年前の遠忌のことを知ろうと思ひまして、『宗報』の昭和十年七月三十日号から昭和十二年七月三十日号までのことを拝見いたしました。昔も今もとても堅苦しいのでございますけれども、昔から家運は三代にして定まるといわれております。法然上人のお開きになった選択本願口称の念仏が今日まで、伝々相承されておりますのは、一つには勿論、法然上人の教えが法に添うたものであるからです。この法ということは、広くどのようなようにでも解釈できますが、この法にしたがって生活するということが仏教であり、宗教であり、また人間としての目的であります。そこへ目的を置いて、私たちは人生を送るべきであり、お釈迦様も、その法をお説きになった。法というものは新しくお考えになったのではなくて、法というものに添われて、それを具体的にいろいろな形で

説かれたものが、このお釈迦様の教えであり、法然上人の教えであり、祖師方の教えであるという考えでございます。もちろん法然上人の教えがそういう法に添うたものであるから、今日まで念仏の教えが理屈なしに伝えられて来ていると思うんでございます。

またもう一つには、源智上人もこの三代という言葉を少し広げて申しますれば当然お入りになられる方ですが、この三上人すなわち鎮西聖光上人、記主良忠上人、勢観房源智上人のおかげで、今日までこの教えが、念仏が伝えられていると思うんでございます。それからまた、私は昨日のようないろいろなお話を聞いていて、今後も恐らく、もし宗教が抑圧されても、その中で念仏門は必ずそういう圧迫に対して、これをはね返す力が十分に内にある。こういう感じをちょっと飛躍がございませうけれど、昨日はそう考えました。また教えがあっても、それを具体的に宣布する、知らせる、導く、その人々がなければならぬわけでございますし、またそれがかつてありました。また今日もあると私は思いますし、また今後もあるであろうと考えるわけでございます。

そして先ほど申しましたような、この一宗が力を合わ

せて、そして方の一つの現わし方として、儀式儀礼・法要が、一宗をもって行われることが必要であると考えて、儀礼の意義を申し述べたわけでございます。そういう意味から私は、三上人の遠忌を迎えるにあたって、二つの中心点があると申しました。一つは今申しましたように、『選択集』、それから『授手印』に通じますところの結帰一行三昧、すなわち口称の念仏、これはもう絶対な、動かすべからざるところのものであり、これによって自行化他の中心とすべきものであると思うんでございます。これは私が申すものではございません。それならば七百年前も、五十年前も、今も皆お分かりになっていることじやないかということでございますが、そのことについて、二祖上人は『授手印』に、それから『徹選択集』に、『謙知浄土論』に苦勞をしてそのことを述べられております。話が少し飛んでしましますが、時間がないので略させていただきます。

昭和十二年の三月六日に、五十年前に三上人の一宗法要が総本山の知恩院において勤修されております。この差定を拝見いたしますと、公式略式等の差定が、『宗報』にきちっと出ております。その特色を申し上げますと、

誦經の後に『披読授手印序』というのが必ず入っております。披読する、つまり読み上げるわけでございます。『授手印の序』はどういう意味をもつかと申しますと、これは伝法の五重の第二重の結帰一行三昧の口伝であります。その序の中に、こういうように書いてあります。

自行ヲ専ニスルノ時ハ口称ノ数遍ヲ以テ正行ト為シ、他ヲ勸化スルノ日ハ称名ノ多念ヲ以テ浄業ト教ユ。

自行を専らにする時には口称の数遍、化他をする時には称名の多念を以てしなさい。これはまったく同じように思われますが、そこに深い違いがあるわけです。五重相伝でも、伝法でも、五重は自行の自証門、その五重の自行のものを化他に用いる場合、これが宗脈の伝、そしてそれに対する化他の五ヶ条に口伝を添えてお渡しするのが聖書になるわけです。ですから聖書を受けなくても、実際問題としては五重の相伝の血縁五重は出来ませけれども、正式にいうと、宗脈伝々三國伝来の伝々の宗乗の血脈をいただくのは、これが化他であり、聖書の形になるわけでございます。内容は同じなわけでございます。そしてその先に、今書いてある『授手印の序』の先に、

且ツハ然師報恩ノ為、且ツハ念仏興隆ノ為

とあります。これは同じようなことをいっておられるのではないかと思えます。自行のためには口称の数遍をもつてするという、これが日課念仏になったものでございます。この口称のうち、他を教化する、化他の日には、称名の多念をもつて浄業と教える。すなわち、口称は口称でございますけれども、多念相続をもつて、これが浄土の教えであるということをお書きになる時に、弟子たちが二祖上人が『授手印』をお書きになる時に、弟子たちがこれこそ法然上人の正しい教えであると様々に主張したことを背景においておられます。

弟子ガ昔ノ聞ニ任セ、沙門ガ相伝ニ依テ、之ヲ録シ、留メテ向後ニ贈ル云云

と、この序にはございます。一宗法要の時に、あるいは各地方の寺院において行うこの三上人の遠忌法要の時には、差定としてこの『授手印の序』が読み上げられ、一宗の伝達をなすことは、最も妥当なことでございます。

二祖上人が、鎮西の地においてこれをお書きになったことは、今申し上げましたようなわけでございますが、これを三祖に授けられたのは六十六歳の時でございますね。すでに皆さん方には自明のことでありませうけれど

も、『授手印』の相伝血脈の書として伝授された意味は、二つあると読み取るわけでございます。一つは結帰一行三昧である。そのことが大事なことでありまして、これは絶対動かせないことでございます。この念仏をもって坐禅にかえるとか、あるいは法華の題目にかえるとか、そういうことは出来ない。それは何者をもつても変えることの出来ないものでございます。それをそこにお書きになったということは、鎮西上人が安貞二年に六十六歳の時に述べられたお言葉から感じ取られるわけでございます。そのことは、自分こそ師法然上人の教えを正しく受け継いだものだ、という自信のほどがそこにあふれ出ております。昨日の先生方のお述べになったお話には、そういう絶対なる自信がやはりおありになったように、私は感じたわけでございます。

法然上人が建久九年の六十六歳の時に選述されました『選択集』、その『選択集』の前後から、二祖は法然上人の教えを授けられたわけです。天台僧の聖光上人が、師の教えを正しく受け取られているわけでございますが、私は『選択集』の第十六章段の教えは、二十四文字の表題に結帰する、こういうことを毎日申すのでありますが、

二十四文字は表題であると同時に、それは序でございませぬ。『選択集』の序でございませぬし、また『選択集』の本論でございませぬし、『選択集』の結びであると、こう思うわけでございませぬ。この二十四文字に示されたところの教えと直結いたしますのが、『一枚起請文』でございませぬ。私ただ今、この『選択集』の表題二十四文字に示された教えが、法然上人の教えの序であり、本論であり、結びであると申しました。それは『選択本願念仏集』十六章段に述べられたものは、主として結論の方へ本願の念仏が出て来るわけでございませぬ。その前に選択というところがございませぬ。選択というのは選び取る。『大阿彌陀經』から法然上人は、この選択というところをお取りになった。

選択の中には三重の選択がある。廃立・助正・傍正。善導大師は廃立の立場を取り、恐らく法然上人も廃立の立場を取られたと思うわけでございませぬ。多くの御法語等は、単念仏、単身の念仏、単身口称・念仏ということでございますが、しかし決して戒がいらぬと申しただけではございませぬ。天台の学問が、『法華經』がいらぬと申したわけではございませぬ。往生のためには念

仏でよろしいということをおっしゃいました。それがはつきりと説明されたのが廃立の立場です。さらに口称の念仏へもっていかれるのに、助正の立場をお取りなつた。諸行でも往生出来るその意味を残されて、『選択集』以後の法然上人の御法語の中に、諸行でも往生出来るという点があります。しかしこれは、法然上人の末流の念仏者としては、これを表に立てて申すことではないわけでございます。

しかしこういう複雑な時代になりますと、ただ念仏申せ、念仏申せ、必ずしあわせになるというだけでは、人は納得はいかない。そこで助正の道も出ますし、傍正の道も出ます。法然上人のお言葉を横の立場で取つては誤解を生ずる。やはり縦の立場で法然上人の御法語というものを受け取らなければ、その年齢によりまして、場所によりまして、相当相入れないかと思う御法語も出てまいります。必ずその点は注意をしなければなりません。私は望月先生に『観經疏』を教わりましたけれども、その極楽浄土に往生出来るという教えを一年間かかってやりました。最後の時に、何でも質問をしてよろしいということでした。私は一番疑問に思っていたことは、西

方浄土があるかないかわからないのに、なぜ一生懸命念仏をするんですかという質問をいたしました。その後からわかったことでございますが、それより少し前に望月先生は、小石川の伝通院会館で、その指法立相の点で少し誤解を生ずるようなお話を申されました。西方浄土じゃなくて、実は十方の浄土である。浄土はもう、後も前にも、どこにも、上下諸地、虚空の中にあるんだと、阿弥陀仏はこの虚空の中にましますんだ、というお話をされました。これはやっぱり、十方の浄土という考え方でございましょうが、しかしその問題で、今から五十年以上前は喧しくて、指法立相の件で大変問題になった。その後だということが、後にわかったのですが、私はその時にこの宗門の宗学の大博士である望月先生から、大正大学に来た本当のおみやげに、一つ浄土のお話を聞かしてもらおうと思って、ご質問をしたわけです。先生は、しばらく頭をこうやっておられて、『大智度論』とか『十住毘婆沙論』とかによって、段々と浄土の存在について納得の行くようなお話がいただけるかと思っていたんでございませう。しかしお答えはただ一つでした。「うんうん、あるんじゃよ」こういわれ、「うんあるんじゃよ」とい

われて、後の質問が何にも出来なかったわけでございます。私は不満でございますが、引き下がりました。

しかしそうはいっても、私はやはり納得いかないから、現代の学問にもそういう問題があるのかないのかということをも、一つ調べてみたいと思いました。当時非常に盛んであった西田先生の『禅の研究』というものを読みまして、少し西田哲学を読んだわけでございます。それでもやっぱり納得いきませんが、『禅の研究』の最後の方には、知と愛、それは仏教でございませんけれども、そういう問題がある。やはり、ただ知ることだけでは、信仰というものはだめだということ。それは西山上人が、念仏というのは何かという要目の中に、念仏は知慧と慈悲である。念仏は慈悲だけではない、知慧だけでもない。その知慧と慈悲という、二つのものの合わさったものが念仏だ、という要目がございます。そういう歴史がございまして、私も今日までいろいろなこういうものを読んでまいりましたけれども、結局のところは、いくら勉強もし、年を重ねましても、最後は口称の念仏へ行ってしまうわけでございます。でありますから、五十年前のこういう宗門の指示も、今後出るであります。

三上人遠忌の中心も、一つは口称念仏にあるということ
は、昨日の先生方のお話からいっても誤りないことであ
らうと思うのでございます。

それからもう一つ、三上人の遠忌に際しまして、三上
人の追善の法要をいたすことが、すなわち法然上人に対
する報恩の行であるということが伝達にもございますし、
また『授手印』にもそのことが述べてあります。二つあ
るといったことの、もう一つがこのことなんでございま
す。先ほど自行と化他のところをお読みしました、その
先の所に、このようにあります。

且ツハ然師報恩ノ為、且ツハ念仏興隆ノ為、弟子ガ
昔ノ聞キシニ任セ、沙門ガ相伝ニ依テ之ヲ録シテ留
メテ向後ニ贈ル。

末代に贈るのは、念仏・口称念仏を伝えることが、す
なわち師法然に対する報恩の行であるということをは
つきりお書になっておるわけです。したがって、昭和六
十二年に迎えます三上人の遠忌法要も、三上人に供養申
し上げて、報恩の誠をいたすこと、それが法然上人に対
する報恩になることである、と受け止めているわけでご
ざいます。

また二祖上人の著述に、『授手印』の他に、『識知浄土
論』というものがございますし、『徹選択集』がござい
ます。これは別の念仏と通の念仏と徹通されるというこ
とで、念仏は口称の念仏であるけれども、これは一般の
仏教の教えと徹通したもので、決して口称だから軽い、
論理があるから難しいというようなことではない。『識
知浄土論』も今度初めて読んだわけですが、昔からどう
もあれは二祖の著作ではないといわれております。特に
『授手印』からあれを見ますとまったく種類が違ってい
るものでございます。二祖の著述の中で、『識知浄土論』
と『徹選択集』の下巻は、これは二祖がお書きになった
ものではなくて、後から加えたものではないかというん
です。しかし最後には口称の念仏に行く。私の考えでは、
法然上人のお弟子が皆天台宗のお坊さんで、その者に念
仏申うせ、申うせといっても、そこに一つの真実、方便
の力によって、『大智度論』の念仏を説き、『徹選択集』
の下巻に、浄仏国土、成就浄土の説をお説きになった、
ということであろうと思います。この点は今後の課題と
して研究させていただきたいと思えます。

三上人遠忌を迎える意味というものは、この儀礼とし

ての法要も、これは大いになさなければならぬと思いますが、さらに口称の念仏をいかにして広げたらよいか、その問題を解決されたのが二祖であり、三祖はそういう問題をさらに詳しく注釈し説明をして、あの五十余巻の著述を著わしました。法然上人には『選択集』の結論である『一枚起請文』がある。それと同じような主旨のものが、二祖上人にお手紙でお渡しになっている。このようなことなどを考え合わせると、二祖上人が恐らく、今日の念仏門の浄土宗というものの基礎を確立させた方であると申うんです。そういう念仏によって生活されたのが紫野門徒という源智上人であり、法然上人の教えをそのまま実践された方であろうと思うわけです。

今回の三上人の遠忌の中心に二つある。一つは口称念仏結帰一行三昧を宣布することであり、もう一つは報恩ということを法要に際して、特に強調する。現在の世の中で最も欠けているのは、おかげさまという恩の思想でございます。これはまた円頓戒と関係して来るわけでございますが、一宗侶として、何十年間か本を読ませていただきましたけれども、やはり同じ結論でございましたという懺悔の意味を込めまして、申し述べさせていた

いたわけです。失礼申し上げました。

司会 大変ありがとうございました。次に布教師会近畿支部代表、滋賀教区甲賀組誓光寺、奥山善文先生にお願いしたいと思えます。初め全部先生方に意見発表いただきまして、後に質疑応答をさせていただきます。よろしく願います。

奥山 同唱十念、南無阿弥陀仏……。

滋賀教区の奥山善文と申します。近畿ブロックで、滋賀教区に当たりまして、布教師会で検討しておりましたら、滋賀県の布教師会の事務局をさせてもらっていたり、滋賀教区の教化団の理事を務めさせていただいたり、浄青の近畿ブロックの方を担当させてもらっていたり、いろんなことが重なりまして、お前一遍やっとなこととで、させていただくことになりました。皆さんの参考になる話は、一切出来ないと思うんですが、日本中の小さなお寺には、こんなくだらんやつもおるんだというところで、私の話をお聞きいただきましたら、幸いだと思う次第であります。

私ごとで恐縮でございますが、私は昭和四十五年に、一般の大学、滋賀県立大に行っておりまして、どうもお

坊さんをしなければならぬということになりました、
律師養成講座に行きました。そこで坊さんの位を戴いた
というのが坊さんのスタートであります。昭和四十五年
から滋賀県の甲賀組の方の小さなお寺でございましたけ
れども、若干二十歳の時から任職を務めさせていただい
てまいりました。そんなことでございますので、養成講
座に行った当初、もちろん宗乗宗学というのはわかりま
せんし、逆に勤行式すら読めない中で、まず小さなお寺
の任職に坐ってしまった。お勤めというとして「勤行
式」ばかりをやっておりました。「四誓偈」を読んでお
りますと、いまだに間違うといったような、非常にふざ
けた坊主であるんですけれども、一応一寺の任職を勤め
させてもらうと思いましたが、いろんな意味におきまし
て、いろんな角度の中におきまして、やはり何かをせね
ばならないということが、おのずと出てまいります。檀
信徒の方が、「おっさんニレンゼン河という河はどこに
流れてんねー」と聞くわけです。「あれは確か愛知県と
岐阜県の間くらいと違うかなー」と、檀家の方にはそれ
くらいにいうとく。辞書を調べてみる。ニレンゼン河と
いう河はどこを流れてるのかと調べてみる。するとイン

ドと書いてあるわけです。これは一遍インドに行つてこ
ないといけないと思ひまして、よしインドへ行つて、ニ
レンゼン河という河を見て来たらうと思ひ、インドへ行
きました。そんなこともありまして、例えば、「おっさ
んお経というものは難しいな」と。よっしゃ、そんな
ことなら、いろんな本を買つて来て、解説したものを作
つてやるわ、ということで昭和四十五年からずっと『寺
便り』を作りまして、活動をしてまいりました。まだそ
の他に、最近ではテレビとか新聞とかで、いろいろ仏教の
話がたくさん出てまいります。そんな影響で、「おっさ
ん、『般若心経』の中で、掲諦掲諦というのは、どんな
意味か知ってるか」ということで、檀家の人が聞いて来
はるのですね。「掲諦掲諦とは、知らんなー」てなもん
です。そんなら一遍佛教大学へ行つてやろうと思ひまし
て、公務員やめまして、去年まで佛教大学におりました。
佛教大学では、はしくれの出来そこないの学生でしたん
ですけれども、大学七年生を経験いたしました。三年四
年五年六年七年と大学行きました、そのわりに何にも勉
強はしておりませんけれども、掲諦掲諦という意味さえ
わかつたらエー、というわけでした。そしたらちやうど

『般若心経』のパーリ語の訳をしていただきまして、授業は三人でしたけれども、その授業にも一生懸命出て、掲諦掲諦がどういう意味かということがわかりました。すぐ行動せんことには、何かいかんわけでございました、なかなかお坊さんというのは、非常に難しいもんだということを感じます。

私自身は、昭和四十五年から十五年も任職を勤めさせてもらった中に、いろんなことを経験させてもらったことを、ただただ感謝しております。その中で四十五年からであります、慶讃事業記念法要をいたしました、浄土開宗八百年記念法要、それから善導大師千三百年御遠忌、それに続く宗祖御生誕八百五十年、この三つが非常に大きな力であったように思います。その中で、私も坊さんになりたての当時に、開宗八百年法要がありました、滋賀県甲賀郡の方では、特に大層な法要にしました。各お寺が折り詰の弁当を出しまして、お稚子さんを出しまして、お練りをいたしました、また難しい、本山からもらいました宣疏とか表白を読んで、どうか慶讃事業をした、お勤めをしたということが、現状であります。特に開宗八百年法要は、私の見ておりますのは、滋賀教

区という小さな世界でありますけれども、滋賀教区という世界の中においては、非常に大層なものであったのが、慶讃法要の浄土宗八百年法要であると思います。それから善導大師のは、ちょっと薄れたような気がします。五重相伝にくっつけましたり、晋山式にくっつけましたりという形で行われたのが多い。それから次の、八百五十年におきましては、これも時期がひっついておりました関係から、私のところも五重相伝をいたしました、ほとんどのお寺で五重相伝にくっつけましたり、八百五十年だけ別の法要の形でされた寺院は、ほとんどなかったかと思っております。

三つの法要を通じまして、はたしてその三つの法要が成功であったか、不成功であったか、ということ今考えますと、私が住職というのか、お坊さんとして、一番感じましたことは、やはり滋賀教区におきまして、詠唱講が各お寺で結成されたことです。もちろんそれより以前からございましたけれども、八百五十年並びに千三百年並びに開宗開催という中においては、念仏講なり、五重講なり、詠唱講がきっちり形成されたこと、これは非常な成果であったと思います。それから一部のお寺で、

庫裏が新ヤになりましたり、本堂が新ヤになったり、会館が出来たり、いろんなりっぱなものが出来たと思います。そして教化という面からしますと、やはり詠唱講が出来たこと、五重講が出来たこと、また念仏講が出来たことは非常に良い結果になったろうという感じます。しかしはたして、根に付いた教化が出来たか否かということになりますと、これは非常に問題があるんじゃないかと思えます。

そんなことを前提に置きながらありますけれども、今度三上人の遠忌を迎えるにあたって、私なりに三上人のことを見たんですけれども、書いてある本が難しすぎまして、私の頭ではどうもわかりませんので、皆さんは知っていることと前提として、三上人のことをちょっとお話させていただきます。浄土宗のお坊さん百人に聞きました。三上人の名前をいってくださいといいますが、この間『憂宗の声』という新聞にも書いてありましたけれども、大概偉いお坊さんでも、三上人の名前をいってくださいといいますが、いえないそうです。私もその内の一人だと思います。鎮西上人と聖光上人とは同じ人だというのは、なかなかわかりにくい。三上人の名前を一

遍にさつということは難しいという気はします。こういう前提にたつて三上人というものを、今この御遠忌を迎えるにあたりまして、いかなる方向にもつていかなければならないのかということです。

鎮西上人と良忠上人におきましては、これは西に東にお歩き戴いた方でございますので、非常に動きのある方でいらっしゃるということは、誰もがわかる所であると思っております。ただ一つ、聖観房源智上人なんですけれども、私の頭の中では、聖観房源智上人はおとなしい方だと思っております。これも大会で発表されていたと思うんですけれども、私の住みます信楽町の浄願寺というお寺で、源智上人が阿弥陀仏の造立願文をつくり、数万人の名を連ねた「結縁交名帳」が仏さんの中に入っております。源智上人も勧進聖であったということが、宝田正道先生の本にも書いておりましたので、動きのあった人だということではよろこんでおるんです。

実は「結縁交名帳」の話なんですけれども、滋賀県の教化団長の谷さんという方が、信楽町の文化財関係の仕事をしておられますので、私もその人の弟子みたいなもので、その仏さんが世に出る前から昭和四十七、八年頃

から、あの仏像を何回となく写真取りに行った方なんです。それにそんなりっぱなものが入っていたということ、それが源智上人のことであったこと、また法然上人のことであったことは、私にとりまして、やっぱり坊さんしている中で、非常に参考にさせてもらったことの一つであると思っております。

そういうことからいたしますと、三上人といわれる方は、法然上人に比べまして、非常に動きのあった方で、あつらひということを私は感じます。その中において、動く組織というものからいきますと、現在のお坊さんというのは、私も含めました上でありますけれども、動きが非常に少なくなつたのではないか。このことは非常にかなしいことでもあります。坂村真民という仏教詩人が、なぜ今一遍上人が愛されるのかということを書いております。やはり私は、なぜ法然上人じゃなく、なぜ一遍上人なんだらうなということ、よく詩などを讀ましていただいで感じますことは、何か一遍上人にはサーとついでける世界があるのではないかいつも思います。そんなことからしまして、法然上人に比べまして、三上人には動きというものを、ある程度感じられるのではないかと私

は思います。

今の坊主は私を含めましてでありますけれども、車という文明の力がございまして、それに操られて、いつでもどうでも動ける状態でありながら、動かないというのが、現状であります。昔、インドへ行った上人は、天竺を跨いだ上人は尊い上人となられたそうでありますけれども、現在インドへ行くのは、十時間くらいで、飛行機でニューと行ける。この間、全国浄土宗青年会の大会が仙台でありまして、仙台に行くのに十二時間かかって行きましたけれども、インドより遠い所へ来たなといつて笑っていたんです。仙台まで十二時間で行けるのに、なかなか動きが非常に狭くなつたと、こう私は思います。しかし今ここにご列席のちよつとお年寄りのおっさん方の話、滋賀教区におきまして、教区庁なり、いろんな役員さんにお聞きしますと、やはり三十六年前のおっさんはち・ごう・たというんですね。紙しばいを持って県内をおまわりいただいたり、幻灯機を持ってまわられたり、また自転車で説教に行ったとか、いろんなことが、昔のおっさんにはあつたのに、今の青年僧侶にはなかなかさうしたことがない。私も浄土宗青年会の方でいろいろ動

めさせていただいていますけれども、うまくいかないというのが現状であると思います。そういうことから考えていきますと、今現在のお坊さんの全部というわけじゃありませんが、動きが少なくなったような気がしてなりません。

今三上人の御遠忌を迎えて、何をすればよいかということなんですけど、非常にざっくりばらんな話になって申しわけないんですけど、やはり根に付いた教化活動というものをやっつけていかなくちやいけない。折り詰弁当くばって、お稚子さん出して、お練りして、それもいいんです。それもいいんですけども、やはり単発的なことじゃなくて、何か継続性のある事業というものをしてゆかないといかんのじゃないか、そういう気持ちを持っております。

滋賀教区の青年会では、信行道場といまして、夏休みに中学生を寄せまして、研修道場を開きます。十五年間、滋賀県の十会場です。やりましたら、やはりある程度、根が付いたような気がするんです。それもいわば単発的の事業であります。夏休みの三日間を利用いたしました、そして一遍しかしないんです。単発的の事業である

のですけれども、単発的の事業も何年も何年も続いてまいりますと、単発的の事業ではなくなってくる。「おっさん今度、今年の修行どこであるねん」というて、檀信徒の中で、教化の一端が見られたとしたら、非常にすばらしいことになるんじゃないかと思えます。そういう意味から、今、三上人が非常に動きのある上人であったということを前提に考えますと、そうした青少年教化というものに、ままとを絞って来たらいいんじゃないかと思えます。

それと共に、全国浄土宗青年会では、「青年に念仏を」ということで、檀信徒青年会を結成することが、主なる主題でございます。この間の仙台での全国研修会でも、全国各地の代表の方が、いかにしたら檀信徒青年会がうまく出来るかということの研修、いろんな方が発表なされました。所変われば、いろんな角度で違ってまいりますけれども、一人一人の任職の心構えがあれば、簡単に出来ることだと思います。

今私たちの草加組の部におきまして、青少年信行道場、青年仏教教団を企てまして、いろんなことを活動しておりますが、何かやっつけていかなきゃいかん。例えば、滋賀教区では派遣布教ということをやろうじゃないかと、や

っております。というのは滋賀教区には五百の寺があり

ます。今まで一度も説教師を呼んだことない寺が、滋賀教区五百ヶ寺ある内、少なくとも百はあります。彼岸あつたら、説教師呼ぶのは当然じゃないか、十夜があれば説教師が来て話すのは当然ではないのか、というのが我々の観念であります。けれども、なかなか小さなお寺に行きますと、それが出来ないお寺もあります。また経済的なこともございましょうし、また集まってもらへん所もあります。ただで結構です、人を集めてもらったら布教にまいますということ、教化団とか、布教師会のメンバーが寄りまして、動く団体として、手当も何にもなく交通費だけで行こうじゃないかということ、滋賀教区内の先生方に、派遣布教ということで、ご協力いただいております。私の寺院だけがいいんだつたらでは、浄土宗は良くならないと思います。全部が良くなり、そして浄青もつながって、布教師会もつながって、教区もつながって、寺協連もつながって、という組織がつながって確立せんことには、皆がマスターションしあつては、何にもならないと思います。そういうことから申しますと、派遣布教とかの根に付いた活動をして行くこ

とが必要であります。

それから、私は文書伝道するのが、ある程度皆さんよりちょっとくらしいです。といえますのは、政治新聞、浄青新聞の方の仕事を長いことしておりますので、新聞作りはちょっとましなんです。そんな中で、お寺の方は、もともと教学というような勉強はしておりますので、内にもんは出来ませんので、新聞の組み合わせだけで勝負しているんです。たいした新聞じゃないですけど、浄土宗の青年会で、実は滋賀県全部の檀家、四万世帯に新聞を一年に一遍だけ配っております。このことは非常に価値のあることだと思います。新聞の良し悪しは別としまして、やはり全体的な活動をすることが大事であると思います。共産党という党派が非常に大きくなった。創価学会が大きくなった。霊友会が大きくなった。それは手から手へ新聞を配ったからです。手から手へというのは、本来浄土宗が使わなければならない手段なんです。他のいろんな団体が、手から手への手段によりまして、新聞を拡張して、非常に多くの信者を確保している。それは文書伝道のおかげによって、それが確保されてきたんだと思います。今文書伝道する

中において、手から手へとということ、もう一度考えなきゃならないと思います。

法然上人の教えは庶民性を訴えた宗教であります。今、日本中のテレビを見てもらったらわかるんでございますけれども、一コピーで勝負が出来る時代が来ております。「人間だったらよかったのになー」というコピー一枚で、一生めしが食えるというんです。そうした時代が来た。その一コピーを作られたのが法然上人だと、私は思っているんです。「ただ一向に念仏すべし」という一コピーで全国を風靡されたのは、法然上人だと。「人間だったらよかったのになー」で、アルバイト・ニュースはたくさん売ったんです。それから見たら法然上人は、「ただ一向に念仏すべし」「南無阿弥陀仏」ということを一番最初に説かれた、すばらしい人だと思えます。こうしたことをしなければいかんですけれども、手から手へ、人から人へという中において、新聞作りしたり、教化資料を作ったりする時、どうも難しいと思えます。

今、宝田先生がおいででしたら堪忍してほしいんですけど、昨夜、三上人の本『輝く法灯―ここに光を―』をもらいまして、話してもらったんですけど、私どもで

は仮名を打ってもらわないと、とつても読めへん字がたくさん出てくるんです。私と同等の坊さんはたくさんおられますので、どうも読めへんじゃないかなー。坊さんに教化する資料にいたしましたも、ちょっと難しいと思うんですから、檀信徒の方にする場合は非常に難しいと思います。

私はパズルを解くのが得意なんです。クロスワードというやつですね。後で新聞お配りしますが、法然上人というのはね、浄土宗を開かれた人と書いたら、大概の人はそこに「ほうねん」と仮名をうめてくれる。鎮西上人の場合はどうするかというんです。甲子園で取手二高に十八対六で負けたチーム、何々高校と書いた。「鎮西」と出てくるかもしれません。しかしね鎮西上人の名を出す難しさというのは、いざ教化活動という面から行きますと、鎮西上人しかり、良忠上人しかりであります。

クロスワード作る時に、カギを作るのは難しいです。念仏は、木魚を敲いて、と申しますと、よう書くんです。そんなら「念仏」と出てくるんです。お盆の法会の始まりです。この方はお母さんの御回向されました「目連尊者」と出てくるんです。しかし、良忠上人とか鎮西上人

とか源智上人というのは、鎮西上人は鎮西高校のおかげで、ひょっとしたら出て来るかもしれないけれども、後の二人はクロスワードのカギは難しいんです。皆さん作ってくださいという質問いたしますと、これは出来ません。檀家の方にそれを書かしていただいたら、それが一番の教化活動だと思えます。

我々のする事業、浄青も布教師会も教化団も教区も宗も知恩院も含めてでありますけれども、もっと根についた活動といえますか、檀信徒の方と交われる活動を、今三上人の御遠忌を迎えた中でやってもらえたらと思えます。私たちも非常に力のない坊主でありますけれども、自分とこの檀家さんは最底限、組は最底限、最底限教区だけは、何とか自分の力がちょっとでも及ぶ範囲で、三上人の御遠忌を迎えようと思えます。

最後に一つだけ聞いていただきますけれども、うちの母親が、年忌は一人ずつするものなのに、何で浄土宗は三上人の年忌を固めるんや、ちゅうことを聞きましたんで、そーいやー、年忌は一人ずつしなさいよと檀家には教化しているのに、宗がする時には三上人の遠忌を固めてする。年忌を固めてするというのは、希代な話だ

と思っております。一人一人の名前を、もうちょっと出す方法があったらよいのにといい気持ちをもっています。学問がありませんので、難しいことはいえませんがすけれど、片田舎の坊主といたしまして感じたこと、また私の今日までして来た仕事の中から、文書伝道というものの中から、何か参考にしていただきまして、またお前のいうたことは違うとるということがありましたら、お教えをいただきまして、今後ともご指導いただきまします。よろしくお願いいたします。終わらしてもらいます。ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。では次に、同じく布教師会東北支部代表で、山形教区の山形組専念寺、佐藤晋康先生にお願いいたします。

佐藤 同唱十念、南無阿弥陀仏……。

ただ今ご紹介いただきました山形教区の山形組専念寺の佐藤であります。今回教学布教大会で、一つのテーマにしがって意見を発表しろというような催促をいただきました。私のような田舎者が諸先生の前で私見を述べるといふようなことは、場違いな感じをいたしました。再三お断りしたのでありますが、命令で今回述べさせて

いただきました。テーマは三上人遠忌をどう迎えるか、
というのだと、こういうふうに与えられました。

さて、三上人ということで、お二人はすぐ名前が挙が
ったんでございますが、お一人がなかなか出て来ないも
のですから、大変当惑したところでございます。こうい
うような状態で、早速に各教区の教化団長さんに、ご高
見を拝聴いたしたいとお願い申し上げましたら、山形を
除いて、東北五県の教化団長様から、かわいそうだから
じゃ私の意見を教えてやろうと、お恵みの原稿を頂戴し
たわけでございます。山形のみは教区長さんから、ご意
見を頂戴しました。各教化団長さんに、あるいは教区長
さんに、私が設問いたしましたことに対するご高見をメ
モいたしましたして、皆様のお手元にお届け申し上げた次第
であります。大変そそくさに書いたものですから、読み
苦しいところは大変であろうかと思いますが、一つご判
読いただきましたして、ご指導お願いしたいと思えます。
私がこの三上人の遠忌をどう迎えるかということにつ
きまして、その根本はやはり法然上人様の口称念仏を実
際に生活の中に生かして行くことである。お檀家さんや
我々の中にお念仏の声が一つでも多く、そして一人でも

多くの口からお念仏がもれる。そして極楽往生の願いを
心の中に抱く同行者が多くなることが、一番肝心である。
そうするのが今回の三上人のご芳躰に報いる我々の勤め
ではなからうか。さらに法然上人様のおっしゃる、念仏
のする所それが法然様のご遺跡ならば、我々はまさに、
法然上人様のお城をお守りする大事な勤めを受けもって
いる一人であるという自覚がなければならぬ。これが
基本ではなからうかと、私は思うわけでございます。

ところがご承知の通り、鎮西上人と共に東に向かいま
して、金光上人様のご遺跡が東北にございます。不幸に
も私どもの山形教区への足跡は見つかりません。福島
の会津地方から宮城にぬけておりまして、どうい
うわけか大峠を越えて、山形へ入っていらっしや
らなかつた。そして宮城から岩手、岩手から国見峠
を越えての秋田入り、そして青森というようにご遺
跡がございます。金光上人の件につきまして、各
教化団長さんのご意見をお読みいただければわか
りますけれども、ぜひともこの席で、三上人を四上
人といふ変えて、あなたはいつてくださいますか、
それを取り上げられるか、取り上げられないかは別
けれども、それをいつていただきたいという強い願
いでご

ざいまして、ここに三上人、カッコして四上人としてあるわけでございます。

鎮西上人が善導大師のみ教えを鏡といたしまして、法然上人様の教えを正しく民衆にお伝えなさる。良忠上人がああ鎌倉の場にあつて、他宗の攻撃をもとめせず、お念仏弘通に身命をかけられた。源智上人がもっぱら近畿を、法然上人のみ教えを、遺徳を慕う心でお守りなされた。この三人の態度は、第一線に立つ教化者として、非常に大切なお手本ではなからうかと私は思っております。

我々の教化というものは人々と直接に触れ合っていないなきやならない。こういうような大量の物質文明の中で、それから寺院が、都会の寺院が、数多いお檀家さんをかかえている中で、一人一人を教化する。それにはこの三上人時代の、この態度が今望ましい態度でなからうか。私は家庭に入り込む教化というものは、布教者ならば、ぜひこれを実現していきたい。我々の教区では、数年前から我ら皆布教師ということで、一人一人に語りかけようと、教化事業に打ち込んでおるところでございます。しかしお檀家さんや、一般の方には難しい話は、やはり

耳をかさない。法語というものについて、多少の軽蔑の眼をもって見ている者すらあり、我々は彼らに接するのは、家庭の中であり、寺院の建物の中であるわけでございます。

寺院の建物の中で、行われるわかり易い教化というものは法要である。あるいはお勤め会である。あるいは写経会であり、詠唱会であり、趣味の会であります。これは私の寺でございますけれども、お勤め会、これは彼岸、各年中行事の中の、前の三日間は前行と称しまして、朝参りをずっと続けております。十四日の写経会も、これも私の檀家全部で百六十ほどございませぬけれども、十四日というウィークデーであろうがなんであろうが、十四日の善導さんのご命日には写経会をやりますが、固定して三十名前後まいます。多い時には五十名越えることもあります。これも一生懸命この写経会に入りまして、お念仏が終われば木魚を打つ。一回でも多く念仏を勤めること。こういうわかり易いことから入る。

教区においては、私が教区のお勤めをするようになってからは、二年半ほどになりますけれども、その中で非常に延びてきたのが詠唱でございます。これも非常にわ

かり易い。ご婦人方がお念仏の道に入るのに、お話を聞きながらお唱え申して、そして節を付けて歌える教え、これが非常にうけましてですね。現在では既に六十二寺院の支部が出来ておりまして、会員が九百名を越えております。この方々はいろんな行事をやるにつけ、すすんで参加してくれますので、教区の事業が非常にやり易くなっております。その他、文書伝道とか、テレホン法話とか、様々ございませうが、とにかく直接にわかり易くというこの態度で、布教をすすめていく。これが三上人の地方教化のお姿ではなかったかと、私はそう推察しておるわけでございます。

しかしこれらのことを勤めるにはですね、やはりいろんな資料が必要になってきます。三上人といわれて、わからない方が非常に多かった。やはり一宗の方に、教師向けの資料、あるいは檀信徒向けの資料を前もってどんどんと出していただく。これならば私たち寺院住職も、その資料をもとにして、自分の信仰生活の中の体験を生かしかねることが出来るのではないか。先日ある上人とお会いして、先生、今度こういうわけで意見発表というところになったんですが、五十年前に三上人の遠忌はあった

んでございますかと質問いたしました。「私もそれがはっきりしなかったので、先日知恩院さんに行って、だれそれさんに聞いたら、君それはやったよ」と、こういうわれた。大事なことでございます。やはり遠忌法要は、実施させていただく、これは我々の勤めでなかるうかと思えます。この御本山の御法要、あるいは教区、または各寺院は、これは必ずでございます。三上人のご遺徳を慕う、報恩感謝の心を持って勤め申す、ということは当然すぎる当然ではなかるうかと、思っております。

開宗八百年、あるいは千三百年の善導忌、あるいは八百五十年の降誕会、すべて皆さん勤めを果たされて、それをやりますと、お檀家さんはすばらしい法要に出会ったと、しばらくの間その法要の雰囲気浸って寺参りが多くなり、これは大変ありがたいことだと思えます。三番目の遠忌法要の実施というようなことを、ここにぜひしていただきたい、というようなことをあげましたのも、そういう意味からでございます。

しかしながら、寺のお檀家さんというのは、あるいは信者というの、わりとわがままでございまして、都合のいい時は来ますし、都合の悪い時は見向きもしない。

金のかかる時は見向きもしない。都合のいい時は相寄る。というようなことがございますが、本当にお寺様のために尽くすお檀家さん、法然上人様のお念仏がありがたいという、こういうお檀家さんをきちっと組織立てるといふことも、寺の経営上大変なことでなからうかと思えます。先ほども第六部会の中で、檀信徒の組織化というようなことで、どなたか発表しておられました。私も高見は本当にまったくその通りと、大賛成でございます。現実には婦人会、青年会、少年会、子供会というようなものを、各寺院が次々と作り上げていく。それが最初は点であってもよろしいと思う。その点を繋ぎ、そしてそれを数多くのグループとしまして、教区事業に広げて行かなければならないと思います。

山形教区では、十二月七日の仏教文化講演会を契機といたしまして、この組織作りに、全教区の方々の奮起を促す予定でございます。ちなみに、この仏教文化講演会は、浄土宗に関係のある仏教文化、これを皆様にわかり易くご披露いたします。そこに新しい檀信徒を引きつける一つの踏台にしたいということで、増上寺の稚楽会の方に話をいたしましたして、大賛成してくれました。「雅

楽会が東北で地方公演するのは初めてだ」と、手弁当を持ってやってくれる。寺内大吉さんにお願いました。

「あなたの予算のあるところでもいいよ」と。円楽さんも、「山形は貧乏だから少し減らしておくと冗談もいってくださいました。結局は同じ値段でありました。とにかくみんな、山形教区の方の気持ちと、檀家の方に向ける気持ちとを盛上げようと、すでにあらゆるパンフレットができております。今教区内に配っておりますが、残念なことには一回の講演しかできない。しかも会場が市民会館でございますが、千三百人しか入らない。皆さんからは納めていただくご報告は、会場整理費として千円というようなことで、どうかこうにかやりとげようと思うと赤字が出る。そこで昨日社会局長さんにお話申し上げまして、センター事業としたりどうかとお勧めがありました。センター事業にきりかえてやることになりました。とにかく檀家さんにわかりいい接触をしたいというのが、我々の布教の第一歩でございます。

我々が人を集めるとなると自分に相応しい人たちが集まって来ます。年寄りが集めれば、お年寄りが集まります。若い人が集めれば、若い人が集まって来ます。私の

ところは、私はもう初老になりました、集めますと若くして四十代くらい、やっと五、六十代が良く来てくれます。今在学中の伴に、とにかくお前が今必要な時に入った、うちの寺はお前が必要な時期に入った、一つ覚悟をして寺に戻れ、とこのように一生懸命催促しております。やはり指導者が若ければ若い人がついてくるのは当然でございます。考え方が同じ基盤に立っているだけに、感覚的にわかり易い。

しかしその指導者をどのように養成してゆくか、これは一宗でも、御本山でも、各教区でも、どこでも一生懸命やっつけてくださるんですが、そこに出不然ない人がいるんです。お務めしている方は、我々がいろいろ講習会、あるいは研修会、あるいはいろんな集いをしましても、集まらない。それならば、ウィークデーの夜、都合よければ一泊して、法式から布教から装束のつけ方から、宗教行事の習慣から、ありとあらゆるものを長年かかって教え込む。教区教師修煉道場という名前で行いました。そうしましたら山形教区には百十八ヶ寺でございます。青年僧は約八十名ですが、ぜひにと集まったのは三十一名です。毎月金曜日夜から翌日までやりますが、ほとん

ど二十数名の青年が集まっております。これには増上寺様の式師会が非常なご後援をしてくださっている。一月からは布教師会のご後援をいただけるというようにお話が出てきている。

その他、金光上人のご遺徳の顕彰と、ご遺跡の保持ということについて、一宗の方々に特にお願いしたいこと、その内容については別添の用紙に各教化団長さんのご意見が入っております。

それから七番目、磐城専称寺の復興の問題は、名越の東北の総本山としての専称寺が、松岡白雄上人が先規以来段々衰微になりまして、小野照道師、あるいは現在の山崎忠道師忠倫師が一生懸命になっておりますが、なかなか復興の緒につかない。これは当然東北の元の名越の各寺院の責任でもありますけれども、一宗に訴えたいのは、東北にも大本山をという、この声をお伝えするわけでございます。この点につきましては、東北山形には、かつて一向派、良忠上人の門下の一向派・番場の蓮華寺のこの末類寺院も三十数ヶ寺あります。その大半は山形にあり、しかしその運営については、山形のご寺院方の意向が反映されていないと聞いておりますが、やはり一

宗の問題であります。特別寺院あるいは本山寺院としての特別なご配慮をお願いしたいというのが、今日の私のすべてでございます。

以上大変時間をいただきまして、皆様にも申し上げましたけれども、これらはすべて東北六教区の教化団長、教区長様のご意向をもとに、私の私見を加えて、お話を申し上げたわけでございます。東北はこのような三上人の遠忌を迎えたいという意向でありますので、何とぞよろしくお願いいたします。どうもありがとうございます。

司会 ありがとうございます。東北六教区のご意見をまとめながら発表いただきました。次は同じく布教師会九州支部、福岡教区筑後第一組善福寺、花田玄道先生、お願いいたします。

花田 同唱十念、南無阿弥陀仏……。失礼いたします。九州代表と書いてありますが、私は九州代表ではございませんので、先ほど戸松先生もおっしゃったように、ただ二、三人の勧めによって、しかたなく出て来て、誠に責任のないようなことでございますので、そういうことで出て来ました。

先月の八月の三日に、総体本山の執事長会議がありま

して、一宗から三上人のいわゆるテーマについて、諮問があったわけですが、一応メインテーマを「輝く法灯」、サブテーマを「心に光を」というテーマを掲げて、一宗でポスターを作ってはどうかというようなことで、総体本山ではそういう答申をするということに一応なっております。

八月二十九日に総本山知恩院の布教師会の研修会の席上で、御門主の基調講演がございましたが、このメインテーマを取られたと思われる基調講演がございましたが、この講演をお聞きいたしますと、大きく三つに分けられる。これが三上人を迎える心構えであろうと、私は御門主の基調講演をお伺いしたわけです。第一番目には、三上人共に正法を伝受し、開顕された。だから我々は三上人遠忌には一層法灯が輝くように、それぞれの分野で勤めていただきたい。そういうことが大事である。そういう主旨のご講演であったかと思えます。伝語法語については、皆さんは知っておられるだろうか、知っている御法語であっても、もう一度読みなおしてみると、新しい味わいが出てくる。その新しい味わいを、感じたことを、布教伝道に生かしていただきたい。それが法灯を輝かす

ことになるということが、主旨のご講演であったかと思
います。

二番目は先きに、戸松先生からのお話にも出て来まし
たけれども、温故知新、古きを尋ねて新しきを知りな
さい。いわゆる知恩・報恩の精神をもって、というような
お話であったかと思えます。遠忌では、記念の出版物が
刊行されるけれども、その実践化に乏しい。だから実践
することによって、自信が深められて、自信と教人信が
一つでなければならぬ。そういうようなことをおし
やったと思います。私は、自ら顧みて、やはり念仏申す
のが足らんのかいと思いつながら、家に帰ったわけですけ
れども、誠にはずかしい思いがいたしました。

たまたま『決答授手印疑問鈔』の巻下を見ております
と、善導寺の供施をさせていただいている関係で、鎮西
上人の「善導寺聖人御房長時御勤次第の事」を読みまし
た。長時のお勤めは三十六歳の夏より、あの元祖様に会
われた年から、七十七歳の春、旧二月二十九日にお亡く
なりになるまで続けられた。

七十七の春に至るまで、一分も時尅も違えずに、六
時の礼讃と、六巻の阿弥陀経とをお勤め候。お念仏

は毎日六万返也、初夜の後、しばらくうち臥し給ひ。
子の半に至って、おどろいて中夜の行法を始められ
候。後には微音にて念仏し、後夜に継ぎ、又後夜よ
り夜の曙るまで、念仏の声懈怠なること少なくとも見
へず候。晨朝と日中と日没との礼讃は、御堂にて候
ひき。夜のうち大略六万遍はお勤め候様也。お念仏
の中には時々、助け給ひ阿弥陀仏と雑へ言仰せられ
候。如法勇猛に見えさせ給ひ候き。八旬の老体に寒
熱の時に至っても、少しも怠らず御座候也。昼は時
々聖教を披閲し、或いは談義の事候。談義の最中に
も日中の時来れば、一文一句をも誦みさして、やが
て阿弥陀経を始めて、礼讃と念仏とを御坐ます。同
聞の聴衆も心ならず各別に礼讃を行じ候。

このように鎮西上人について書かれてあります。

御門主の基調講演を聞くまでもなく、今回浄土宗のお
寺で、朝晩の勤行、木魚の聞こえない寺があるように、
私は見上げるわけですけれども、人のことじゃなくて、
自からは慚愧に耐えない次第であります。この念仏の行
というものは、やはり『往生の理解と表現』を讀まして
いただいたんですが、いろいろなご意見であるようです

が、やはり浄土教は、往生教であって、未来教である、往生浄土宗である、このように私は確信しております。だからどういふ場合であっても、十方浄土じゃなくして、西方浄土の信仰でなければいけない。そういう信仰をわが浄土宗はどう取り扱うか、どう説明し、社会浄化運動にどのように貢献すべきであるか、御門主の基調講演を聞きながら、そういうことを感じたわけでございます。

三番目の御門主の基調講演は、今の時代を考えなさいと、高齢化社会になりつつあり、青少年の問題が多い今日、それを念仏と信仰で解決しなさい、こういうことをおっしゃったと思うんです。いつの時代も現実を反省してみると、末法であり、五濁悪世の世の中であって、刀疾飢とおっしゃった。疾は疾病の疾、飢は飢えですから、刀というのは戦争のことであると思います。だから結局念仏をもって、平和に貢献しなさいという意味に私はお聞きしたんです。病いに苦しんでいる人を救いなさい。飢餓に苦しんでいるということであれば、これはアフリカなどの外国の飢えに泣いている人を救いなさい、ということであったかと思うんです。この刀疾飢については、考えてみるのが大切ですよ。我々の知らない世界が

どんどん出来ております。政治とか経済とか思想などに、大きな波が押し寄せている時代に批判をしていきなさい。このようなご講演であったかと思えます。私は御門主から三回くらい、身命私財をなげうってでも、法のためにということをお聞きしたんですが、なるほど私たちもこの御遠忌を何かそういうことに、もう一度考えなおさなければならぬと感じたわけでございます。

平和運動については、先日新聞を見ていましたら、お役人さんたちが、月に二回昼食を節約して、アフリカの難民を救おうとしているようである。いくつかの宗教団体では、一食を断食して、そのお金をアフリカの餓死寸前の子供に送っていると聞く。仏教界では残念ながら、あまりそんな話を聞かない。一人でも地球人で餓死する人がいる限り、我々は真の仏教者とはいえないのではなにか。お経だけは、私たちは朝晩読んでおりますね。法蔵菩薩のお言葉だと思っておりますが、「普く諸々の貧苦を救わずんば」とお経は読むけれども、実行が伴わない。後で私は御提案しようと思うんですけど、漢文で「我昔所造諸悪業」といっても、ぴんとこないんですね。「我れ昔より造る所」と読んだ方がありがたい。信者と

一緒に読める訓読のお経、読むことによって信心を開発させられるお経が必要なんです。三上人を記念して、一宗としては勤行のお経文とは別に、読むことによって信心を開発するような、和文のお経を作ってもらえたらと思うんです。平和運動から妙なところに行きましたが、ある役所では、お昼休みの一食を節約して、これをアフリカの難民に送っているという事です。戒律の中に非時食戒というのがありますが、三上人の御遠忌を迎えるなら、一遍くらい昼飯をぬいて、そのお金でアフリカあたりの難民救済事業を一宗としてやったらどうか。私はそういうことも考えていただと思います。

奈良にある天理教の本部に行ってみると、やはり生きている。信者も生きている。説法も生きている。それからこの間、生長の家の講演会があったので、行ったんですけど、やっぱり信者が生きている。話す教師が、アワを吹いて、テーブルを叩いて話をしている。しかもそれが、まったく合理的な話をしていらっしやる。やはり浄土宗団としても、何か考えなきゃならないかと思えます。創価学会の平和運動一つ見ましても、国連が支持しております。活動も極めて活発で、ますます多角的国際的に、

創価学会は平和運動を転開しておる。この間もジュネーブの国連難民高等弁務館事務所に一億円あまりを寄付して、アフリカの難民を救って下さいということで、献金しております。また世界各地で平和運動の一環として、核の脅威展を創価学会がやるということが、新聞にのっています。

一宗としても、教化をやるのも大事だけれども、国際的になっていく時代だから、三上人を記念して一食ぬいて断食供養を申しましょとか、アフリカの難民か、バングラディッシュあたりを救うたら、どうやるかと提案いたします。今日葬式屋のいいなりになっているお寺もあるようですけれども、指導性を失ってはならん。そうでなくてさえも、寺に対する批判も、非常に厳しいですね。りっぱに務めを果たしていらっしやる方もあるが、それは私としては当たり前のことだと思ふ。宗教家として当たり前のことだと思ふ。教団内で争ったり、あるいは脱税したり、宗教者の醜いことを聞くにつけても、民衆はあきあきしている。このあたりで大手術をやって、一宗としてどうやっていくか、ということを考えてもらいたいと思ふのです。

今朝から、あちらこちらでお話をお聞きいたしました
が、大変熱心に布教していらっしやる方の話を聞きなが
ら、やはり一宗にコンサルタントを置く必要があると思
います。小寺院とか廃寺院に近い寺院があるわけですけ
れども、この際なんとか整理統合してゆかねばならない
どなたかが、アパートの一室を借りて布教伝道してい
らっしやるお話をしていたんですが、新興宗教はみんなや
っています。団地で、みんなやっています。今日、一〇一
号室は皆な新興宗教の布教の場所になっていると、こう
おっしゃっておりましたが、私もそういうものを知って
おります。団地は新興宗教が必ず入り込んでいます。とい
うことになれば、団地布教をやらなきゃいかんというこ
とです。私はこの際、一宗にコンサルタントを置いて、
寺門の経営とか、あるいは教化の面については、その人
のご指導を受ける。各教区の小さい寺院とか、あるいは
廃寺に近い住職のいない寺はたくさんある。そういう寺
は、やはり一宗は寺号がなくなることにはこだわらずに、
整理統合する必要がある。私の提案は、各センターごと
に整理統合して、計算をしたんですが、一個一百万を出
すと、全国から一個一百万平均、特別会計をすると、五

億円のお金が集まる。だからその五億円のお金で、今年
は磐城の専称寺を復活するんだとか、あるいはドーナツ
現象を起こしている団地の一室を買い上げて、そこで布
教するんだとか、そういうことを三上人の記念にやらん
といけない。ぬるま湯につかって、あがりきれないよう
になってしまっているというのは、欠点であると思っ
ます。

私の本音は、本当は幽霊寺院の復活ということですが、
復活が出来ないならば、一宗から特別会計を取り上げて、
各センターを中心に、内地開教の必要な所がたくさんあ
るわけですね。この間、鹿児島に行きましたら、鹿児島
に〇〇公園というのが一件しかない。だからもう、そこ
に頼みに来た人を断っているんです。忙しいから断って
いるんです。そうすると、真宗では、手を払って待つて
いる。ああいうところに、アパートの一室でも買って、
一宗で一年に五億円集めて、二年目にまた五億円、それ
を今年に磐城の専称寺に持つて行く。あるいは今年ほど
こに持つて行くとか、あるいは団地の一室を買い上げる
とか、そういうことを三上人の記念事業としてやってい
ただきたいと思えます。

法要儀式をやることも大事なこともあるけれども、

私は常日頃、経文の訓読というようなことは、ぜひやっていただきたいと思うのです。儀式用とは別に、信心開発に信心増進に、読むだけでそういう気持ちになるような、和文のお経を一つ作ってもらえんかということ。痛切に感じたことは、昨年鎌倉の光明寺の石井御法主のお葬式に参列しまして、門前がバス停になっている。モーニングを着た人や、いわゆる知識人といわれる人が、バス停に待っていたんです。モーニングを着た知識人がですね、どういうたのかというと、今日はもうわけのわからないお経を長々と読んでいたが、誠にくだらんと思つたと、いつやめるかと思つた。だからたいていでやめてくれーと思つた。このようなことをバスを待ちながらいつていた。これには私はショックを受けたですね。やうける方は一生懸命に一時間半、二時間かかったでしょうけれども、会葬者というものは、お義理で会葬している人が多い。そういう人に、長々とくだらないお経を読んどくと、こういう発言をされたのです。だから私はぜひ和文のお経を作つて、信者と一緒に読む。新興宗教は皆そうやってるんですね。だからそういうことを強く提案

したわけですよ。

結論を申し上げたいと思いますが、正直に、いつわりのない私の気持ちですが、今日に現に情性、形式の教化団体と認められている。若い者からは、寺は抹香臭い、法要、葬儀、法事、逮夜参りなどにあけられている。これはこれとして意味がありましようけれども、今日の国際社会の、現代の人々に、しっくりついていないと私は考えるわけですよ。七千の寺院、一万の宗侶は、仏祖の余光の恵みによって、方丈にたてこもり、いわゆる不労所得で二万、三万の布施をいただく、美色飽食になれ、葬儀法事の司祭者の名にかくれ、わずかに存在しているというものは、いいすぎであるうか。ついでですが、佛大、大正大学の卒業生が、寺を預かるのは、まず宗教学法にのっとった寺院を預かるわけですから、宗教学法を教えてもらわなきゃいかんわけですよ。卒業したやつはまったくわからんですね。だから宗門の教育機関を卒業し、寺院に帰り、宗教学法の寺院をどう運営して行くのか、宗教学法の内容、そなえつけ帳簿の記帳、整理等の処理のわからん卒業生が多いが、宗門ではこのへんをどうご指導して卒業させてくださっているのか。こういうこ

とも考えていただきたい。

最後に、これは八月二十七日の『中外日報』の社説にのっておる。なるほどこうじゃと思いましたが、大事などころだけ、読んでおきたいと思うのです。駒沢大学宗教文化研究会が、昭和五十一年から七年をかけて、同宗檀信徒の意識調査を全国八ヶ所で行った。この調査は調査委員が、檀信徒に、一人一人に面授して、解答を引き出した大規模のものである。データの報ずるところは、単に曹洞宗に限らず、仏教各宗団に通ずるものが多いから、日本の宗教意識を理解する上にも、手掛りとなる貴重な報告である。そういうことで、その先を読ましていただきます。

調査報告書の分析によりますと、檀信徒にとっては、祖先崇拜が最も重要な信仰で、住職は葬祭、法事の主宰者として認められているが、曹洞宗の基本的教義の坐禅はほとんど滲透していないのである。健康に恵まれ、出来るだけゆとりのある生活を願ひ、日夜仕事に励んでいる人たち、こういう日常的思考方法で、生活を営んでいる人たちにとって、宗意安心などは、まず望むべくもないのだと。調査員は天を仰ぎ、調査員はまた応答者の婦

人から、次のように訴えられる。お寺や神社は、社会的に認められている宗教で、表の宗教です。表の宗教は葬式や儀式はしてくれるが、人の苦悩を解決してくれない。救がない宗教です。裏の宗教は、社会的には認められなくても、苦しんでいる人を救ってくれる人だすけの宗教です。このようなことばかりじゃなければども、こういうのに耳を傾ける必要があると思うんですね。このことは檀信徒は、菩提寺に所属はしていても、帰属はしていないところの儀礼的な関係にあるにすぎない現状を告げている。寺檀関係や葬祭儀礼中心であるのは嘆かわしいが、仏教各宗に通ずる事実である。僧職者は、葬祭主宰者を非難するのはあたらぬ。この調査でも、これからのお寺は何をすれば良いと思うか、の問いに、葬式法事を熱心にしてほしい、との解答が、坐禅会などの開催希望を上まっている。葬式法事も熱心にやっていないことに対する、寺院への無言の非難の意味も含まれているのではないだろうか、調査員の言葉です。葬祭すらもまともに執行しない僧職者は救いようもない。いろんな提言が入っているので、その提言の中に、檀家制度の組みなおし、それから禅僧、これは私たちでしょうか。

私たちの仏教的自覚度を厳しく問いつめる。いずれも真剣な、積極的な、建設的な心情あふれる提言である。宗侶の聖職意識の高揚が先決とし、宗侶各自の愛宗護法の道念に問い正されているものと受け止めたい、と結んでいる。

患者に一番必要なのは、直りたいとの意欲である。教団なら教化能力を回復したいの一念をなくしたら、自滅の他はない。不幸にして仏教教団は、自身の健康を取り戻そうとの意欲がなさすぎる。教化意欲は財欲にとつてかわられている。葬儀儀式は行つても、そこに幫助の給付がないのが、表の宗教であらう。布教不在の寺院伽藍は舞台のセットにすぎない。祖師がこの世に生まれなば、どのように布教伝道されるであらうことかの一点に思いをいたせば、幫助の方法は、自から開発されるであらう。教義を越えるのは、教義に背くことではない。教義に縛られることこそ、教義に囚われて、教義の命を殺すことではない。真に目覚るならば、教義を自由に生かす能力が想造されよう。幾多の問題に仏教各教団が謙虚にそれぞれ反省してもらいたい。そういう意味が、八月二十七日の『中外日報』の社説に載つておりましたが、私は二

遍も三遍もこれを読んで、これは誠に自ら願ひて、多いに反省しなければならぬ、と思つたんです。

九州全教区に三十三組あります。先々月、各組六教区の各組長の分団長に集まつていただき、三上人の遠忌をどう迎えたらいいか、ご協議をいただきました。その点をふまえた上で、私の提案事項は、経文を和文に、わかり易く、信者と一緒に読めるものを作つてもらいたい。また平和運動の一環として、昼食を一度でもへらして、その金をアフリカの難民に浄土宗団の名前で送つたらどうであらうか。さらに内地開教にもっと力を入れる。個人の方ではいかんので、一宗の特別会計によつても内地開教をして、教区センターごとにも、輪番制による寺院を建て、そこを根拠にして、地域、地域に布教伝道をやつてゆく。こういうことによつて何らかの形で、一宗がよみがえつてゆくのではないのか、というのを考えたわけです。誠にあれこれ申し上げ、まとまりのない意見でございましたが、大変失礼いたしました。

司会 貴重なご意見をいただきましたありがとうございます。いよいよ最後の先生であります。よろしくお願ひいたします。布教師会東海支部の代表、尾張教区の

城南組清澄院、兼岩春浩先生にお願いいたします。

兼岩 同唱十念、南無阿弥陀仏……。

今、ご紹介いただきました兼岩でございます。まず最初に私がお断りしなければならぬことは、今までお話しなされました四人の方は、それぞれを教区なり、または地域なりで、役をお受けになり、またそれだけのものを持たれて、この場でお話なさったと思います。私は実は住職ではございません。浄土宗の寺にも、こういう末端の寺もあるということ、逆にお聞き願いたいと思えます。私は僧侶になりまして十五年であります。尾張の片田舎にございます尼僧寺院の養子でございます。ですから檀家はございません。信者が若干あるだけでございます。正直申しまして、寺では年収百万あるかなしかでございます。一〇〇%寺だけでは食えない所でございます。その人間がなぜこんな場に出て来て、こういう遠忌を迎えてということをお話するかといえますと、師匠にいわれまして、実は中身もわからないままに、今日この席に来てしまったわけです。

私の寺には檀家もございません。信者しかいないんですけれども、尾張ではほとんど行われていなかった五重

相伝を、尾張浄青の連中で、おもいきって檀家なしでやってみたんです。もちろん檀家がございませんから、番号などを与える方はどなたもおみえになりません。そんな中で、一体どれだけ浄土宗の五重相伝が、五重という意味が、信者でもよわからわかってくれるか、ということとでやってみたんです。ところが信者も若干しかない寺院でしたけれども、約百人の方がおみえになり、しかもほとんど欠席もなかったということです。

先ほど申しました五重相伝は、実は善導忌と重ねてやったのです。善導忌といっても、まわりの方に説明するだけで何年とかかります。ましてや五重という意味を本来的に伝えようと思うと、それだけで日数がかかって行くと思うんです。しかしどんな末端の寺院でも、やっていかなければ念仏信者となりえないし、また僧侶になった価値もないという意識で、実は動いて来たんです。この場で正直申しまして、今いいことは、食えん寺が必死になって、生きて行くためには、どうするかという苦しさを、宗が感じていただくかなければならない。今日こういう場に出て来るのに、尾張におりますけれども、三河の庵主さんですと、交通費すらありません。生活保

護を受けなければいけないんです。吉水会の役員を私どもの住職がやっていた時に、いろんな方がおみえになりました。それで一番感じたのは何か。京都へ行く。それから東京へ行く。本山にお参りさせてもらう。その交通費すらこと欠くのです。そういう人たちに、はたして三上人遠忌のようなことをいっても、どれだけ説得力があるんでしょうか。

今までの方は、それぞれ、その地域、また教区なりの代表でありましたので、それぞれの行事内容を十分に知った上でのごさいました。私はまったく知識もございませんし、内容もよく知らないまま、話をさせていただきます。ですから三上人の御遠忌を迎えてという題材から離れてしまう懸念があります。しかしその中でも私なりに、話をさせていただきますと、基本的的に二つに分かれる。まず三上人の御遠忌を迎えるにあたって、どう考えていかなければならないか。これには、宗として考えること、それから浄土宗の教師として考えること、この二つに基本的に分かれるのではないかと思います。

今は書店に行きますと、仏書ブームがございまして、特に名古屋の書店に行きますと、必ず入口に近い所に、

仏書がずらりと並んでおります。しかもその仏書を買う人は、大体三十代から五十代だそうです。しかも男性が主であるそうです。知っている本屋さんに行って聞いたところが、入口近くに置いてある理由は、非常に多くの人を買われるからであるということです。しかし三十代から五十代以外の年輩者、または婦人の方は買われないうことです。何でこういう現状が起こって来ているかというのですが、これは私の勝手な想像ですが、現在の生活問題から、これらの年代の人は、宗教というものを真剣に考え、また悩んで求めているものじゃないと思います。三十代から五十代と申しますと、戦後の教育の中で、宗教というものはすべて取りさられた時代だと思えます。生まれてからずっと、宗教的情操がほとんど養われることなく育って来た人たちだと思うわけです。仏教と縁遠かった人たちが、高度経済成長あり、またオイルショックがあり、がむしゃらに働き、またそれが美德とされた。しかし一旦行きづまって来た自分に、どういふ答えを求めらるかです。どういふ答えを求めらるかということは、本来寺院が行うべきものであったはずで

三十代から五十代の人は宗教的情操をうけていないこ

とによって、寺に足を運ぶことすら重いわけです。まさかと思われるでしょうけど、私が在家時代に、寺へ行くというのは大変なことでした。寺に行くということは、よほど特別な所に行く気分でした。それがどういう加減か、自からの希望で養子になっちゃったわけです。高校時代、知恩院の大殿で横になっておりまして、門衛の人にどなられたんです。その頃の私の趣味は何かというと、京都で寺をぶらぶら見て歩くことだったのです。疲れたもんで、知恩院の大殿の横の所にごろっと転がっておりましたら、いきなり怒鳴りつけられたのです。「何じゃバカヤロー、寺のくせしやがって」というのが、私の感想でございます。坊主のくせして、疲れた人間が横になっているのを追い出すとは、何ごとだというのが、私が坊主になった逆の動機なのです。それでいきますと、今の寺は全部失格ですね。なぜか。昼間、ずーと本堂開いている寺、どんだけあると思います。お参りにみえて、人が坐わろうとする時に、身なり風体さえよければまだしも、風体が悪い人に対して、本当に開放していただけるとはどんだけあるか。それと同じことです。三十代五十代の方は、いざ寺に行って、住職にどうやって話を

してよいかわからない。まず足が遠いと思うんですね。こういう人たちを実は今、我々浄土宗は、引き入れるべきではないか。

浄土宗教師は、教師と名のつく以上は、それこそ個人個人を信者にすべきではないか。先ほどから檀信徒という言葉がよく出ておりますが、檀家というのは、個人以上にかの繋がり強いわけだと思っております。大事なのは、個人じゃないかと思うわけですね。良忠上人が一二五七年、在野の問いに答えて著述されました『決答疑問鈔』というのがございますね。この時代に実質的に今生きていく上に、種々雑多な疑問が問いかけられた。それに対する答えを出されたのが『決答疑問鈔』でございます。私は個人では困難なこのような在野の質問に対する答えを、何らかの形で、宗としてお出しただけなかなと思えます。

もう一つは、現在我々浄土宗教師すら、なかなか理解しにくい『末代念仏授手印』の現代語訳などを、どんどんお出しただけなかなかならない。一番肝心なことは、教師がわかる解説書があるんじゃないかと思えます。三上人の御遠忌を迎えて、という以上は、まず三上人の著

述の中で、これはというものを先ず檀信徒向けに、全浄土宗教師に向けてお出し願いたい。それからまず出発するんです。

なぜそれから出発するかというと、三上人と申しますと、浄土宗第二祖第三祖です。浄土宗教師なら誰でも知らなきゃいけない人物でないかと思う。しかし現実問題として、浄土宗教師で、この三上人をばつと答えられる人は、百人の中、せいぜい半分じゃないかと思うんです。それを考えますと、まず教師向け書物をお出しただかなきゃならない。それが基本となって、それ以後に、今度は檀信徒向けの書物です。ただし今は本が氾濫しておりまして、選択が難しいんですね。宗として挙げていただければ、私のような者でも、当然それを用い、それが信徒に対する布教へと繋がると思うんです。

もう一つお願いしたい点がございます。良忠上人が出された『決答疑問鈔』のように、皆さんが現在お持ちのいろんな問題を体系的に解説していただく、また答えていただくものがほしいんです。抽象論的に書いていただと、具体的にどのように話したらよいか、非常にわかりにくい点があると思うんです。個々の僧侶、教師方

がお話する分には、非常にりっぱなことが多いんですが、人によって違ってしまいう危険性があると思うんです。基本的な事項というものは、個人の宗教として広めようとすれば、こういう疑問的なものに答えていただきたいと思えます。

また問題点として、基本的には現在、浄土宗の寺院は世襲化しているわけですね。世襲化しているということは、何かということですよ。今浄土宗青年会が、各地域で活動されていますし、また活発に行われております。私も尾張の浄青の会員として、また役をさしていただく人間としてやってみるわけです。ところがこの中で一つだけ、在家であったから、こう思う疑問でしようね、相対的に安定思考じゃないかということです。安定思考というのは、今私が東海中学校・高校と務めさせている時に、生徒から受けた印象と同じ印象を持つわけです。それは何か。この学校にいました時に感じたことは、生徒が親の商売を継ぐということに、何の抵抗も感じないので、以外とすんなりとするんです。それは一から出発して、苦労するということ意識がちょっと乏しいんですね。現在お寺の跡を継がれている方々も、私が大学生時代同級生に

聞いた話ですけど、みんなお寺を継ぐのに、いやでいやで仕方がなかったとっております。ところが、二十歳くらい、もう少し若い人に聞いてみると、以外にすんなりと、そんなことないといえます。これは安定思考だと思っんです。零から出発して、何かをしようと他の業種に入る苦しさというものを避けちゃっんです。

こういう状況の中では、一体、僧侶とは何か、どうすればよいか、浄土教は何んなんだと、いうような疑問はぶつかりませんわね。ただ親のやったことを踏襲する形式論的になってしまっんではないか。人間として、浄土宗の僧侶となったという重大な意味は何か。僧侶というものをは人を指導するんでしょね。私が何度か僧侶をやめようと思ったのは、実はそこなんです。途中で在家で僧侶になってやめようかと思ったのは、指導出来んのです。どうやったらいいかわかんのです。なぜか。ただか私のような人間が、人に向かってこんなことがいえるなーと。いってしまった後、ようよういやになって来たんです、自分が。こんないやになるなら、浄土宗の僧侶をやめちゃった方が楽だと。ところがまだやってるんです。それは何か。まだ私よりひどいのがいるんじゃ

ないか。こう思うと安心だったんです。浄青の活動の中でも、積極的に一生懸命やる人間と相反して、まったく意識を持たない人間がおり、どちらかというのと相対的に冒険はさけて、安定の方へ行こうとする場合が多いのです。

先ほど、一ヶ寺一万円出せのこうのと、私はもった大さきことを申します。各教化センターがあるのなら、教化センターの会館を浄土宗がなぜ建てないのです。一ヶ寺、先ほど一万といいました。冗談ではないですよ。檀家ある所なら十万二十万出したって、食うには困らないでしょう。そのくらいの意識を持たなければ、やっぱり根の生えた布教はしにくいと思っんです。大都市には、それ相應の器も造り、その器を利用するということは、どんどんやっていかないことには、いけないんじやないですか。当然億の金があると思っんです。一人ではできないでしょう。しかし宗として、もしくは教化センターとして、教区単位で思い切れば、できないことはない。またそれくらいのことをやらなきゃ今の世の中で、浄土宗の僧侶として、もしくは浄土宗自体が、世の中にアピールしていくものはないんじやないか。

お互いに師匠である親が、自分の息子かわいさに跡を継いでもらうだけで感謝しとったんでは、発展はしないだろうと、こんなちょっとしたことを申しました。いずれ私の息子も寺のあとを継ぐかもしれません。ただし私は自分でやれという気はございません。なぜか。私と同じ目を二度と味わいたくない気持ちからです。自分と同じ目を味わいたくないということは、本当に自分が僧侶になったのは良かったのかどうかを、常に迷いながら必死になってなきやならない状態の方が、大変だからという気が私に起こっている。皆さんもちろん、息子さんに跡を継がせるということは、その苦しみを味わって、その中から本物が出て来るとお感じになっている。しかし現実には、安定思考が強い。思い切ったことも、失敗するかもしれませんけど、しかし基本的な線さえおさえていただければ、失敗というものはないと私は感じます。私は実は、まったく何も知らずに、師匠から行ってこい、はいわかりました、というだけで出て来たものからです、その中味の細かいお話するだけの技量を持ち合わせていないのです。ですから、そういう関係で急拠原稿とは違う勝手なお話をさせてもらいました。しかし、私

がこれ以後も、浄土宗僧侶として、今は庵主寺ですけれども、いつかは住職として、なんとか信者なり、檀家なりを作って、寺として成り立って行きたいと思っております。

司会 熱意のこもったご意見を頂戴いたしました。これで五人の先生方全部に意見を頂戴いたしました。

彙報

▼昭和五十九年度浄土宗教学布教大会は昭和五十九年度浄土宗布教師中央研修会と第三十回浄土宗教学大会との合同大会として、昭和五十九年九月三日(月)から五日(水)までの三日間にわたり、京都の佛教大学を会場として開催された。主催は浄土宗布教師会および浄土宗教学院である。

◎大会日程
九月三日(月)
開会式
大会委員会(布教師会) 十一時
特別講演 十二時
九月四日(火)
一般研究発表 九時
大会委員会(合同) 十二時
シンポジウム 十三時
合同総会 十五時半
懇親会 十七時
九月五日(水)
一般研究発表 九時
意見発表 十三時
閉会式 十六時
◎特別講演

京都堀川病院長・早川一光氏による「人間の生き死にかかわって」(『宗報』昭和五十九年十一月号に収録)と、大正大学教授・阿川文正氏による「聖光上人と『末代念仏授手印』」(『仏教論叢』二九号に収録)との二つの特別講演が行われた。

◎一般研究発表
一般研究発表は六部会にわかれて教学と布教に関する日頃の研究成果が熱心に発表された。布教師会関係者の発表は第六部会において左記のとおり行われた。司会は広井皖佑、宮林昭彦、岡崎寛豊の各氏が担当した。発表時間は十五分、質問時間は五分である。

法然上への宿業観への一考察 西岡 信孝
教化面より見た現代の時と機 梅庭 昭寛
女子少年の教誡にたずさわって 岡崎 寛豊
一念するために 山本 雄毅
——一つのアプローチ——

老人ホームに対する布教 佐伯 英学
——老人に対する布教の一考察——
授戒の本質 宮林 昭彦

百万遍知恩寺阿弥陀経碑の布教上の活用について 安藤 雅寛
助業を大切に 村中 成信
浄土宗ボーイスカウト団の展開 東海林 良雲
檀信徒壮年対象の組織的な教化について 西山 信光
布教の近代化への一考察 森 博純
大日比三師の廻向について 綿野 孝定
既成概念の打破と覚醒 広井 皖佑
◎シンポジウム
本年度は「高齢化社会における生き方」をテーマとして、佛教大学助教授、三枝樹隆善氏の司会によりすすめられた。問題提起者は左記のとおりである。

宗学・仏教学の立場 深貝 慈孝
佛教学の立場 芝崎 真悟
社会福祉学の立場 深貝 慈孝
佛教学の立場 深貝 慈孝
医学の立場 芝崎 真悟
大阪府立大学教授 奈倉 道隆
布教・教化の立場 熊本 教区無量寺 三宅 春光
シンポジウムの内容は、『宗報』昭和五十九年十一月号に収録。

◎意見発表

昭和六十二年に三上人の遠忌を迎えるにあたり、「三上人遠忌をどうむかえるか」のテーマのもと、左記の方々意見発表が行われた。

教学院代表

戸松 啓 真

布教師会近畿支部代表

奥山 善 文

〃 東北支部代表

佐藤 晋 康

〃 九州支部代表

花田 玄 道

〃 東海支部代表

兼岩 春 浩

意見発表の内容は本誌に収録した。

▼浄土宗布教研究所の第九回集中研究会は、昭和六十年二月五日(火)から七日(木)までの三日間にわたり、大本山増上寺において開催された。

◎参加者

板垣隆寛、広井皖佑、宮林昭彦、岡崎覚豊、羽田恵三、小沢憲珠、大室照道、東海林良雲、大門俊正、村中成信、西岡信孝、西山信光、山本雄毅、金子貫司、谷地玄雅、綿野孝定、遠田弘賢、加藤俊哉、佐藤雅彦の十九名。

◎研究発表は「阿弥陀経に聞く」をテーマとして二年目を修了する下記の研究所員が発表した。西岡信孝、西山信光、山本雄毅、金子貫司、谷地玄雅、綿野孝定



の各氏である。

◎講師

見仏開法

大本山増上寺法主 中村 康隆台下
今年の布教指針について
布教師会理事長 松田 等 照氏
阿弥陀経について
佛敎大学教授 坪井 俊 映氏

インドの宗教事情

大正大学助教授 佐藤 良 純氏

▼布教研究所の第一回月例研究会(公開)は、昭和五十九年十二月十五日(土)に明照会館の会議室にて行われた。大正大学教授・藤井正雄氏による「先祖供養と教化の問題」の講演があり、質疑応答が行われた。

▼布教研究所の月例の輪読会は、職員、研究員が中心となり、宗祖のご法語をとりあげ、すすめられている。

▼昭和五十九年度の浄土宗布教師大会は、昭和五十九年十月二十九日(月)、三十日(火)の両日にわたり、布教師会東北支部の担当により、盛岡市と花巻市において開催された。全国から一八〇余名の参加者があった。

◎大会日程

十月二十九日(月)

開会式

十三時

大挙伝道

十四時

全体会

十八時半

懇親会

十九時

十月三十日(火)

別時念仏

六時半

講演

七時十分

指導講演

八時半

特別講演

十時十分

閉会式

十一時半

◎大挙伝道

盛岡市の円光寺と大泉寺を会場として大挙伝道が行われた。左記の方々の布教実演があった。

(円光寺会場)

九州支部

石山秀雄

近畿支部

武田和清

東海支部

水谷大康

東北支部

渡辺民雄

理事長

松田等照

(大泉寺会場)

中・四国支部

西岡俊道

北陸支部

大門俊正

関東支部

正村英明

北海道支部

松岡瑞竜

◎講演は、東北地方にゆかりの深い「金光上人について」と題して、青森教区の佐藤堅瑞氏、指導講演は「三上人について」と題して、浄土門主藤井實應宛下、特別講演は「三祖記主良忠上人を仰ぐ」と題して、神奈川教区の大橋俊雄氏であった。

あとがき

種々の事情で五十九年度布教研究所の研究員の方の御推薦をお願いすることが大幅に遅れ、七月に辞令交付となりました。そのため九月上旬に行われる教学布教大会の準備時間もないまま、万止むを得ず研究テーマを与えずに、常日頃考えていること、なんでも自由に発表していただくようお願いしました。したがって発表された方々の意見も異なり、統一したものがないことも止むを得なかったのです。ただし、五十九年度より教学布教大会における研究発表は毎年出版することとし、六十年年度よりは統一された研究テーマで取り組んでゆきたいものと思います。

幸い各地区支部長さんのお骨折りで、第一線で活躍されている方々を研究所員として御推薦いただきましたことは、大変力強く感謝いたしております。また特に申し添えますが、主任に御就任下さった宮林昭彦上人、広井皖佑上人、主事に岡崎覚豊、羽田恵三、西岡信孝、小沢憲珠、大室照道の各上人等、錚々たる方々の御就任を得たことは大変恵まれたことと感謝すると共に、一同心を一にして邁進する所存です。

昭和五十九年度の布教研究所報をお届けいたします。

昭和六十年三月

浄土宗布教研究所長 板垣隆寛

編集後記

。浄土宗布教研究所所報の第一号は、後藤真雄前所長のご努力により、昭和五十七年五月号の『宗報』の誌上に掲載されました。今年より独立の所報として第二号を発刊いたしました。

。坪井俊映先生の「阿弥陀経に聞く」は昭和六十年二月の集中研究会のときにご講義をいただいたものを抜粋して掲載いたしました。

。研究所員の研究成果報告は、昨年の浄土宗教学布教大会の席上で発表いただいた要旨であり、発表されなかった方は各自の成果報告です。

。浄土宗教学布教大会において「三上人遠忌をどうむかえるか」と題して意見発表が行われましたが、これを編集して収録いたしました。

。なおこの所報は毎年発刊してゆく方針ですが、内容をより充実したものにしたいと存じます。各位のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

布教研究所報 第2号

昭和60年3月20日 印刷

昭和60年3月30日 発行

編集兼者 板垣隆寛
発行

印刷所 東京都千代田区
神田神保町3-10 共立社印刷所

発行所 浄土宗布教研究所

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

